高松市埋蔵文化財調査報告　第203集

徳島文理大学文学部・高松市連携協定調査報告書　第2冊

船岡山古墳群Ⅱ

（古墳時代遺物編）

2019年3月

徳島文理大学文学部・高松市教育委員会

例　言

1　本書は、船岡山古墳群発掘調査報告第２冊　船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）である。船岡山古墳群出土遺物のうち、古墳築造時期に帰属する埴輪および小形器種類を報告する。

2　古墳築造前の弥生時代資料若干と二次的な墳丘改変・再利用を反映する中世段階の資料は船岡山古墳群Ⅲ（総括編）に掲載する予定である。

3　調査経緯と経過、調査年次、調査担当者・参加者などは船岡山古墳群（遺構編）にまとめているので参照されたい。

4　発掘調査及び整理作業は、徳島文理大学文学部と高松市教育委員会が締結した連携協定に基づき実施している。

5　整理作業及び報告書の作成／編集は両者で協議して分担した。

6　船岡山古墳群（遺構編）は現地調査時の分担に応じて、徳島文理大学・大久保徹也と高松市・高上拓が各担当調査区を報告し、それを高上が総括して全体を編集した。
船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）報告資料の主たる遺物整理作業は高上の協力を得て徳島文理大学文学部で進め、船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）の執筆・編集は大久保が担当した。

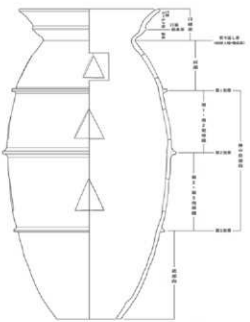
7　報告資料は、器形・部位等が判明する資料は、器形実測図（縮尺１／３）に器面／断面接写写真を組み合わせるスタイルで掲載した。器面調整等の実態提示を優先させたものである。また細片であっても、出土埴輪の型式学的特徴に直結する透し孔・線刻をとどめる資料などは掲載につとめた。それら小片は表裏面を写真撮影して、ほぼ縮尺１／２に揃えて掲載した。

8　胎土的特徴を示すため、報告資料全点について器面接写写真を掲載した。撮影はデジタルマイクロスコープを用い、約 65 倍で接写した写真を掲載倍率約 10 倍に揃え掲載した。また対比のため参考資料として空港跡地遺跡弥生後期土器１点、鶴尾神社４号墳壺形埴輪２点、稲荷山姫塚古墳埴輪２点の器面接写写真を第 62 図に加えている。

9　報文中の埴輪各部位の名称は基本的に右図凡例に拠る。

10　発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の諸氏・関係諸機関から御教示及び御協力を得た。記して深く感謝いたします。
宇垣匡雅　片桐孝浩　金澤雄太　川部浩司　蔵本晋司
栗林誠治　中嶋美佳　信里芳紀　乗松真也　禰宜田佳男
林正憲　春成秀爾　広瀬和雄　藤川智之　古瀬清秀
松本和彦　向井敏伸　森下英治　山本悦世
浅野小学校　大野東小学校　香川県教育委員会　香川県埋蔵文化財センター

11　本報告掲載資料は、両者の事前協議に基づいて発掘届に付記したとおり、船岡山古墳群Ⅲ（総括編）刊行後、一括して高松市教育委員会で保管する。今後、積極的かつ多面的に活用されることを希望する。



船岡山１号墳埴輪の基本形

目　次

第1章　船岡山古墳群出土埴輪類の概要
第1節　はじめに……1
第2節　出土量と本報告掲載点数……1
第3節　出土傾向と使用地点の推測……1
第4節　船岡山1号墳出土埴輪の形態的特徴と型式学的出自（写真）……3
第5節　整形・器面調整手法等の特徴……5
第6節　胎土調合パターンについて……6
第2章　船岡山1号墳資料　個別解説
第1節　埴輪類……7
第2節　小形器種類……67
第3節　埴輪　透し孔・線刻他資料（写真）……69
第3章　船岡山2号墳資料個別解説
第1節　埴輪類……79

挿　図　目　次

第1図　調査地点別報告遺物出土点数……2
第2図　船岡山1号墳出土埴輪　各部位サイズ……4
第3図　船岡山1号墳埴輪の形態とサイズ……4
第4図　1号墳　埴輪資料001……8
第5図　1号墳　埴輪資料001-2……9
第6図　1号墳　埴輪資料001-3……10
第7図　1号墳　埴輪資料002-1……12
第8図　1号墳　埴輪資料002-2……13
第9図　1号墳　埴輪資料003……15
第10図　1号墳　埴輪資料004～007……17
第11図　1号墳　埴輪資料008～012……20
第12図　1号墳　埴輪資料013～019……22
第13図　1号墳　埴輪資料020～040……26
第14図　1号墳　埴輪資料041～054……29
第15図　1号墳　埴輪資料055-1……31
第16図　1号墳　埴輪資料055-2……32
第17図　1号墳　埴輪資料056……34
第18図　1号墳　埴輪資料057-1……36
第19図　1号墳　埴輪資料057-2……37
第20図　1号墳　埴輪資料058-1……39
第21図　1号墳　埴輪資料058-2……40
第22図　1号墳　埴輪資料059-1……42
第23図　1号墳　埴輪資料059-2……43
第24図　1号墳　埴輪資料060-1……45
第25図　1号墳　埴輪資料060-2……46
第26図　1号墳　埴輪資料061-1……48
第27図　1号墳　埴輪資料061-2……49
第28図　1号墳　埴輪資料062～064……51
第29図　1号墳　埴輪資料065～068……53
第30図　1号墳　埴輪資料069～072……55
第31図　1号墳　埴輪資料073～080……57
第32図　1号墳　埴輪資料081～085……63
第33図　1号墳　埴輪資料086～091……64
第34図　1号墳　埴輪資料092～093……65
第35図　1号墳　埴輪資料094～095……66
第36図　1号墳　埴輪資料096～104……68
第37図　1号墳小形器種　資料105～109……68
第38図　写真　1号墳　埴輪資料110～121……71
第39図　写真　1号墳　埴輪資料122～135……74
第40図　写真　1号墳　埴輪資料136～149……77
第41図　写真　1号墳　埴輪資料150～152……78
第42図　2号墳　埴輪資料153～155……78
第43図　胎土写真01（資料001～008）……80
第44図　胎土写真02（資料009～016）……81
第45図　胎土写真03（資料017～024）……82
第46図　胎土写真04（資料025～032）……83
第47図　胎土写真05（資料033～040）……84
第48図　胎土写真06（資料041～048）……85
第49図　胎土写真07（資料049～056）……86
第50図　胎土写真08（資料057～064）……87

第51図 胎土写真09(資料065～072)……88
第52図 胎土写真10(資料073～080)……89
第53図 胎土写真11(資料081～088)……90
第54図 胎土写真12(資料089～096)……91
第55図 胎土写真13(資料097～104)……92
第56図 胎土写真14(資料105～112)……93
第57図 胎土写真15(資料113～120)……94
第58図 胎土写真16(資料121～128)……95
第59図 胎土写真17(資料129～136)……96
第60図 胎土写真18(資料137～144)……97
第61図 胎土写真19(資料145～152)……98
第62図 胎土写真20(資料152～155・
参考資料1～5)……99

表 目 次

第1表 掲載資料観察表1 (資料001～032)……100
第2表 掲載資料観察表2 (資料033～064)……101
第3表 掲載資料観察表3 (資料065～096)……102
第4表 掲載資料観察表4 (資料097～128)……103
第5表 掲載資料観察表5 (資料129～155)……104

第１章　船岡山古墳群出土埴輪等の概要

第１節　はじめに

船岡山古墳群Ⅱ（古墳時代遺物編）では埴輪等の１・２号墳築造時の遺物類を報告する。報告（遺構編）で既に示したとおり本古墳群は中世以降、かなり大掛かりな改変を蒙っている。１・２号墳に伴う埴輪等の古墳時代前期遺物の他、古墳群各所から墳丘改変と再利用の形態・時期を反映する中世土器類も一定量出土しているが、それらは報告書Ⅲで報告する。

報告資料の個別解説に先立ちまず掲載資料の概要を述べ、あわせて船岡山１号墳埴輪の特徴について予察的に論及しておくことにする。

今回報告する古墳時代遺物の大半は埴輪類であるが、少数の短頸壺など小形器種を伴う。同一個体片が一定程度集中出土し形態の過半が判る埴輪数点が存在するが、土器・埴輪類の全形復元が可能な資料はない。築造当初の使用状態を直接示す出土状況ではなく、破損と二次的移動が著しい。多くはごく限定された部位の断片でしかない。トレンチ方式という調査方法も一因だが、それ以上に後世の墳丘改変・再利用の影響が大きいことに間違いはない。

第２節　出土量と本報告掲載資料点数

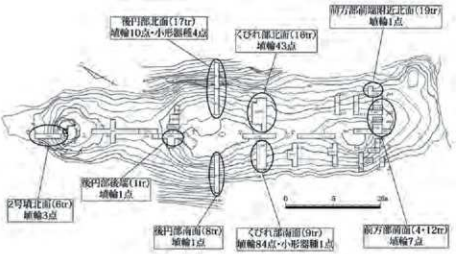
これまでの船岡山古墳群調査で出土した埴輪等古墳時代資料の総量は 28/32 コンテナで約 30 箱前後分に達する。このうちより小規模なトレンチ調査にとどまる２号墳関係資料は同上コンテナ１箱分にすら満たず多くとも全体の１～２％にすぎない。ちなみに報告書Ⅲに掲載・報告予定の後世の墳丘改変／再利用に関係する中世土器類の出土総量はコンテナ１／２程度である。

本報告では上記した古墳時代資料から 155 点を掲載・報告する。内訳は１号墳出土資料 151 点、２号墳出土資料３点である。また１号墳資料では埴輪 147 点、その他小形器種４点、２号墳３点は全て埴輪小片で、他に地点不詳資料１点を加えている。比較的小片であっても、部位の特定が可能で、かつその形状や特徴ある整形・調整手法を示す資料の掲載につとめた。また細片でも本古墳群出土埴輪の重要な特徴、透し孔、や線刻文、刻目突帯を一端にとどめる資料を極力掲載した。

第３節　出土傾向と使用地点の推測

１号墳関係の報告・掲載資料 154 点（地点不詳１点を除く）の出土地点を確認しておこう（第１図）。後円部～くびれ部で 143 点と全体の約 95％を占める。前方部では前面附近の４・12・19tr の８点のみで前方部両側面の各調査区（北 14・15tr、南５・11・15tr）では器種あるいは部位不詳の小片若干数を見るだけで上記した抽出基準を満たす程度の資料は皆無であった（第１図）。埴輪片の圧倒的大部分は後円部に集中し、さらに両くびれ部　北面 16tr43 点　南面 9tr84 点　計出土資料は後円部のそれの 88％に達する。なお以上述べた地点別報告資料数は検出埴輪等総量の地点別出土傾向に相応する。

報告（遺構編）で詳述したように後世の後円部墳丘上半の攪乱と削平に伴い、そこから排出された大量の土砂で両くびれ部はほぼ完全に埋め尽くされ、調査着手前の地表観察では原形をほとんど把握できなかった。埴輪等はくびれ部を埋めた墳丘材（盛土起源土砂と外表装飾石材）に混在して出土した。比較的良好に遺存する墳裾板石積み、墳丘中位段、板石積みと円礫敷平坦面を検出したにものの、埴輪類を墳丘裾や墳丘中位段に据え置いた状態は観察できなかった。したがって大半を



第1図　出土地点別埴輪等報告点数

占める両くびれ部出土埴輪は原位置（使用地点）から遊離した二次堆積資料と見ざるを得ない。

また総量の点でくびれ部にははるかに及ばないが、後円部北面の17trでは一定量の埴輪等を検出した。調査区の後円部上面分では現地表下約0.7～0.8 mまで中世の撹乱が及んでいる。このレベルまで一旦墳丘上部を削り、その後削平排土で埋め戻している。撹乱土中には墳丘外表を被覆した石材や墳丘芯部を構成した大形礫を多量に含み、砕片化した埴輪等と埦・小皿等の中世土器が混在して出土した。さらに内面に水銀朱の付着する小形無頸壺片などの小形器種類断片が少量共伴する。高松茶臼山古墳例などから古墳出土の内面朱付着土器は埋葬儀礼の一過程と深く結びつくもので、埋葬施設に伴うことが多い。17tr撹乱再堆積層に内面朱付着小形短頸壺を含むことは、中世時の墳丘改変が埋葬施設の毀損に至ったことを示唆する。またたとえ砕片化が著しいとはいえ一定量の埴輪類が混在することは、埋葬施設周辺を含めた後円部墳頂で埴輪類を主に使用（配置）したことを強く推測させる。くびれ部両側に分厚く堆積した後円部墳丘削平排土から大形片を含む多量の埴輪類が出土することもこの推測を支持するものである。

では墳丘他地点の埴輪使用状態はどうであろうか。中世時の埋葬施設を含む後円部墳丘上半の相当規模の大きな改変を考慮すれば、この段階で埴輪等の一部が墳丘各所に飛散・遊離したであろうことも一応は想定しておかなければならない。後円部後端（1tr他）や著しい改変を蒙っていない後円部南面（8tr）のあまりに僅少な出土量は、既述したくびれ部に同じく埴輪類の墳裾等配置を否定させる。前方部の両側縁でも同様に埴輪類使用を推測する材料はない。一方、前方部前面では限定的な出土量ではあるが、埴輪を配置した可能性が窺える。12trの一部で前方部墳丘前端に設けた板石積み段の存在が推測でき、かつそれらの崩壊と部材の堆積状況が詳細に観察された（遺構編写真3-53～56・60p）。板石積みの様態を一定とどめたまま前面に倒れ込み、その一端は墳裾基底面に接する。かなり早い段階の崩壊と判断できる。崩落石材に絡んで若干の埴輪片が出土した。後円部上よりよほど少数であろうが一定数の埴輪を前方部墳丘の前端附近に用いた可能性が高い。以上から、船岡山1号墳でにおいては、墳丘裾に埴輪（壺形埴輪）を配列する鶴尾神社4号墳や野田院古墳等とは異なった埴輪類の使用パターンを復元すべきである。

個体数の推計は非常に困難である。埴輪の本質的性格 - 儀器化した土製品の同種多量の使用 - に由来して、実用的諸器種に要求される成形・整形・調整工程の精密度が期待されない。製作時の省力化／粗雑化が前面に現れ、実際、一個体内の同一部位で形態面の統一性を欠く場合がある。このことが出土資料の数量的限界以上に個体数の推算を難しくする。とはいえ、比較的形状を復元できた点数から、報告資料分に限ってもおおよそ20個体前後を想定しても過大ではない。未掘部のな

お埋蔵分や立地等から少なくないとみられる転落／流出分を考慮して１号墳の使用埴輪類が 30 個体を下回ることはないと想像する。墳丘長 43.9m の小形前方後円墳としてはけっして少なくない。しかも大半が復元径 10 m強の後円部墳頂で集中的に用いられたとみられる。埴輪＝土製儀器の同種多量使用（配列）を十分に強調するものであったといえる。

なお小形器種類出土量の僅少さについて若干言及しておく。出土地点から使用位置は後円部埋葬施設周辺と推定できるが、確認破片数があまりにも乏しい。限定的な調査とはいえ埋葬施設周辺の相当な毀損を考慮すれば小形器種の限定的な使用を想定せざるを得ない。鶴尾神社４号墳や先行する弥生墓に小形器種の使用状況とはもはや違った段階に到達していることを想起させる。

第４節　船岡山１号墳出土埴輪の形態的特徴と型式学的出自（予察）

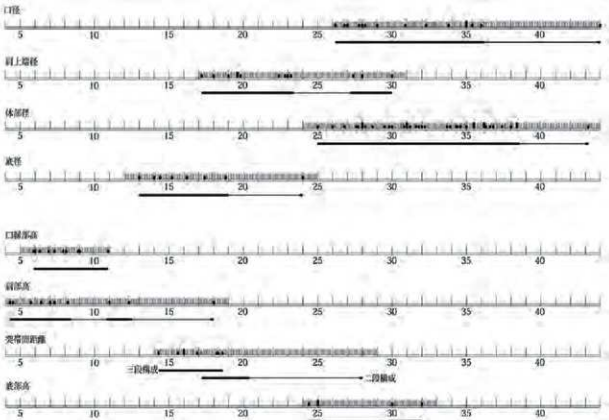
２号墳ではごくわずかな埴輪小片をみるだけで詳細な検討は不可能だ。以下は１号墳資料の所見である。船岡山１号墳出土埴輪は細部に一定の差異を見いだせるが、基本形態レベルでは統一的といえそうだ。基本形はある種の壺形土器にみるような二重口縁形態を器体上部に取りつけるものである。一見、朝顔形円筒埴輪を想起させるが、口縁部及び器体部の形態ともに朝顔形円筒埴輪とは大きく相違する。朝顔形円筒埴輪は特殊器台形円筒埴輪に壺（形埴輪／形土器）を載せた様態を一体的に成形・表現して成立する。朝顔形に転化する壺（形土埴輪／土器）は原則として外傾・外反して長く延びる頸部を具える。また二重口縁形態を呈する大半の事例では朝顔形化の段階で壺頸部と口縁顎部が一体化し、両者の区分は解消する。要は円筒形の器体上部に壺を表象する部位（口頸部）を誇張気味に取りつけることに重点をおく。

船岡山１号墳資料では朝顔形円筒埴輪と同様に器体上部に強く内彎／内傾する部位を設けるが、口縁顎部を直接接続し、朝顔形円筒埴輪の特徴、大きく発達した頸部を欠く。別種の二重口縁壺を器台に接合した形態とみれば、型式創出の根幹は朝顔形円筒埴輪に通じると解せなくもない。しかし体部形態を含め検討すると朝顔形円筒埴輪との相違が明確になる。

体部は上端が強くすぼまり、体部最大径（突帯部）がおおよそ 30㎝強に達するのに対し、上端部径は大半では 25㎝未満にすぎない。底部径も多くが 20㎝未満で体部最大径のおよそ６割弱だ。器体の上下両端が強くすぼまり、円筒形と云うよりもむしろ紡錘形を想起させる形態である（第２図）。下端から口縁直下までの体径が極端に変化せず円筒形を基本とする（特殊）器台形埴輪／普通円筒埴輪の形態とは大きく異なる。また奈良県東殿塚古墳資料を典型とする定形化末了の初期朝顔形円筒埴輪では二重口縁壺＋器台形円筒の原形に起因する器台形口縁の痕跡的表現 - 体上部の近接突帯や断面鍵形の体最上位突帯 - をまま具える。しかし船岡山１号墳埴輪にかかる痕跡表現はなく、この点も加味して総合的に評価すれば、やはり船岡山１号墳埴輪は、二重口縁壺＋（器台形）円筒埴輪の一体的造形＝朝顔形円筒埴輪と区別しておかなければならない。

では船岡山１号墳埴輪の型式学的出自をいずれに見いだすべきであろうか。今少し詳しく各部の形状やサイズなどを再確認して，その後に見通しを示すことにしよう。

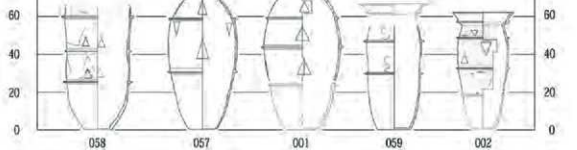
口縁部は短い顎部と少なくともその２倍超に達する長い立ち上がり部からなる。一例、口径 44㎝の特大品が存在するが他は 26 ～ 35㎝の幅に収まり、体部最大径に及ばない。特大品を除き高さも６～９㎝にとどまる。対する体部高は 50㎝台から 70㎝前後と推測できる。口頸部を誇張気味に拡張する朝顔形円筒埴輪との差異は大きい。体部に２ないし３条の突帯を配し３～４帯に区画する。内彎／内傾する体最上部（肩部）高は体中位部の突帯間隔に比べ目立って低い。後者 14㎝



第２図　船岡山１号墳埴輪各部のサイズ分布グラフ

台～ 28㎝台に対して前者は例外的な特大品を除き４～ 12㎝台に収まる。ちなみに体中位突帯間隔は突帯三段構成資料で 14 ～ 19㎝台、二段構成資料で 17 ～ 28㎝台を測る。下部突帯以下の底部の高さは 24㎝台～ 32㎝台で中位段各部よりずっと長い。底部高は体中位の突帯間距離の 1.3 ～２倍に達し、肩部高は１/３～２/３程度に過ぎない（第２図）。

全形の復元可能な資料を欠くものの、欠落する口縁部や底部段を各平均値で補い推測すれば、少なくとも全高 80㎝前後級と一回り小形の 60 ～ 70㎝級の二種は復元できる（第３図）。なお口縁部片、肩部片で各一点の特大品（第 11 図資料 012、第 17 図



第３図　船岡山１号墳埴輪の形態とサイズ
＊破線表示は推定復元部

056）があり、これらが他個体と同形であれば前記とは別に復元全高１mを越える大形埴輪が存在することになる。

透し孔は中位各段に必置だが、肩部は省略する事例がある。一方、底部段には透し孔を設けない。孔数／段は一様ではなく４～８方の差があり、狭い肩部では配しても孔数を減じることがある。なお透し孔は三角形と巴形の二種に大別できるが、同一個体で両者は共存しない。特殊器台・特殊器台形埴輪では一個の文様帯で両者が共存するが、船岡山１号墳埴輪ではこの関係は解消されているわけだ。なお透し孔の二者、巴形／三角形の数比に大きな差異はない。また透し孔の周囲に沈線文を加える事例がある（資料002第７図、資料055第15図、資料058第20図、資料062第28図他）。大半は単線表現で、かつ特殊器台・特殊器台形埴輪文様帯のように複線を以て透し孔間を連結する構成は見出せない。肩部や底部を含め、透し孔から遊離し、沈線文を単独で施すこともない。つまり孔形や周囲の沈線文を特殊器台・特殊器台形埴輪に由来する文様要素とみた場合でも、彼我の型式学的距離は大きいと見なさざるを得ない。

以上言及してきた諸点を勘案して、船岡山１号墳埴輪の基本構成を次のように捉えることができるだろう。第一に器体を三部に構成している。内彎する低く短い肩部、上下を突帯で画した中位の直立部（この部位を上下二帯に分割することも多い）、下端で強くすぼまり中位部を凌駕する長い底部である。文様総体がひどく簡略化しその分判りにくいが、中位部は、文様帯という意味で肩部に優越する。つまり文様帯を体中位の連続する１ないし２段に集約する傾向と云いうる。特殊器台に淵源し円筒埴輪まで引き継がれる、長い筒状に設えた器体を水平突帯で画し、複数段の文様帯が間帯を介して配置される施文パターンは、船岡山１号墳埴輪には反映されていない。

整形・器面調整手法にも多々注目すべき点があるが、基本構成を理解する上で欠かせない底部下端の執拗な整形についてまず言及しておく。埴輪等大形土製品では積み上げ成形時に自重で下端附近にまま潰れ・変形が生じる。これも一因で、特殊器台形埴輪等では内面ヘラ削り整形を多用する。船岡山１号墳埴輪も例外ではないが、器体内面の広範囲に及ぶヘラ削り整形とは別に、内面下端附近で殊更に横削りを細かく繰り返す。それはしばしば外面に及び、底部下面をヘラ切りすることも少なくない（第33図資料090）。この手法は特殊壺／特殊壺型埴輪の底部穿孔縁辺の整形に通じる。特殊器台形埴輪／円筒埴輪では通常ここまで執拗な底部整形を加えない。

以上指摘した内容から、船岡山１号墳埴輪の基本形は特殊壺（形埴輪）に由来すると推測する。基幹とする特殊壺（形埴輪）の形態に、特殊器台（形埴輪）の要素 - 円筒形器体と文様 - を組み込み、その結果、壺体部は極端な筒状化を遂げる。しかし底部穿孔の様態はなお化石化して残る。朝顔形円筒埴輪で頸部と口縁顎部が一体化したように、ここでは壺肩部と頸部の一体化が生じた。そうして口縁部を朝顔形円筒埴輪のようにデフォルメしない船岡山１号墳埴輪の基本形が成立する。

整形・調整手法等のより詳細な検討と相前後する時期の関係資料と対比して、報告書Ⅲ（総括編）でより踏み込んだ評価をおこなう予定である。ここでは以上の予察的所見にとどめておこう。

第５節　整形・器面調整手法等の特徴

続いて整形・器面調整手法その他に看取される特徴の二三についても触れておきたい。口縁部～肩上部の内外面は総じて横ナデ仕上げとなる。体部外面は概ね縦方向のハケ調整で仕上げ、内面は下端から肩部の半ばあたりまでヘラ削りを施すことが多い。ただし肩上端に達する例は少なく、体中位より上では削りはかなり粗雑で調整の間隙もまま残る。肩部から中位では先立ってハケ調整を

加えた事例も散見される。後述する叩き締め整形の点も含め、精緻な磨き仕上げこそみられないが器面調整手法は弥生時代後期後半～古墳時代の通常の壺・甕類のそれと通じる点は少なくない。

体部外面のハケ調整については突帯貼付前／後の調整事例が共に確認できる。資料151（第41図）などが前者の、資料152（第41図）、資料001（第6図）などは後者の典型例である。ただし完存品がない原状では、これが個体差もしくは個体内の部位差か判断には今少し検討が必要だ。また資料150（第41図）のように同一個体で二種のハケ原体を併用する事例が複数確認できることも指摘しておこう。

叩き締め整形の採用事例が複数確認できる点も注意しておきたい。資料057（第19図）、資料072（第30図）が典型例である。この手法は古墳時代前期の埴輪類では希少だが、弥生後期～古墳前期の中大形壺・甕類の製作ではごくありふれた手法である。それらでは明瞭な叩き締め痕跡＝叩き目が残るような刻み目付原体を必ずしも用いないことを踏まえると、叩き締め整形を加えた個体はもう少し多いのかもしれない。なお資料059（第22図）、資料073（第31図）の内面特殊圧痕は叩き締め技法と関連する可能性がある。叩き締め技法を駆使する弥生後期中葉以降の香東川下流域産土器（中形壺・甕類）では叩き締め部位内面で、これと類似した細隆線を伴い明らかに指頭圧痕と区別できる特殊な圧痕がまま観察される。現状では香東川下流域産土器に限って観察される製作上の痕跡である。技術系譜の点で両者が関係するのであれば興味深い。

最後に突帯形状にも触れておく。高く突出してほとんど鍔状を呈する断面形状は多くの特殊器台・特殊器台型円筒埴輪と大きく異なる。また少数例だが突帯頂部に刻み目を加える点も同様である。形態的にはむしろ弥生時代後期後葉～古墳時代前期で一部の中大形壺に付加する頸基部突帯に近似する点にも留意しておきたい。

第6節　胎土調合パターンについて

第43～62図に報告資料全点の器面接写写真を掲載した。全体的に中粒・細粒砂を稠密に混合する点が基本的な特徴である。総じて混和砂粒の円磨度が低い。これは水流による摩耗が進行した川砂などではなく、礫を粉砕した「人造」砂粒を調製・混合した可能性が高い。大形品ゆえ粗粒混合物がやや目立つが、このような特徴は少なくとも弥生時代中期後葉以降の高松平野及び周辺地域の主流的な胎土調合パターンに通じるものである。その一方、前期後半新相期以降の定形化した円筒埴輪－岩崎山4号墳，今岡古墳、富田茶臼山古墳資料などーでは、一般に細礫級の粗粒混和材がかなり目立ち、細粒砂以下が減少する傾向が看取される。儀器＝埴輪が胎土調製レベルでも日用実器から距たってゆくことを示すのだろう。

鉱物種の点では角閃石粒が目立ち、一見すると香東川下流域産土器群に似通う。しかし同土器群では船岡山1号墳埴輪より角閃石粒量がはるかに卓越する。その一方、雲母片は皆無かごく微量で肉眼観察ではほとんど確認できないことが一般的である（第62図参考1）。船岡山1号墳埴輪では角閃石粒に準じるか、同等程度に粗粒～細粒の雲母片を含む事例（第45図019等）が少なくなく、同様に石英と見られる半透明白色粒を多く含む（第48図047、第57図114等）傾向が明らかに看取できる。とくに後者では角閃石粒を凌駕する粗粒が目立つ。こうした点に注意すれば香東川下流域産土器との相違は明らかである。また船岡山1号墳埴輪よりは香東川下流域産土器群の胎土に近似する石清尾山古墳群の埴輪（第62図参考資料2～4）とも、一定相違することには特に注意しておきたい。

第2章　船岡山1号墳資料　個別解説

第1節　埴輪類

資料001　9次16tr　第4～6図　胎土第43図

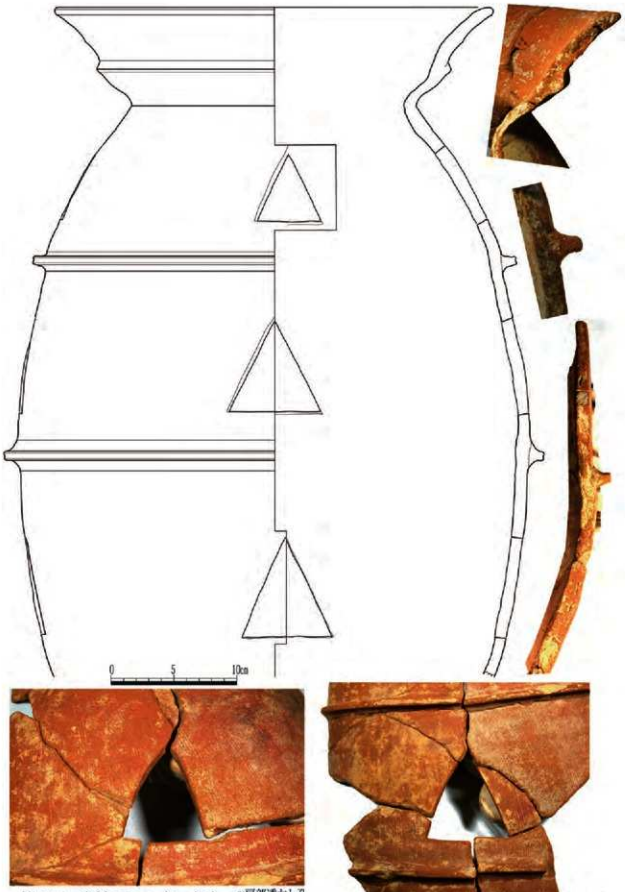
概要　口縁部からほぼ第3突帯直上附近までを復元できる個体である。底部段に透し孔を穿つ例は無く、肩部及び第2突帯上下に透し孔を配する本例は、破片下方にもう一条突帯が巡るとみられ、全体として3条突帯構成と復元しておく。口縁部径35㎝、肩上端22.8㎝、第1突帯径38.4㎝に対して最も張りを強める第2突帯では口縁径を凌駕して径43.2㎝を測る。また口縁部高7.9㎝、肩部高12.3㎝、第1・2突帯間15.6㎝、第2・3突帯間は16.9㎝以上と、体部に対して口縁部は小ぶりである。およそ第2突帯を境に上下ともに内彎気味にすぼまるので、全体として円筒形というよりも長胴甕体部を彷彿とさせる形状である。残存高は約53㎝で、第3突帯以下を加味すれば全高は75㎝以上に達するだろう。器厚は肩部で概ね11mm、第1・第2突帯間9～10mm、第2・(推定)第3突帯間8～9mmと肩部が少し厚くなる。

各部の形状　口縁立上り部は強く外反して大きく開く形状で、結果として顎ー立上り部の屈曲は目立たない。立上り基部の器厚11mm、先端附近9mmとわずかに薄くなり端部は尖り気味に丸く収める。肩部上端からやや緩く折れて開く顎部は基部の器厚7mmに対して先端部は10mmと鈍く肥厚する。上端をわずかに摘み上げて端部に面を設ける。立上り基部を顎部先端の上面に載せて接合する。

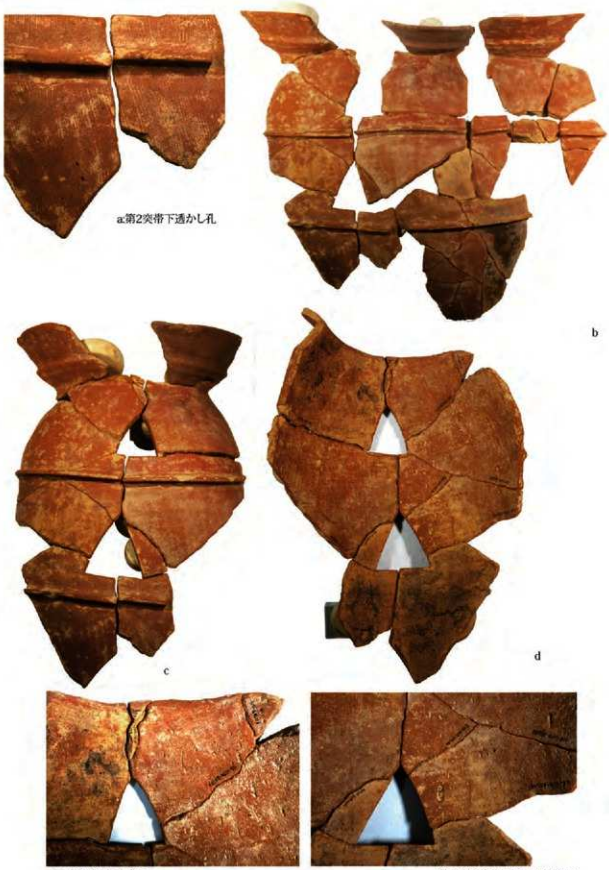
肩上端の折り返しは比較的緩く口縁顎部は長3.8㎝と斜めに短く開く。立上り部はごくわずかな外反傾向を以て開くが、長5.8㎝とあまり長くない。端部は丸く収める。また立上り基部を顎上面に載せるように接合する。第1突帯は基部幅15mmでやや裾が広がるが高12mmを測り、台形様をなす。部は明瞭な凹面をなすのでM字形に近い。第2突帯も同巧だが基部幅17mm高11mmとやや低い。貼付はやや粗雑でともに下面側に空隙を多くのこす。

文様　透し孔は全て上向き三角形でそれらを概ね縦列に肩部を含め計三段で、各4孔ずつ配置する。しかしその配置は必ずしも整わずズレが生じている。少なくとも残存片では透し孔に取り付く沈線文は確認できない。比較的残りの良い肩部では部分的なものを含め上向き三角形透し4孔が残る。いずれもやや縦長の二等辺三角形で左右の側辺は内彎傾向を帯びる。一応、4方に配置するが、間隔は16㎝、17㎝、20㎝以上の差があり、透し孔底辺と第1突帯(上裾)の間隔も各々2.4㎝、2㎝、1.5㎝、2.7㎝となる。また透し孔サイズも底辺5.2㎝高7.7㎝、底辺6㎝高8㎝、底辺7.5㎝高6㎝と一様ではない。第1・第2突帯間では2孔のサイズが判明する。ともに底辺7.2㎝高7.7㎝で、透し孔底辺と第2突帯(上裾)の間隔も2.5㎝と差は無い。第2・(推定)第3突帯間の透し孔も底辺7.5～8㎝高8㎝前後と推定される。各段ともやや下寄りに透し孔を穿つ傾向がある。

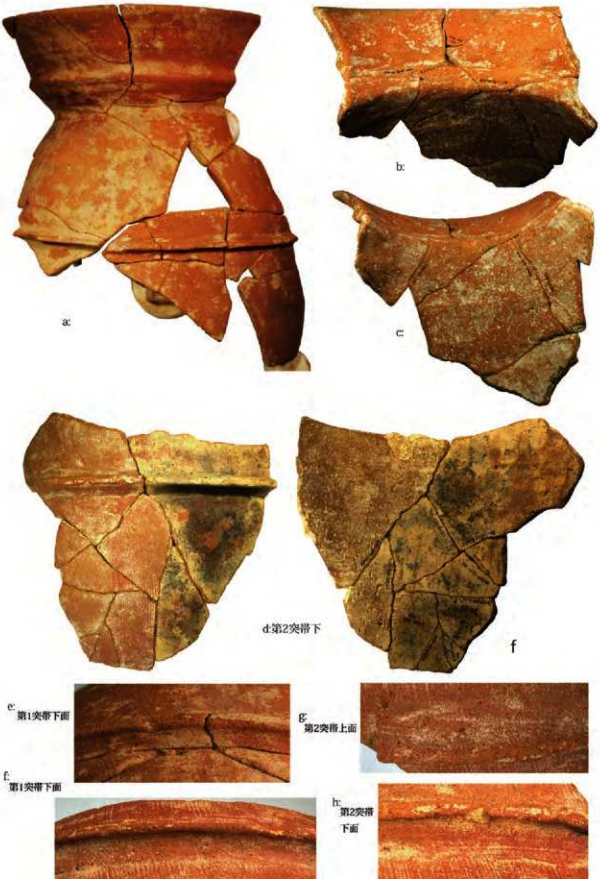
製作手法　体部外面全体に左傾気味に6条/㎝のハケ調整を施す。使用原体の幅2㎝前後と推測される。調整は肩部では第1突帯剥落面にハケ目が観察され、貼付横ナデにより裾に接するハケ目が消されるので第1突帯貼付前となる。しかし以下は貼付後となる。第1突帯下面と第2突帯上下面には貼付横ナデ後に突帯裾に被さるハケ目が明瞭に読み取れる、さらに第2突帯剥落面にハケ調査の痕跡が認められない。いずれにしても穿孔はハケ調整後となる。肩部と第1・第2突帯間では、この間を一回の動作で調整する。間隔の大きい第2突帯下のハケ調整は上下二段に分かれる。口縁部外面は横ナデ仕上げで、肩上部に及び選考するハケ調整を消す。内面も横ナデ仕上げだが立



第4図　資料001-1（1／3）　a:肩部透かし孔　b:第1・第2突帯間透かし孔



第５図　資料 001-2（１／３）



第６図　資料 001-3（１／３）

上り部から顎部の広い範囲にハケ目状の横走する条線が散見でき、先立って横ハケ調整を加えたとみられる。体部内面は穿孔後に縦削りを施し、肩上部～第２突帯下を概ね三段に削る。肩上部では顎部から続く横ハケ調整・横ナデ仕上げ及び塗布顔料の一部までを削り込んでいる。

外面は口縁部から第２・(推定) 第３突帯間まで塗布した赤色顔料比較的良好に残る。内面は顎部下端まで顔料を塗布し、以下にはその滴が垂れるが、多くは前述の削りによって刮ぎ落とされている。整形手法は本個体は他例と異なるところがないが、手順の点で外面ハケ調整、内面ヘラ削りのタイミングが他の大多数と異なる。

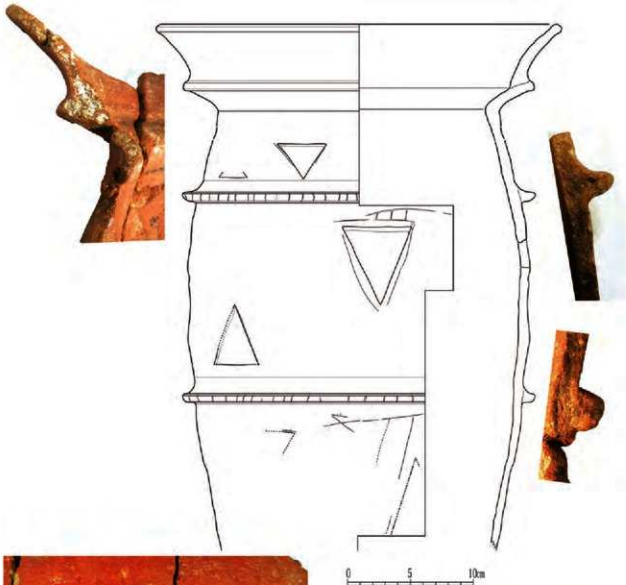
資料 002　5次 9tr　第７・８図　胎土 43 図

概要　透し孔と沈線文の配置から三段突帯構成と推定できる個体で、口縁部から第２・第３突帯間の半ばまで復元できる。口径 32.3㎝、肩上部（顎基部）径 22.4㎝に対して第１突帯部径 28.2㎝、第２突帯部径 28㎝を測る。口径が体部最大径を凌駕するやや細身で小ぶりな形である。口縁部高 6.9㎝、肩部高 7㎝、第 1・第２突帯間 16㎝で残存部の全高は 42㎝となる。体部の器厚は肩部から第１・第２突帯部の中程までは８～９mm だが、以下では厚６～７mm と薄くなる。後述する内面調整の状況と対応するようだ。

各部の形状　顎部は長３㎝前後でわずかに反り気味に開く。器厚は７mm で、先端の鈍く摘み上げるともに下端を小さく突き出し端部に面を作り出す。立上り部は鈍く外反して開き、端部をわずかに外方に肥厚気味に収める。基部厚 10mm に対し端部附近は 6mm 前後と薄くなる。立上り基部を顎部上面に載せて接合する。肩部はほとんど直線的に内傾し上記のとおり長くない。上端の折り返しは緩くやや鈍角となる。

第１突帯は内傾する肩部と少し斜行するように取り付き、上面がやや反るように水平に延びる。貼付は丁寧で下裾側にも接合時の空隙を残さない。基部幅 15mm、高 12mm と台形様を呈するが端部を丸く収める。頂部に細い刻み目を巡らすが間隔は８～ 12mm と揃わない。第２突帯はほぼ同形だが基部幅 15mm に対して高 10mm 前後とやや低い。やはり頂部に不揃いな刻み目を巡らす。

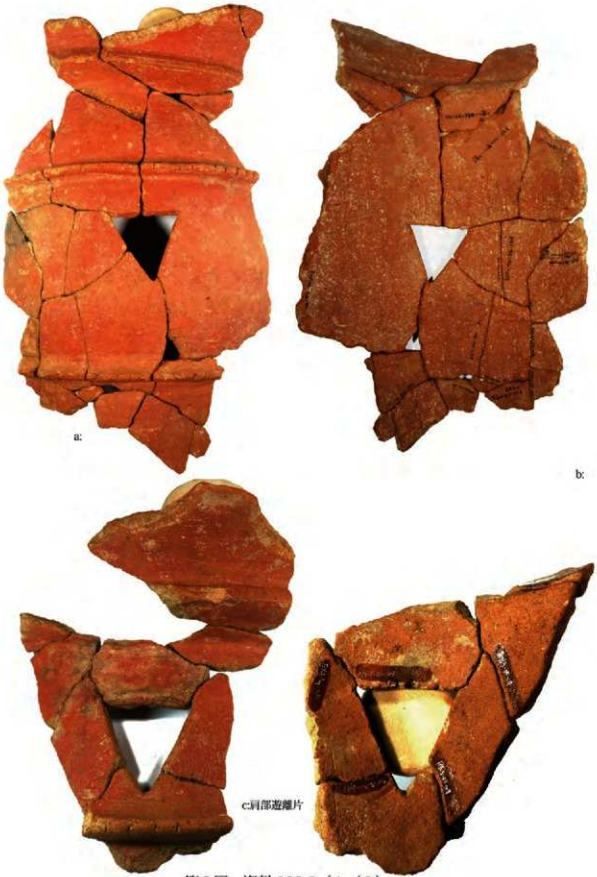
文様　肩部の透し孔は断片を含め３孔分、下向き三角形透し孔２、上向き三角形透し孔１である。しかしうち１孔分は接合不可な破片である。位置関係がわかる２孔はごく一部が残るにすぎないが上向き・下向きである。両者は１／４周以上を離れるので３方配置の可能性がある。遊離破片だが完存する一例は小ぶりな下向き三角形で底辺幅 4.5㎝高 4.8㎝で下端は第１突帯の上裾に接する。透し孔の両側にほとんど孔縁辺に接するように細い沈線がみえる。両者とも明らかに透し孔の切り込み時に潰れており他個体の沈線文とは異なる。穿孔仕付け線の可能性がある。底辺のみ残る上向き三角形透し孔も同じ程度のサイズとみられる。わずかに内彎気味に立ち上がる第１・第２突帯間では上下二段に下向き・上向き三角形透し孔各１が残る。下半に配した上向き三角形透し孔は肩部の上向き三角形透しと縦位置がほぼ揃うが、上半の下向き三角形透し孔は肩部のそれとは確実に揃わない。両者の間隔から推測すれば、各３孔の６方配置と復元できる。完存する下向き三角形透し孔は底辺、高さとも 5.5㎝でほぼ正三角形となる。底辺位置は第１突帯直下から 2.5㎝距たる。一方の側辺のみ残る上向き三角形透し孔も同大とみられる。前者透し孔の外周には沈線文が取り付く。まず透し孔各辺に沿うように細い沈線を配する。やや彎曲しながら延び、孔外縁から１～５mm 離れる。また底辺側外周線の中程より派生するような別の１線が緩く弧を描いて左方に長く延びる。これに底辺外周線と弧線をつなぐ３本のやや右傾する短線が加わる。透し孔を取り巻く一連の沈線文と捉えるのが素直ではあるが、側辺外周の２線に限って一部に潰れが見られるので、穿孔前の仕



a:第1/第2突帯間
透かし孔/線刻

b:第2突帯下線刻・透かし孔

第7図　資料002-1（1／3）



第8図　資料002-2（1／3）

付け線であって底辺外周の沈線文と区別しておくべきかもしれない。上向き三角透し孔の遺存する右側辺でもほとんど孔外周に接するようにごく細い沈線がみえる。やはり潰れがあり肩部のそれと同様の穿孔仕付け線とみられる。第２突帯下にも上・下向き三角形透し孔各１の一部がのこる。いずれも断片でサイズ等は定かではない。残りが悪く断定できないが、２孔の配列は一応上位段に準ずるようにみえるので、同様に６方配置の可能性がある。ただし縦位置は厳格に揃えているわけではない。微妙に下向き三角形透し孔の底辺は第２突帯直下から 2.5㎝の間隔に位置し孔外縁から２mm 離れ比較的明瞭な沈線１条が併行する。右辺の一部のみ残るもう１孔は第２突帯から少なくとも５㎝の位置まで続くので第１・第２突帯間のそれよりも大ぶりであるらしい。後者上向き透し孔の左方に一連の沈線文が残る。第２突帯直下から 1.2 ～ 1.5㎝の間隔を以てやや左下がりに配した横線があり、そこから 2.5㎝前後の間隔で併走する２条が左下に延びる。右側沈線と透し孔外縁の間隔は８～ 14mm で厳密に併行はしていない。

製作手法　口縁部内外面は横ナデ仕上げでだが、内面立上り下半～顎部には７～９条／㎝程度の横ハケ調整の痕跡が残る。肩部外面は７～８条／㎝の縦ハケ調整を施した後に全体を横ナデ調整で仕上げる。ハケ調整末端がわずかに第１突帯上裾に被る部分もあるが、緻密な突帯部を含む横ナデ仕上げのため貼付との前後関係は確定できない。第１・第２突帯間では肩部より目の細かい 15 条／㎝程度の細密な縦ハケ調整が観察される。この間を概ね三段で調整する。明瞭に第２突帯上裾に被るハケ調整端部が確認でき、第２突帯貼付後の器面調整であることがわかる。第２突帯下部もこれと同等原体の縦ハケ調整がある。その一部は第２突帯下に潜っており調整は貼付に先立つ。内面は下から肩部の半ばまで縦に削り上げる。ただし第１・第２突帯間の半ば附近を境に以下では重ねて削るようだが、以上では粗くなり、肩部内面では削り自体が疎らになる。そのため内面に先立って施した８条／㎝前後の横ハケ調整痕跡を良く残す。外面は全体的に塗布赤色顔料がよく残る。一方内面では口縁立ち上がり部に確認できるものの顎部以下では観察できない。

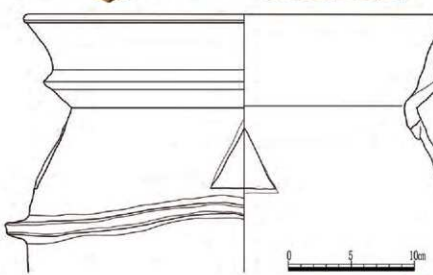
資料 003　9次 16tr　第９図　胎土 43 図

概要　口縁端部から第１突帯下までが残り、残部高は約 20㎝となる。口径 35㎝、顎部径 31.8㎝に対して肩上端（顎基部）径 27.4㎝と体部上端の絞り込みは弱い。口縁部高 8.1㎝、肩部高 7.3㎝で第１突帯部径は 38.2cm を測る。

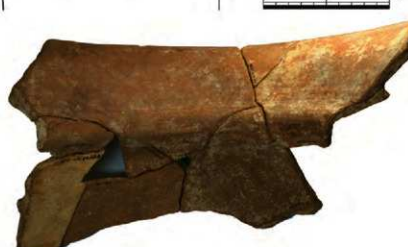
各部の形状　口縁立ち上がり部は高 5.5㎝で反りと開きは弱い。長 3㎝の顎部は基部厚８mm に対して先端は 11mm で上端を小さく摘み上げ端部に面を設ける。立上り基部を内方に引き延ばして顎部上面に載せ接合する。立上り基部厚は 10mm で先端附近で厚８mm に減じ，端部は外方に小さく肥厚させつつ四角く収める。肩部は内彎して緩く絞り込まれ、上端の折り返しは緩い。粘土帯の接合部にあたり上下が重なる肩上部は器厚 11mm に達するが、第１突帯直上では器厚は８mm 前後となる。第１突帯下ではさらに器厚を減じ破片下端では 6mm 前後になる。第１突帯の基部は幅 15mm 前後と広いが、突出度も大きく高 18mm を測り頂部にはやや外傾する面を作り出す。

文様　肩部には上向き三角形透し孔を４方に配置する。第１突帯下の残部はわずかでこの部分には透し孔は確認できない。肩部の三角形透し孔は底辺幅５㎝高さ６㎝で、下辺はほとんど突帯上裾に接している。透し孔に取り付く線刻はない。

製作手法　口縁部の内外面は横ナデ仕上げで、顎部内面にはごく一部ハケ目状の条線が残る。仕上げに先立つ横ハケ調整かもしれない。体部は器表が荒れ器面調整の詳細を観察しづらいが肩部外面には７条／㎝程度の縦ハケ調整が認められ、同様の調整が突帯下方にも一部残る。突帯上下の強い



003



第9図　口縁部資料01（1／3）

横ナデでハケ調整の痕跡は完全に消されており、貼付前の調整とみられる。ハケ調整後に穿孔する。肩部内面には上記した粘土帯接合痕が明瞭な段をなして残る。穿孔前に第1突帯下から連続して左傾気味に削り上げており、その末端は接合痕に達しているがほとんどこの段を刮ぎ落としていない。外面は破片下端まで赤色顔料の塗布が及ぶが、内面では口縁部下端の折り返し部直下で止まる。

資料004　5次9tr　第10図　胎土第43図

顎基部から立上り部上端片。口縁端部を欠くが口径は28cm弱と復元できる。屈曲部径は26cmである。顎部はごく短い。その先端上面に截せた立上り部は大きく開くが外反はさほど強くはない。顎部そのものの器厚は5mm前後と薄く先端を強く摘み上げる。比較的大きく引き延ばした立上り基部を顎上面に截せて接合するが、摘み上げて拡張した顎端部のため、屈曲部直上に幅1cm強の直立部が生じている。立上り基部付近の器厚8mm前後に対して先端部5mm弱と薄い。口縁端部はごくわずかに肥厚させ丸く収める。外面全体は横ナデ仕上げで立上り部と顎部にごく痕跡的に赤色顔料の塗布をみる。器表の荒れが著しく内面の状況は不明である。

資料005　4次9tr　第10図　胎土第43図

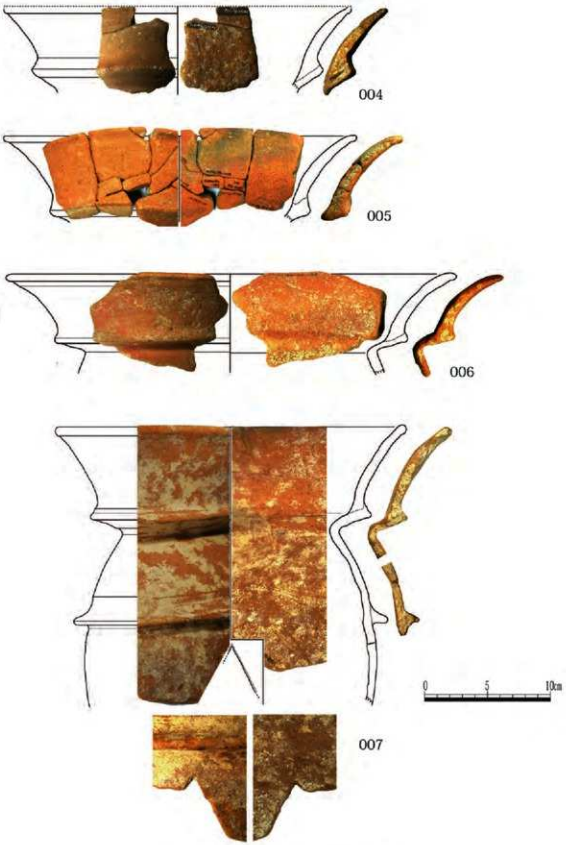
基部を欠く口縁顎部～立上り部片。復元口径28.2cm、屈曲部径21cmである。立上り部は上方でやや反りを強めながら大きく開く。端部はごくわずか外方に張出気味に作り狭い端面をもつ。立上り基部が9mm前後であるのに対して顎部は器厚6mmと薄い。立上り基部側の一部に残る剥落面の観察から先端を小さく摘み上げた顎部の形状と、顎部上面に基部を截せる接合方法を確認できる。内外面ともに横ナデ仕上げで顎部外面のごく一部に赤色顔料塗布の痕跡をみる。

資料006　4次9tr　第10図　胎土第43図

口縁立ち上がり部～肩上部片。口径36cm、顎部（屈曲部）径28.2cm、肩上端（折り返し部）径23.2cm、口縁部高6.3cmを測るやや大形の口縁部である。立上り部は全体的に外反して開く。顎部は長2.5cmと短く基部付近の器厚は5mm前後と薄い。先端に向かいやや器厚を増し鈍く肥厚して明瞭に面を作り出す端部は器厚8mmに達する。立上り基部を顎部上面に截せて接合する。顎基部は13mmと厚いが先端附近は6mm前後で端部は小さく曲げて外方に引き延ばし気味に丸く収める。外面は肩上部を含めて横ナデ仕上げだが、顎部では7条／cm程度の横走するやや目の粗い条線が観察できる。狭い顎部に仕上げ前に横ハケ調整を施した可能性がある。内面は器面がひどく荒れ全般的に調整は不明だが、肩部内面は一旦上端まで横削りが施された可能性がある。外面全体に赤色顔料を塗布している。

資料007　9次16tr　第10図　胎土第43図

口縁部上端から第1突帯下まで残り、残存高22cmを測る。口径27.8cm、顎部径22cmに対して肩部上端折り返し部径17.2cmとこの部分の絞り込みはあまり強くない。第1突帯部は径25cmと口径に及ばない。全体として小ぶりな個体である。口縁部高7.3cm、肩部高8.2cmである。もっとも口縁立ち上がり部は外反して大きく伸び、高6.2cm（長7.2cm）を測る。肩部は4割程度が残るが透し孔はない。第1突帯下には一箇所、三角形透し孔頂点附近の一部が残る。全周の二割程度しかないので配置数は判明しない。長2.8cmの口縁顎部の器厚は7mm前後で先端は上方に鈍く摘み出して端部に面を設ける。立上り基部を顎部上面に截せて接合する。立上り基部は厚7mmとあまり厚くなく、先端附近は6mm前後で端部を小さく外方に肥厚気味に丸く収める。内彎気味に緩くすぼまり長6.3cmを測る肩部は、小ぶりな器体の割にはやや長い。そのまま内彎気味に下方に続く。突帯はやや垂れ下がり気味に取り付き、基部幅・高ともに15mmとなる。摩滅して詳細は不明だ



第10図　口縁部資料02（1／3）

が頂部に明確な面を設けないようだ。第１突帯下の三角形透し孔頂部は突帯下端からわずか 1.4㎝に位置する。他個体では上向き三角形透し孔の底辺を下方突帯とあまり距たらずに設定し、その分、透し孔頂点と上方突帯の間隔が大きくなる。小ぶりな器形から推測してさほど大形の透し孔を想定しがたいので、第１突帯と下方突帯の間隔は意外に狭いかもしれない。

全般的に器表がひどく荒れ器面調整の詳細を捉えにくいが、口縁部内外面に横ナデ仕上げの痕跡を観察できる。また外面肩部にはごく断片的にかなり目の細かい縦ハケ調整の痕跡と上端折り返し部周辺と突帯直上に加えた強い横ナデ調整の形跡が残る。内面は肩部上端附近まで横に削り、その後折り返し部から 2.5㎝附近まで口縁部側から続く横ナデが及ぶ。外面では肩上端と突帯下面の一部に赤色顔料が痕跡的に残る。内面では折り返し部附近まで断片的に赤色顔料が確認できる。

資料 008　５次 9tr　第 11 図　胎土第 43 図

口縁立ち上がり部～顎部片。口径 30.9㎝、屈曲部径 23.3㎝を測る。立上り部は外反して開き、上端附近でさらに反りを強める。端部は下方に鈍く肥厚して狭い面を作り出す。立上り基部は器厚は 10mm 前後だが端部附近は約７mm となる。対して顎部の半ば附近は厚５mm と薄い。断面観察によれば顎先端は７mm 前後に肥厚し先端に面を作る。顎部上面に立上り基部を載せて接合する。

内外面とも横ナデ仕上げとなる。ただし外面では立上り下半部に４～５条／㎝の斜位のハケ調整が痕跡的に残り、顎部では横走する５条／㎝程度の条線が見え、やはりハケ調整と思われる。内面でも横ナデ調整で半ば消されたハケ調整の観察を認める。立上り下部～顎部では立上り外面同様の４条／㎝と目の粗いハケ調整を斜位に施す。立上り上半部ではこれよりも目の細かい 10 条／㎝程度の横走する条線が部分的に残る。やはり先行するハケ調整の可能性がある。内外面ともに塗布した赤色顔料が良く残る。

資料 009　５次 9tr　第 11 図　胎土第 44 図

上端から顎部下端の折り返し部までをとどめる大形の口縁部片で口径 29㎝、口縁部高 8.9㎝、肩上端部径 19.8㎝を測る。大きく開き長 6.2㎝の立上り部に比して顎部は長２㎝とごく短い。やや撓み気味に伸びる立上りは上端附近で外反を強める。内外を鈍く摘み出すように端部に狭く鈍い面を作り出し、そこに一条の沈線を加える。屈曲部を突出気味に強調する。接合痕から顎部上面に立上り基部を載せる接合パターンが明瞭に窺われる。一旦、顎部端を上方に強く摘み出して幅８mm 前後の端面を作り出す。そして顎部上面と摘み出した突出部で支えるように立上りの基部を据えている。顎基部の器厚５mm に対して、立上り部では基部付近 13mm、端部直下で 6mm を測る。

顎部・立上り部内面は４～５条／㎝のごく粗い横ハケ調整の後に全面に横ナデを施す。ただしハケ調整が深く器面に刻まれたためその痕跡を多くとどめている。ハケ調整は粗雑で空白部も少なくない。立上り部外面にもそうした粗いハケ調整の痕跡が断片的に観察されるが、横ナデ仕上げによって大半は消えている。内外面を通じて赤色顔料の塗布痕跡をとどめている。

資料 010　８次 16tr　第 11 図　胎土第 44 図

口縁立ち上がり部～顎基部片。口径 26.8㎝、顎部径 23.4㎝、顎基部（折り返し部）径 19.6㎝で口縁部高は 9㎝を測る。立上り部はあまり反らずに開き、端部近くでわずかに曲げる。端部はごくわずかだけ外方に肥厚させて丸く収める。顎部は長 2.5㎝とごく短く基部付近の器厚も 6mm 前後にすぎない。ただし先端を摘み上げて断面三角形状に厚 10mm ほどに目立って肥厚させ、下端をやや摘み出し端面を強調する。顎部上面に立上り基部を載せて接合する。立上り基部の器厚は９mm、端部附近で７mm となる。外面は全般的に横ナデ仕上げで、顎基部（折り返し部）では肩部

器面調整時の原体先端が当たりが刺突文風に連続する。内面も横ナデ仕上げとみられるが器面がひどく荒れ、先行調整の有無など詳細は不明である。外面全体に及ぶ赤色顔料塗布の痕跡が残る。内面にも塗布は及ぶが断片的にその痕跡が残るだけである。

資料011　5次9tr　第11図　胎土第44図

口縁立ち上がり部～第1突帯部片で残存高は約12㎝を測る。肩部は1／6周しか残らず透し孔の有無は判定しがたい。口径26.2㎝、第1突帯部径28㎝で口縁上端から第1突帯までの高さは9.5㎝にすぎず、小ぶりな個体である。顎部（屈曲部）径24.4㎝、顎基部（折り返し部）径19.6㎝で肩部は高4㎝（長4.5㎝）を測る。顎部は長2.5㎝と短く屈曲部は三角形状に強く突出する。顎先端部をやや肥厚させ上下端を摘み出した顎部の形状による。顎部上面に立上り基部を載せて接合する。顎基部付近の器厚7mmに対して先端附近は9mmを測る。立上り部は短くかつ開きも弱い。基部付近で厚12mm、先端近くで8mm前後に薄くなる。先端は内外に鈍く摘み出し端部にわずかな面を設ける。肩部は内彎気味に強くすぼまる。この傾きのまま第1突帯下方に続くので、体中位の張りは強いだろう。肩上部の器厚は8mm前後で突帯直上部分6mm、突帯下方では5mm前後とさらに薄い。口縁部を強く内傾する器体に対し斜めに取りつけて突帯はほぼ水平を保つ。そのため基部幅は15mmと広く高13mmを測る。端部に丁寧に面を設けた突出度の大きい矩形をなす。

外面は口縁部上端から折り返し部まで横ナデで仕上げる。肩部は突帯貼付前に4条／㎝の目の粗いハケ調整を縦に施し、次いで斜位に重ねる。突帯裾の横ナデでそれらの下端は完全に消えている。また顎基部に縦ハケ時の原体端部が刺突文状に連続して当たっている。口縁部内面は横ナデ仕上げで、肩部は上端まで横削りが及ぶ。外面口縁部から肩部まで塗布した赤色顔料が観察できる。

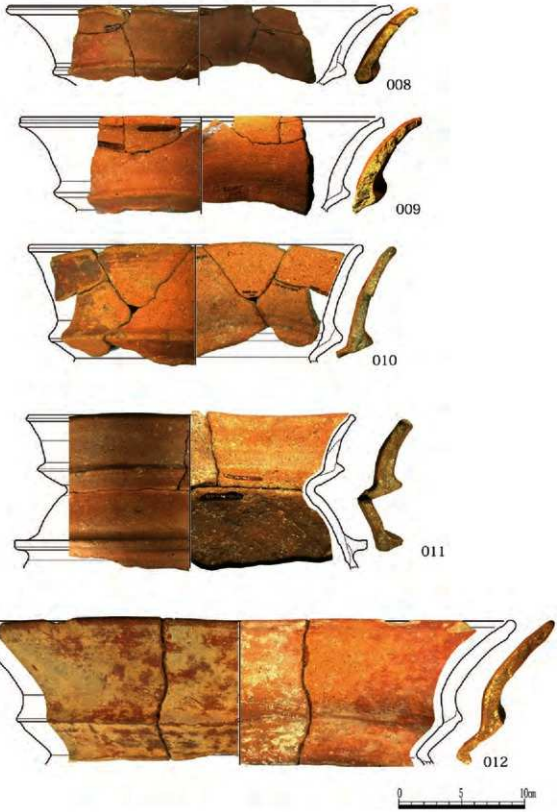
資料012　9次16tr　第11図　胎土第44図

最も大形の口縁部片で口縁端部から顎基部の折り返しまでが残る。口径は44㎝に達する。口縁部高10.9㎝、肩上端部径30.0㎝となる。しかし顎部は短く長3.8㎝前後にすぎない。対して立上り部は強く外反して大きく開き、長8.8㎝（高8㎝）に達する。顎基部の折り返しはきつく内面側に鈍い稜を作り出す。顎部に器厚は8mmで先端を上方に5mmほど摘み出す。立上りの基部付近は厚13mmで次第に器厚を減じて先端附近では7mm前後、端部を内側に小さく巻き込むようにして丸く収める。立上り基部を顎部先端摘み上げ部分にもたせかけるように上面に載せて接合する。さらにこの部分を補強するように基部外面に小さい粘土帯を巻く。このため剥落した立上り基部片は断面がY字形を呈する。特大形の本品特有の補強措置といえよう。

外面は全体的に横ナデ仕上げだが、立上り基部近くに幅2㎝前後の帯状に先行する7条／㎝の明瞭な斜位ハケ調整を明瞭に残す。内面も顎基部から立上り端まで横ナデ仕上げとなるが、全体的に外面と同様の原体による先行する横ハケ調整の痕跡をとどめている。また折り返し部、つまり肩上端まで横削りが及び、これによってこの部分に鈍い稜が生じている。外面全体に塗布した赤色顔料が比較的よく残る。内面も塗布顔料の残りがよく、折り返し以高に塗布したことがよくわかる。

資料013　9次16tr　第12図　胎土第44図

顎部から脱落した立上り部のみ残る大形の口縁部片。復元口径は35.4mmに達する。長さ7㎝前後と推測される立上り部は中位で緩く屈曲しつつ長く伸びる。口縁端部はごくわずか内方に肥厚気味で狭い端面を作り出す。端面には幅広い沈線1条が巡る。立上り基部には顎部との接合面（剥落面）が良好に残る。その状態からから上方に小さく摘み出した顎部先端の形状がわかる。立上り基部の器厚9mm、端部附近で7mmを測る。外面は横ナデ仕上げで、それに先立ち横ハケ調整を



第 11 図　口縁部資料 03（1／3）

施した可能性がある。内面も同様に横ナデ仕上げで下半部には目の粗いハケ調整を窺わせる横走する併行条線が痕跡的に残る。外面及び口縁端部内側までは赤色顔料が残るが、内面側の塗布の広がりは定かではない。

資料014　8次16tr　第12図　胎土第44図

口縁立上り部片。復元口径は33.8㎝となる。破片外面下端のわずかな屈曲を基部直立部の境とすれば立上り部長は5㎝前後と復元されさほど長くはない。下端附近の器厚9mmだが端部附近では7mmとやや薄くなる。口縁端部は丸く収めるが、内方はごく小さく突出する。内外面ともに横ナデ仕上げで、部分的に良好に赤色顔料の塗布を残す。

資料015　4次9tr　第12図　胎土第44図

口縁立ち上がり部片。復元口径は27㎝である。破片下部と上端附近の二箇所でわずかに屈曲して開く。摩耗しているが端部は外方にやや突出気味に作るようだ。器厚は立上り部下半で7mm前後、端部附近5mmとなる。内外面ともに横ナデ仕上げで、内面には横走する5～6条／㎝の目の粗い条線が観察される。仕上げ前の横ハケ調整であろう。内外面ともに赤色顔料塗布の痕跡を残す。

資料016　5次9tr　第12図　胎土第44図

顎部～立上り部片。顎基部と口縁端部を欠く。屈曲部の復元径は21㎝である。顎部先端に面を作る。立上り基部を顎上面に截せて接合し、屈曲部直上に幅7mmほどの直立部がある。立上り部はそこからやや外反気味に開く。器厚は立上り基部付近で9mm、中位で7mm前後を測る。直立部には横走する粗い併行条線が残るのでハケ調整を加えているのかもしれない。外面は横ナデ仕上げで、赤色顔料をとどめる。器面が荒れ内面仕上げ調整は不詳、赤色顔料塗布の有無は確認できない。

資料017　4次9tr　第12図　胎土第45図

口縁顎基部～立上り部片。屈曲部復元径は27㎝となる口縁端部を欠く。内外面ともに器表がひどく荒れ調整は不明。顎部長は2㎝強と短く、器厚は6mm程度で薄い。反りの弱い立上り部では基部厚10mmに対して、破片上部では6～7mmと先端に向かい明らかに薄くなる。内面にかすかに赤色顔料塗布の痕跡をみる。

資料018　4次9tr　第12図　胎土第45図

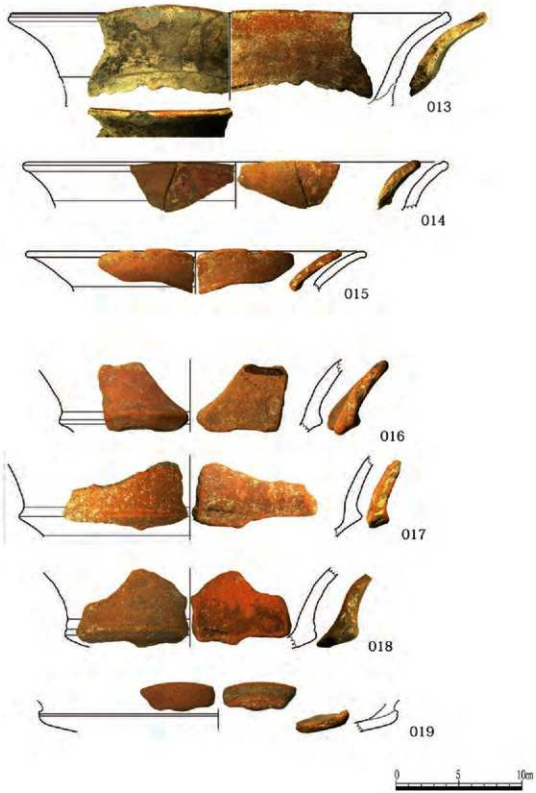
顎部下端から立上り部片で口縁端部はない。小片だが屈曲部径は復元値20㎝となる。顎部やや内彎気味に短く開く。立上り基部は厚く、その結果、屈曲部厚は19mmを測る。同等サイズの個体に比べ分厚い。内面ともに器表が荒れ詳細は不明だが横ナデ仕上げとみられる。屈曲部直上＝立上り基部外面には一条の鈍い凹線をみる。赤色顔料の有無は確認できない。

資料019　8次16tr　第12図　胎土第45図

顎部片。ごくわずかに内彎気味に開き、長さは3.8㎝＋αである。小片のため精度は低いが屈曲部径の復元値は約29㎝となる。中間部の器厚は7～8mmとやや薄い。その先端は上方に摘み気味に丸く収め、端部に沈線1条が巡る。上面に変色した立上り基部の幅2㎝ほどの剥落痕が残る。内外面ともに横ナデで仕上げる。剥落部にも丁寧な横ナデを施す。端部の沈線は横ナデで一部が潰れる。外面には部分的に塗布された赤色顔料が明瞭に残る。

資料020　5次9tr　第13図　胎土第45図

上端から顎部下端の折り返し部まで残る口縁部片。顎部長2.4㎝に対して立上り部長は4.5㎝とあまり長くはない。顎部の器厚は8mmで立上り基部も同程度である。口縁端部附近は厚5mm前後となる。短い顎部に外反気味に開く立上り部を截せる。屈曲部を上下から挟み付け摘み出すよう



第 12 図　口縁部資料 04（1／3）

に強く横ナデして鈍く突出させる。立上り部はわずかに挽みながら伸び、上半部で若干外反を強めている。口縁端部は内外をごくわずか摘み出すように横ナデを加え、端面はかすかに凹面となる。外面は全体として丁寧な横ナデ仕上げで顎部下端の一部には肩部に施された５条／㎝ほどの粗い縦ハケ調整の末端がナデ仕上げに潰されつつ残る。外面立上り部～顎部には明瞭に塗布された赤色顔料をとどめる。内側は器面が荒れるが、断片的な痕跡からその全面は横ナデ仕上げと推測できる。赤色顔料の有無は明らかではない。

資料 021　５次 12tr　第 13 図　胎土第 45 図

破片下端にわずかに肩部上端が続く。口縁部高は 6.0㎝となる。顎部は短くその端部の上下を摘み出して強く横ナデし、端部上面に立上り基部を載せて接合する。その結果、屈曲部はごく狭い直立部が作り出され、そこから強く反って長く伸びる立上り部に至る。口縁端部は丸く収める。顎基部～中位部は器厚５～６mm 薄いが、立上り基部は 10mm 前後で、端部は厚５mm 前後と薄くなる。

口縁部は横ナデ仕上げだが、内外面とも顎・立上り部の一部に横位の粗い条線がかすかに認められるので、一旦、ハケ調整で器面を整えた可能性がある。肩部上端の外面は顎部から連続する横ナデで仕上げる。内面も同様だが破片下端に横ナデに先立つ削りの痕跡を残す。また内外面ともに赤色顔料塗布の形跡が残る。

資料 022　９次 17tr　第 13 図　胎土第 45 図

口縁顎部～立上り部片。顎部先端上面に立上り基部を載せる接合法は他と異ならないが、顎端部にほぼ直立する平坦面を設ける。ただしその下方を強く摘み出し丸く突き出す形態は独特である。立上り部は全体に強く外反して開く。口縁端部は上方に小さく摘み上げつつ狭い平坦面を設ける。立上り部の器厚は全体を通じて約９mm、顎部先端は 12mm に達するが中位は８mm 前後となる。内外面ともに横ナデ仕上げ。内面には痕跡的に粗い条線が散見されるので先行する横ハケ調整の可能性がある。外面の一部に赤色顔料塗布の痕跡が残る。

資料 023　５次 9tr　第 13 図　胎土第 45 図

顎部から脱落した口縁立ち上がり部片。わずかに上半で外反を強めて立ち上がる形態。端部はごくわずか外方に張出気味に丸く収める。顎部の接合面（脱落面）を良好に残す。上方に小さく摘み上げる顎部の先端形状と、顎部上面に基部を載せる立上り部の接合方法をここから復元できる。立上り基部の器厚７mm、端部附近は５～６mm である。内外面横ナデ仕上げで、ごく微量の赤色顔料の痕跡を残す。内面は器表が著しく荒れ調整等は観察できない。

資料 024　９次 16tr　第 13 図　胎土第 45 図

大形の口縁立ち上がり上半部片。破片下部では器厚８mm だが端部附近では 11mm とわずかに厚みを増す。立上り部上端附近で小さく屈曲する形態。端部は内外に小さく張出し端面を強調する。内外面ともに横ナデ仕上げで外面のごく一部に赤色顔料塗布の痕跡をみる。

資料 025　９次 16tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり部片。破片下部で器厚９mm 前後、端部附近で８mm 前後と少し厚手である。破片下部に対して端部附近では反りが乏しい。口縁部は矩形に整える。内外の角は横ナデで稜を削いでいる。内外面ともに横ナデ仕上げだが、外面ではそれに先立つ 12 条／㎝前後の細密な併行条線がかすかに残る。横ハケ調整の可能性がある。外面には塗布された赤色顔料がよく残るが、端部と内面では確認できない。

資料 026　4次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり上半部片。破片下部の器厚 8 mm で端部附近 4 mm と先端に向かい目立って薄く作る。立上り部中位から緩く外反して開き、端部はやや尖り気味に丸く収める。外面横ナデ仕上げで、内面は器表がひどく荒れて不明。赤色顔料の塗布も定かではない。

資料 027　5次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり上半部片。上端附近で小さく反りを強める。破片下部で器厚 7 mm 前後、端部直下では 5 mm とやや薄い。端部は上方に小さく張り出す形態で下方もごくわずか突き出す。端面には 1 条の浅い溝が巡るが、上下端の丁寧な仕上げ整形によるものかもしれない。内外面ともに横ナデ仕上げだが、内外面の下部に 7 ～ 8 条／㎝の横走するかすかな併行条線が認められる。仕上げに先立つ横ハケ調整の可能性がある。内外面とも局所的に赤色顔料塗布の痕跡をとどめる。

資料 028　4次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり上半部片。破片下部の器厚 7 mm、端部附近 6mm と目立った差はない。緩く外反して開き端部は内外にごく小さく突き出して端面を強調する。内外面ともに横ナデ仕上げだが、内面では 7 ～ 8 条／㎝の横走する粗い条線がかすかに残り、仕上げ前の横ハケ調整とみられる。端面から外面に明瞭な赤色顔料の塗布をみる。

資料 029　5次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり上半部片。破片下部の器厚 7 mm で端部附近は 5 mm 前後とわずかに先端に向かって薄く作る。端部直下でわずかな屈曲がある。端部は内外にごく小さく突出させ端面を強調する。内外面ともに横ナデ仕上げで、外面には部分的に塗布された赤色顔料が残る。

資料 030　4次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁立ち上がり上半部片。上端附近で小さく屈曲し端部は丸く収める。破片下部の器厚 8 mm、端部附近 6mm とやや薄い。内外面横ナデ仕上げで、外面の一部に赤色顔料が残る。

資料 031　9次 16tr　第 13 図　胎土第 46 図

口縁顎部小片。一見口縁端部のような形態だが、内面に微妙な剥落変色部を残すので顎部先端片と判断できる。器厚 9 ～ 10mm と全体として厚手で、先端に向かいわずかに厚さを増す。端部には明瞭な凹面を作り出しその上端を鈍く摘み出す。剥落面の幅は 2.1㎝を測る。外面に赤色顔料の痕跡を認める。

資料 032　5次 9tr　第 13 図　胎土第 46 図

大形の顎部片で立上り基部付近以高を欠く。他個体と相違する点の多い特異な形状の口縁部片である。顎部は器厚 13mm とかなり分厚いが、立上り基部厚は 5 mm 程度と薄い。また屈曲部を棘状に強く突出する。接合痕跡は明瞭ではないが、破片断面から次のような製作手順が推測できる。二重に粘土帯を重ねて分厚く成形した顎部先端を斜めに整え薄く引き延ばす。この斜面に立上り基部を据え、薄く引き出した顎部先端を折り返して立上り基部を挟む。この部分を強く摘み出し屈曲部の特異な形状を作り出している。顎部内面は板状工具を横方向に押し引き整えた可能性が高い。ハケ条線は残らないが工具静止痕がみえる。立上り基部付近は横ナデ仕上げ。外面全体に横ナデ仕上げとなる。また外面には赤色顔料が明瞭に残るが内面では確認できない。

資料 033　8次 16tr　第 13 図　胎土第 47 図

口縁顎部～立上り基部小片。顎部はわずかに内彎気味に開く。現状で顎部先端の器厚は 20mm に近いが、断面観察によれば本来の顎部厚は 7 mm 程度でやはり先端上部を小さく三角形に摘み出

す。顎部と立上り基部の接合部外面には浅い溝状の凹みがめぐる。内外面ともに横ナデ仕上げで、顎部下面の基部より部分にかすかに横走する目の粗い条線の一部が残る。仕上げ前のハケ調整痕跡かもしれない。内外面の一部に明瞭な赤色顔料の塗布をとどめる。

資料 034　8次 16tr　第 13 図　胎土第 47 図

口縁顎部片。立上り基部が脱落した剥落面を良好にとどめる。顎部は 3.5㎝以上の長さをもつが、器厚 6mm と薄い。端部には明瞭な内傾する狭い面を作り出し、その上端を小さく摘み出す。端面から上面にかけて幅 1.7㎝の変色部として剥落痕が観察される。上面剥落部には接合前に施された 5～6 条／㎝のごく目の粗い斜方向のハケ調整をとどめる。顎部内面は仕上げ調整でこれを完全に消し去っている。内外面ともに明瞭に赤色顔料の塗布をみる。

資料 035　8次 16tr　第 13 図　胎土第 47 図

口縁顎基部～立上り基部片。顎部は長さ 2㎝程で短い。断面観察で顎部の当初の形状を窺うことができる。器厚 5mm と薄く、先端を上方に大きく引き延ばし、幅 8mm 前後のやや外傾する端面を作り出す。立上り基部を、この突出部にもたせかけるように顎部上面に載せる。立上り部はここから強く外傾して伸びる。顎部端面がそのまま屈曲部直上の直立部を形作っている。立上り基部は器厚 11mm と厚い。器表が荒れ細部を観察できないが少なくとも外面は横ナデ仕上げとみてよい。赤色顔料塗布の有無は確認できない。

資料 036　8次 17tr　第 13 図　胎土第 47 図

口縁屈曲部～立上り基部片。顎先端部はやや肥厚気味に作り、上下を小さく突き出すように摘まむ。他例と同じようにわずかに外反傾向を以て延びる立上り部の基部をその上面に載せて接合する。立上り基部の器厚 11mm、中位は 9 mm 前後となる。内外面ともに横ナデ仕上げだが、内面のごく一部に横走するやや粗い条線の一端が残る。先行する横ハケ調整の可能性がある。外面には塗布した赤色顔料が明瞭に観察できる。

資料 037　4次 9tr　第 13 図　胎土第 47 図

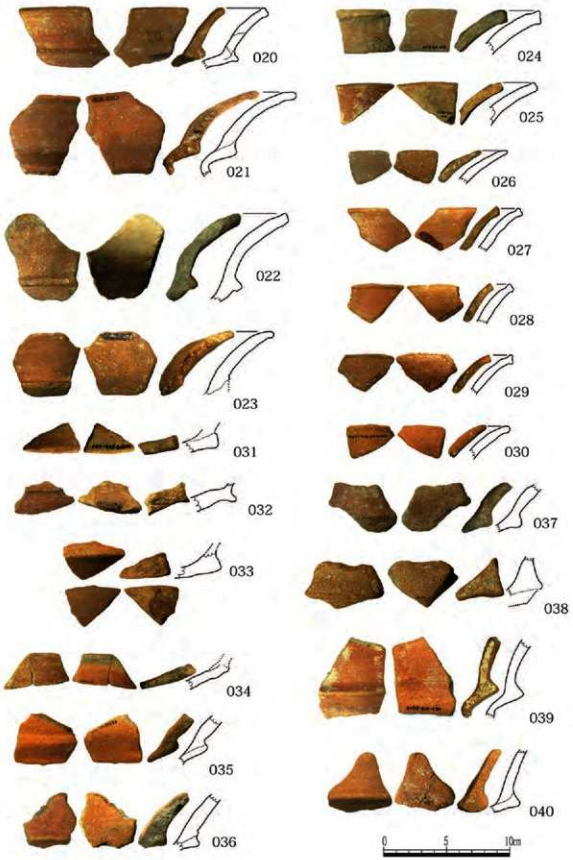
口縁顎部～立上り下半部片。顎部は器厚 7 mm 程度だが、対して立上り部は基部付近で 10mm、中位でも 9 mm 前後とやや厚い。屈曲部はわずかに斜め下方向に突出させる。顎端部形状に由来して屈曲部直上には幅 8 mm 前後の直立部分が作り出され、以高は緩く外反しつつ開く。内外面ともに横ナデ仕上げだが、立上り部の内外面に目の粗い横走する条線が断続的に見出される。先行するハケ調整の可能性がある。内外面ともに赤色顔料の塗布を認める。

資料 038　5次 9tr　第 13 図　胎土第 47 図

やや形状に違和感があるが、おおよそ断面三角形を呈する破片の一面が変色していることや滑らかに彎曲する面を手がかりにすれば顎部から脱落した立上り基部片と推測できる。基部は器厚が 20mm に近くかなり厚い。内面側に薄く粘土帯を貼り足しているようだ。また基部外方を強く突出させる。こうした点は他の同部位片と相違する。横ナデ仕上げと推測するが器表の荒れで詳細は不明。赤色顔料の痕跡も見えない。

資料 039　9次 16tr　第 13 図　胎土第 47 図

顎基部～立上り部片で、口縁端部を欠く。短い顎部の先端を強く摘み上げて、端部に幅 10mm 前後のやや内傾する面を作り出している。顎上面と摘み上げ部分で挟むように立上り基部を据える。立上り部は大きく開く。顎部端に作出した面が屈曲部直上の直立部を形作っている。折り返し部～顎中位部の器厚 5 mm 前後に対し立上り基部付近も 5 mm 前後で後者も比較的薄い。



第13図　口縁部資料05（1／3）

外面全体を横ナデで仕上げる。顎基部には薄い板状工具が突き当たったとみられる幅 15mm 前後の溝状痕跡が連続的に観察できる。肩部外面の仕上げ工具痕かもしれない。内面も横ナデ仕上げだが立上り下部に４条／㎝前後のごく粗い横走する平行条線が薄れつつ残っている。仕上げに先立つ横ハケ調整痕かもしれない。また顎部上面に立上り基部の接合痕をとどめる。全面的に赤色顔料塗布の痕跡が見いだせる。

資料 040　地点不明　第 13 図　胎土第 47 図

立上り部・顎部片で口縁端部と顎基部を欠く。顎基部付近の器厚は 4 mm 前後とかなり薄いが、立上り上部は 7 mm 前後の厚みがある。屈曲部の形状は他個体と異ならないが、顎先端の下部をやや強く摘み出す傾向がある。内面はやや荒れるが、内外面ともに横ナデで仕上げたことは間違いない。外面顎部と立上り部にわずかな赤色顔料塗布の痕跡が見いだせる。

資料 041　５次 12tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁立ち上がり部小片。強く外反して開き、端部はごくわずか肥厚気味に丸く収める。破片基部側で器厚７mm、端部直下で５mm を測る。器面の荒れで定かではないが、内外面横ナデ仕上げとみられる。赤色顔料の塗布は確認できない。

資料 042　３次 1tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁立ち上がり部片。緩く外反して開く立上り部中位の器厚 11mm に対し端部附近は７mm 前後と目立って厚さを減じ先端は丸く収める。内外面ともに横ナデ仕上げで赤色顔料は確認できない。

資料 043　５次 12tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁立ち上がり部小片。やや外反して開き、端部直下でわずかに屈曲する。立上り部中位の器厚７mm、端部附近は６mm 前後とわずかに厚さを減じ、先端は丸く収める。内外面ともに横ナデ仕上げで外面のごく一部に赤色顔料塗布の痕跡をみる。

資料 044　６次 4tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁立ち上がり上半部片。立上り部はごくわずか外反し開き、端部直下で短くかすかに屈曲する。立上り部半ばで器厚８mm、上端附近で 6mm を測り、端部は丸く収める。内外面ともに横ナデ仕上げで、端部附近にごくわずか赤色顔料塗布の痕跡が残る。

資料 045　５次 12tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁端部片。わずかに反り気味に伸びる立上り先端部の小片で、器厚は７mm を測る。端部は概ね矩形をなし狭い面を設ける。端部外方に鈍い膨らみがある。内外面ともに横ナデ仕上げで赤色顔料塗布の有無は確認できない。

資料 046　５次 12tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁顎部～立上り基部片。顎部はわずかに内彎気味に開き、先端に向かいやや肥厚し基部付近５～６mm に対して端部は７mm 前後に達し、平坦面を設ける。上面に立上り基部を載せ接合する。立上り部は強く開く。器面がひどく荒れ内外面ともに調整は不明、赤色顔料の塗布も確認できない。

資料 047　６次 4tr　第 14 図　胎土第 48 図

口縁折り返し部～肩部片。肩部は少なくとも長 6㎝を越える。器厚は７mm 前後を測る。内彎気味に閉じる肩部の外面は９条／㎝の細かいハケ調整で整える。また折り返し部はその形状を強調するようにこのハケ原体を連続的に押し当て短く引く。内面は荒れが著しいが肩部は横削りの後、上半部に細かく指押さえを加えるらしい。折り返し部は横ナデ仕上げとみられる。外面の一部に明瞭に赤色顔料が残る。

資料 048　7次 16tr　第 14 図　胎土第 48 図

肩部～第 1 突帯部片。破片上端でわずかな反りが観察できるので肩部はほぼ遺存しているとみられる。したがって内彎気味に閉じる肩部は高 5.7㎝（長約 6.5㎝）強と復元できる。突帯は基部幅 12mm、高 12mm で裾が緩く開くが強く突出し、頂部はほとんど丸く収める。突帯下側の接合はやや甘く接合部に空隙が残る。

5 条／㎝前後と目の粗いハケ調整を貼付前に施す。内面は肩部に 4 条／㎝とさらに目の粗いハケ調整を行った後におよそ突帯の裏面附近までは斜位の削りを加える。さらに肩上部には横ナデ調整が及びハケ調整の上端を消す。器厚は 8 ～ 9 mm を測る。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料 049　9次 16tr　第 14 図　胎土第 49 図

肩上部～顎下部片。器厚は総じて 8 mm 前後で部位による大きな差はない。折り返しはあまり強くなくやや鈍角となる。顎部はわずかに内彎気味に伸びる。肩部側には折り返し部附近まで右下がり斜位の目の粗いハケ調整が残る。内面顎部から屈曲部直下は横ナデ仕上げで、以下は横削りの痕跡が残る。外面肩部には赤色顔料が残る。内面は屈曲部以高に顔料を塗布し肩部には及ばない。

資料 050　5次 9tr　第 14 図　胎土第 49 図

肩上部から顎部下端片。顎部の折り返しはほとんど直角で他個体に比べやや緩い。器厚は肩部・顎部ともに 6 mm 前後を測る。肩部には三角形透し孔の右辺上端附近が残る。透し孔の上端は折り返し部（肩上端）から 1.4㎝しか離れていない。透し孔を刳り抜いた後にさらに工具を差込み孔の縁辺を整えている。肩上端まで 9 条／㎝の細かいハケ調整をわずかに右下がりに傾け丁寧に施す。わずかに残る顎下端にハケ調整はみられない。屈曲部の狭い範囲に強い横ナデを加え、ハケ調整の上端を消し、屈曲部に微妙な凹部を形作る。内面は横ナデ仕上げだが顎部側には横ハケ調整の痕跡が残る。肩部側では器面の緩い凹凸からナデ仕上げ前に繰り返し指頭を押しつけたことが窺われる。外面は全体に赤色顔料がみられ、それは透し孔切り込み面に及ぶ。一方内面では顎部下端にまで顔料を塗布し、屈曲部直下に明瞭な境界が見出される。

資料 051　8次 17tr　第 14 図　胎土第 49 図

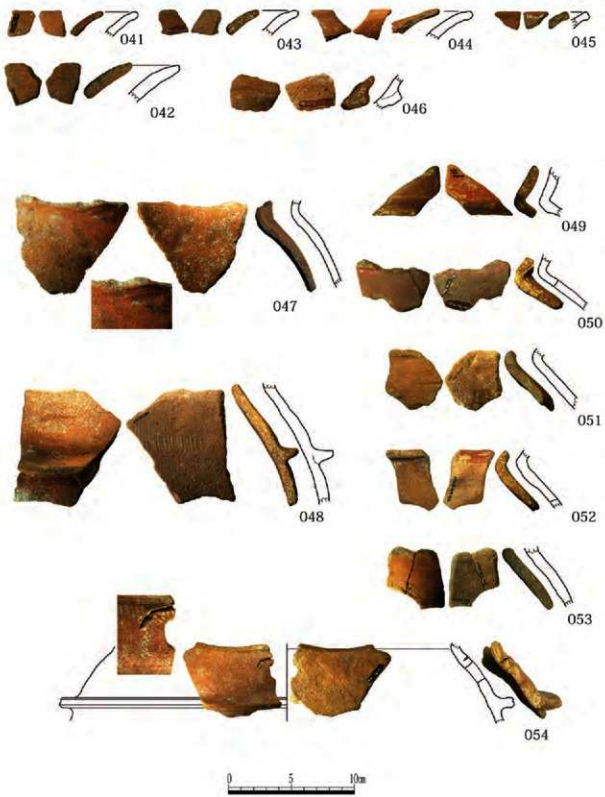
肩上半部片でわずかに顎基部が残る。器厚は顎基部 7 mm、肩部は 8 mm 前後を測る。肩部外面は 8 条／㎝の斜ハケ調整の後に上端に横ナデを加える。内面は肩中位まで削り上げた後に、その上端以高、顎基部まで横ナデを施す。ナデ調整でほとんどかすれるが、肩上部～屈曲部に横走する併行条線が痕跡的に残る。先行する横ハケ調整の可能性がある。赤色顔料塗布は確認できない。

資料 052　9次 16tr　第 14 図　胎土第 49 図

肩上部～顎基部片。顎部の折り返しはやや緩く若干鈍角となる。破片下端に円弧状の透し孔外縁をとどめる。器厚は肩上部で 8 mm 前後に対して顎部は 6 mm と薄い。肩部には 6 条／㎝ほどの目の粗い右下がり斜ハケ調整を施した後上端約 1㎝幅に横ハケを加え、折り返してこの部分を横ナデで仕上げる。顎基部から肩部には赤色顔料が残る。内面は肩部上端より 1.5㎝以下には横位の削り痕跡が残る。この後顎部まで横ナデ仕上げを加え、透し孔周辺には指押さえのわずかな凹凸が残る。顎部には丁寧に赤色顔料を塗布し、ちょうど折り返し部で明瞭に塗布の境界をとどめている。

資料 053　9次 16tr　第 14 図　胎土第 49 図

強く張った肩部片。破片下端で器厚 7 mm、上端では 10mm 前後となる。外面は上端より 5 mm 程下がった位置まで 12 ～ 14 条／㎝のごく細密なハケ調整をわずかに左傾して施す。その後全体を横ナデで仕上げる。内面は下端に削り痕と中位の一部に外面同様の細密なハケ調整を残す。削り



第 14 図　口縁部・肩部資料（1／3）

調整が先行するようだ。これらの後に全体に横ナデ仕上げとなる。外面上端附近に部分的に赤色顔料塗布の痕跡をみる。

資料 054　5次 9tr　第 14 図　胎土第 49 図

第 1 突帯を含む肩部片。口頸基部の復元径 28㎝、第 1 突帯部径 36.2㎝である。口頸基部から第 1 突帯の間隔は 5.8㎝で肩部は短い。器厚は 9 mm 前後を測る。一方第 1 突帯下方は器厚 6mm と目立って薄い。内彎気味に強く絞り込まれた肩部に高さ 1 ㎝強と突出度が高く比較的細身な鍔状を呈する突帯を付す。

肩中位よりやや上がった位置に径 15mm 程度の円形透し孔の半ばが残る。他例に比べ極端に小さく多少歪んだ形状から巴形透し孔尾部の可能性もあるが、この短い肩部に巴形透かし孔の配置は難しいだろう。小片で配置数は不明。透し孔を取り巻くように　その上方に鋭利に深く刻まれた 1 条の弧線を刻む。上端幅 2 mm で差込深は 6mm に達する。特異な線刻である。

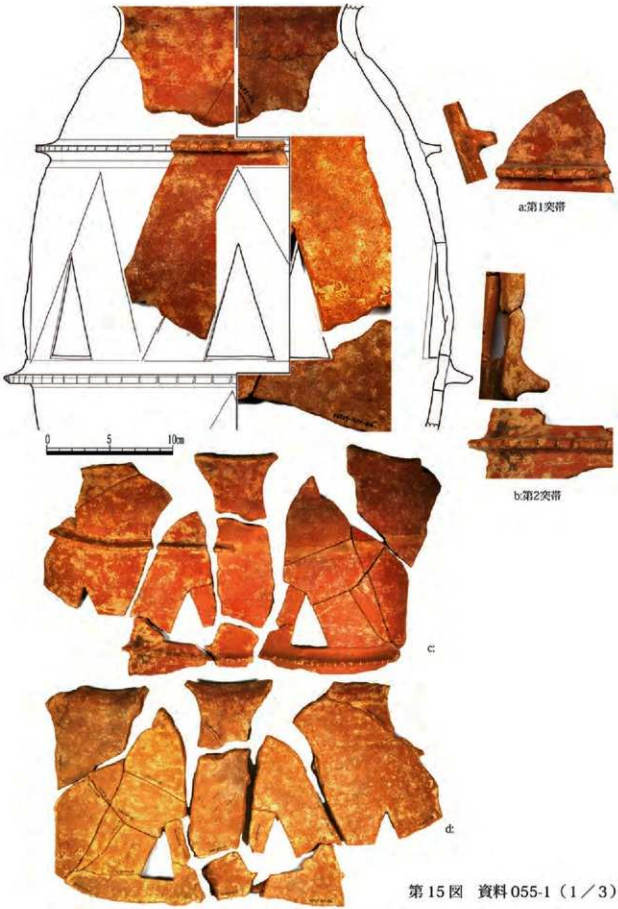
肩部全体に 4 条／㎝と目の粗い工具で縦ハケを施し、その後下半を中心に同工具で右下がり斜めハケを重ねる。穿孔／線刻はこの後となる。突帯上下は指一本分の幅で強く横ナデしてはけ目を完全に消し去る。口頸基部にも同様の横ナデを加え、ハケを消す。また線刻の一端も潰れており、それが先行することがわかる。突帯は貼付後に丁寧な横ナデ調整を加え、形状は整っている。頂部に横ナデに起因する細い凹線 1 条が巡る。肩部内面には外面と同じ目の粗い縦ハケで器面を整えた形跡があるが、事後、全面に施した左上がりの削り調整でほとんどが消されている。透し孔縁辺に通常残る粘土はみ出しが観察できないので内面削り調整は穿孔後の可能性がある。肩上端・折り返し部に限って横ナデを加え削り痕跡を部分的に消している。外面には赤色顔料塗布の痕跡があるが、内面ではそれを認めない。

資料 055　9次 16tr　第 15 ～ 16 図　胎土第 49 図

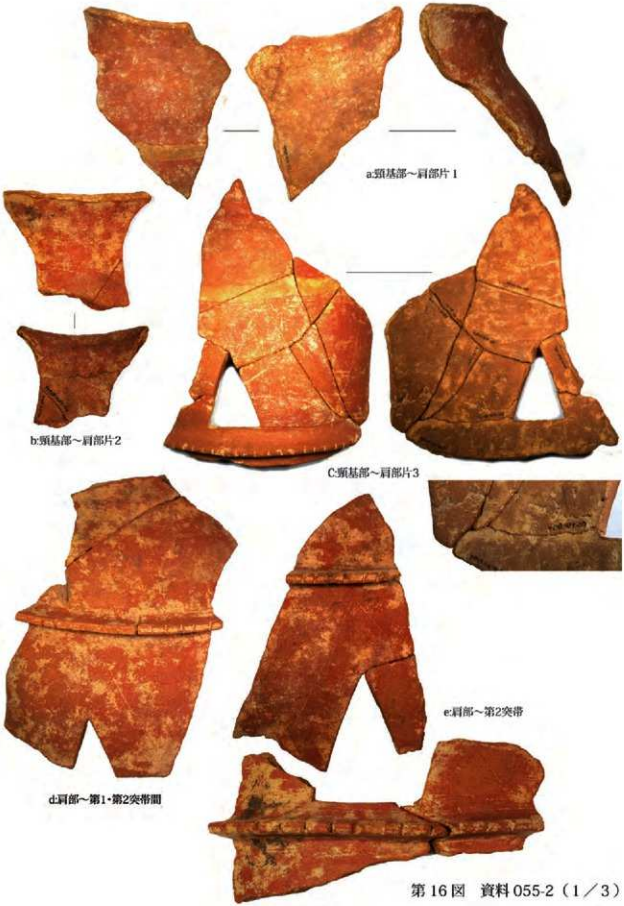
概要　肩上端から第 2 突帯下まで残る個体である。第 2 突帯下に沈線文の一部がみえるので、さらにもう一段突帯が巡り（第 3 突帯）、底部に至る 3 条突帯構成と復元する。最も絞り込まれた肩上端径 19㎝、第 1 突帯径は 32.2㎝で、径 37.4㎝の第 2 突帯部が最も張り、その直下からゆるくすぼまる。肩部は高 6.4㎝でわずかに内彎してその上端で絞り込まれ、そこからごくゆるやかに口縁顎部に向かって外反を始める。第 1・第 2 突帯間は高 18.6㎝、第 2 突帯下の残部と合わせて残存高 33.4㎝を測る。肩上部の絞り込みの弱さと折り返しの緩さが目につく。

各部の形状　やや垂れ気味に貼付した第 1 突帯頂部は明瞭な平坦面をなし、基部幅 16mm、高 15mm の突出度が高い矩形となる。頂部には 8 ～ 12mm と間隔が不揃いで浅めの刻み目を配する。やはり器体に対してわずかに垂れ気味に貼付する第 2 突帯は基部径 17mm、高 17mm と第 1 突帯に比べわずかに大きい。同じく頂部に面を作り出し、10 ～ 13mm 間隔で少し深い刻み目を配する。

文様　肩部に透し孔・線刻はないが、第 1・第 2 突帯間に上向き三角形の透し孔と線刻を施す。透し孔は一端をとどめるものを合わせ計 4 孔が遺存し、それらの間隔から 6 方配置と復元できる。また突帯間一杯に山形文を単線で刻む。斜線の角度は必ずしも一様ではなく復元は難しいが透し孔との関係を考慮するとそれよりも多い 7 単位程度の可能性がある。第 2 突帯下の透し孔は残らないが、上記した山形文のごく一端をとどめており、第 1・第 2 突帯間と同じ構成が推測できる。その位置から推測すれば透し孔を縦列で 6 方に配した可能性がある。残存する透し 2 孔はともに第 2 突帯直上に幅 5.5㎝の底辺をおき高 7.5㎝を測る。やや縦長の二等辺三角形だが、頂点位置は突帯間の中間からやや高い程度で、第 1 突帯直下より 5 ～ 6 ㎝離れる。山形文は第 2 突帯直上と第 1 突



第 15 図　資料 055-1（1／3）



第 16 図　資料 055-2（1／3）

帯直下を斜めに繋ぐ左右の直線を組み合わせる。一応は透し孔を大きく縁取る構成を指向したようだが、それに応じた単位構成ではなく、まま透し孔位置とずれ、これと交差してしまう部分もある。

製作手法　肩上部の器厚 10mm 前後、肩部の半ばから下端は 7 ～ 8 mm とやや薄くなり、第 1 突帯直上部ははっきりと一筋凹む、内面肩上部に明瞭に残る接合痕と同じように粘土帯接合部を反映する痕跡であろう。第 1 ・第 2 突帯間上部の器厚 9 mm 前後に対して下端近くでは 6 mm 前後と目に見えて薄くなる。この附近にも内面に粘土帯の接合痕が残る。第 2 突帯は再び 9 mm 前後の厚さを測る。こうした器厚の変化は成形時接合に対応するとみられるが、最終的にそれが解消されていない点は製作手法の点で興味深い。

外面では肩上部から第 2 突帯下までやや左傾する 12 ～ 13 条／㎝と細密な縦ハケ調整が観察される。ただし肩上端附近は口縁部から連続する横ナデ仕上げでこれを消す。第 1 突帯の剥落面にハケ調整の痕跡が明瞭に残り、貼付前に肩部～第 2 突帯附近まで一時に調整を加えたことがわかる。このハケ調整は第 2 突帯上裾附近で貼付後の横ナデ調整で消されているが、第 2 突帯下側では一部で突帯裾にハケ調整痕跡が被る状態が観察される。破片残部範囲に限っても第 2 突帯貼付を挟んだ前後 2 回に分けてハケ調整を施している。なお少なくとも最初のハケ調整後に線刻し、その後に穿孔を加える。内面ではほとんど外面と対応するように肩上端附近には横ナデ仕上げが及ぶが、以下は第 2 突帯下まで穿孔前に指押さえとナデ調整を行い、比較的圧痕を明瞭にとどめている。

外面全体に赤色顔料が残る。内面では横ナデ仕上げの及ぶ肩上端まで顔料を塗布する。以下では主として透し孔の周囲に飛沫状に赤色顔料が点在する。

資料 056　8・9 次 16tr　第 17 図　胎土第 49 図

きわめて大形の肩部片で、上端（折り返し部）径 23㎝、破片下端部径 48㎝を測り、残存高は 18㎝を越える。他例と異なる器形を想定すべきかもしれないが、現時点ではとりあえず同形の大形品としておく。

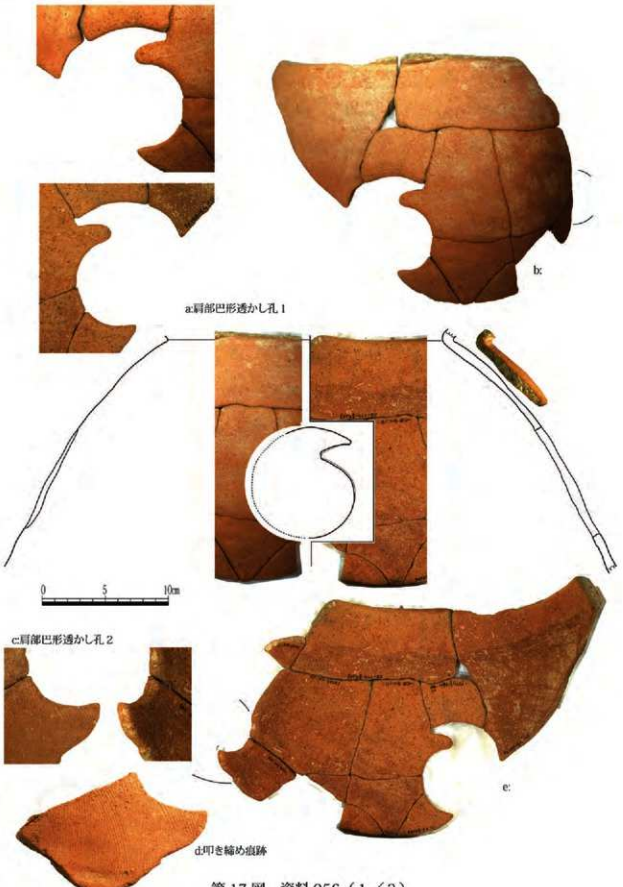
肩部のおそらくは下寄りに大形の巴形透し孔を穿つ。外周に線刻は伴わない。尾部先端も鋭く尖り、円孔部と尾部のバランスにも違和感はない。整ったむしろ古風な巴形だが、長径 9.3㎝と異様に大きい。破片には 2 孔の一部が残り、その間隔から，交互に上下を反転して 4 孔を配置したと推測できる。

外面では穿孔前に幅 2 ㎝内外の原体を用いた 12 ～ 13 条／㎝の細かいハケ調整を左傾気味に概ね四段にわたって施す。また多くはハケ調整で潰れるが肩上部の一部などに 4 条／㎝程度と比較的細い横位の叩き目の連続が痕跡的に見出される。内面は上端より 2 ～ 3 ㎝下がった附近までヘラ削りを加える。破片下半では左上がり方向に削り上半は横削りとなる。外面の一部に塗布した赤色顔料が断片的に残る。

資料 057　9 次 16tr　第 18 ～ 19 図　胎土第 50 図

概要　肩部上端から底部下端までの体部形態が復元できる個体である。体部高は 68.4㎝を測る。この間に 2 条だけ突帯を配置する。そのため肩部高 11㎝、第 1 ・第 2 突帯間 28㎝、底部段 32㎝と他資料に比べ各部は間延びした感がある。この器高に対して各部の径は肩部上端 18㎝、第 1 突帯部 36.2㎝、第 2 突帯部 36.8㎝、下端 14.4㎝と全体的に細身で特に底部下端が強くすぼまる。

各部の形状　内傾する器体にやや斜行して取り付きほぼ水平に延びる第 1 突帯は基部幅、高ともに 15mm 前後の矩形をなし、頂部に狭い面を作り出しつつ横ナデで上下端を丸める。第 1 突帯の剥離面にハケ調整痕跡は観察されないので、この部分の器面調整に先立って貼付した可能性が高い。



第17図　資料056（1／3）

第２突帯は基部幅 18mm 前後に対して高 12mm とやや低く台形様をなす。頂部に狭い面を作り出しつつ横ナデで上下端の角を落とす。やはり第２突帯の剥離面にハケ調整痕跡は観察されず器面調整に先立って貼付した可能性が高い。

文様　肩部には上向き三角形透し孔を４方に配置する。長い中位段には上向き・下向き三角形透し孔各４孔計８孔を上下で交互に並べる。肩部と中位段の上向き三角形透し孔を縦列で配置する。肩部透し孔は２孔分のそれぞれ一部が残るにすぎないが、それから第１突帯上裾から 1.8cm距たった透し孔底辺は幅約５cmで、その頂点はほとんど肩部上端に接する位置にあるので高９cm前後と推測できる。中位段で遺存するのは下向き三角形透し孔１，上向き三角形透し２の計３孔分の一部だけだが、それら及び肩部透し孔との位置関係から上記の配列と復元している。段の上部に位置する下向き三角形透し孔は第１突帯直下１cmに幅５cmの底辺が位置し高さは 6.8cmである。段下部に２孔分の一部が残る上向き三角形透し孔では底辺位置は第２突帯上裾からそれぞれ 4.3cm、6cmと少し離れる。前者は底辺幅 5.3cmで高さは不明、後者は底辺幅 6cmで高さは 9cmに達する。上向き三角形透し孔の方が一回り大きいようだ。これら透し孔に取り付く縁取り状沈線はない。

器面調整等　比較的明瞭に外面中位段の中程と底部段上半の一部でやや左上がりの太い叩き目が観察される。叩き目は幅４mm ほどの圧痕が４～５mm 間隔で並ぶ。肩部外面にもその痕跡と思われる浅い凹凸がかすかに残る。その後肩部には５～６条／cmのやや目が粗い縦ハケ調整を左傾気味に加える。上記のとおり突帯貼付後の調整と推測するが、ハケ調整後にもあらためて第１突帯上裾に横ナデを加えている。またハケ調整はほとんど肩上端まで残っており、折り返し部の横ナデ範囲は狭い。中位段は同様のハケ調整２段で仕上げる。まず下半に左傾気味にハケ調整を行い。その後上半にはほぼ垂直に調整する。第２突帯上裾もハケ調整後に改めて横ナデを加えるが、その部分に被る前者ハケ調整痕の下端の一部が残る。底部段は二種のハケ原体で器面を整える。まず底部段の上中部を上と同じ原体で下→上へ概ね２段で調整し、その後下端から 10cm内外まで 12 ～ 13 条／cmの細密な縦ハケ調整を加える。さらにその後に底部下端を整形する。肩部内面には二段の粘土帯接合痕が明瞭に残る。肩上端（折り返し部）から各々３cm、7cm前後となる。この部位では３～４cm幅の粘土帯を積み成形している。底部段中位から第１突帯附近は概ね縦方向に削り上げ、以高では上述した粘土帯接合痕の下段あたりまで、一部横削りを交えつつ大勢として左上方向に削るが、その上端は浅い。その後肩上部まで口縁部内面から連続する横ナデ調整が及んでいる。底部下端の内面は細かな単位で削り余分な粘土を刮ぎ落とす。底部下面も同様である。外面に削りは及ばないが、下端附近の狭い範囲になぜか工具先端を乱雑に押し当てている。外面のハケ調整・突帯貼付、内面ヘラ削りの後に透し孔を穿つ。肩部～第２突帯に塗布赤色顔料がよく残るが、底部段には及ばない。

資料 058　９次 16tr　第 20 ～ 21 図　胎土第 50 図

概要　三条の突帯が巡る体中位から底部下端まで残る個体である。上部突帯上は残りが悪く確定が難しいが、他例に準じて三段突帯構成と復元しておく。その場合、第１突帯上にわずかに 4.5cm分が残る肩部下半はほとんど内傾していない。あまり体部上端ですぼまらない形態となろうか。

各部の形状　第１突帯は基部幅 15mm 高 15mm と突出度は高く頂部を丸く収めその部分に８～12mm 間隔で細い刻み目を巡らす。器体に丁寧な横ナデで密着させ下裾側にも空隙を残さない。第２突帯もほぼ同形だが基部幅 14mm 前後に対して高 13mm とやや低い。頂部を丸く収めやはり上段と同様にやや不揃いな星刻み目をもつ。第３突帯は基部幅 15 ～ 16mm、高 15mm 前後で形状は上の二段と異ならない。第１突帯部径 38cm、第２突帯部径 35cm、第３突帯部径 36.6cmに対

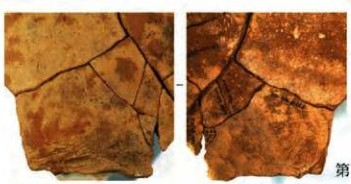
第18図　資料057-1（1／3）

a:

b:肩部～第1/第2突帯間透かし孔配置

c:第1・第2突帯間叩き締め痕跡

d:第1・第2突帯間



e:底部段下半

第19図　資料057-2（1／3）

して底部径は15.2cmで底部段の下半は内彎して強くすぼまる。第1・第2突帯間高18.2cm、第2突帯・第3突帯間高16.0cmに対して底部段は高さ25cmとなる。残存全高は65cmで体部はやや太い。

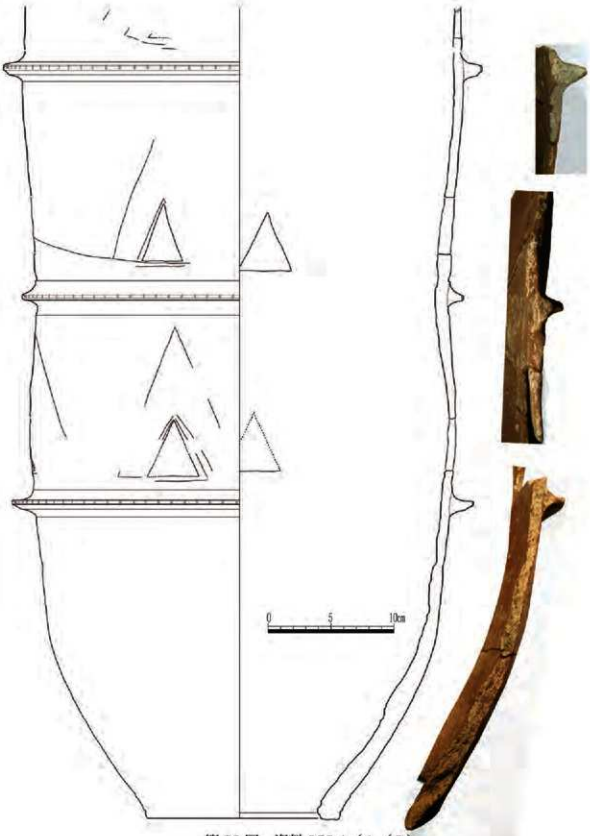
文様　肩部、第1・第2突帯間と第2・第3突帯間の3段に上向き三角形透し孔を配置する。残部の孔間隔から少なくとも体中位の2段に縦位置を揃えて各6方に配したと推測できる。また透し孔外周に沈線文がある。肩部にも同様の沈線文の断片が観察でき、かつ一箇所で三角形透し孔の底辺左端がごく一部残る。外周沈線と透し孔断片の位置から肩部透し孔も下方と縦位置を揃えた配置の可能性が高く、肩部も6方配置であるかもしれない。第1・第2突帯間では透し孔2孔が完存し、1孔の側辺が残る。底辺位置は突帯上1～2cmとやや揃わないが底辺幅は3.8cm、4.2cm、高さは4.5cm、4.2cmと大差はない。右辺の一部が残るもう1孔も同大とみられ、他個体に比べ体中位段の透し孔としては一回り小さい。

第2・第3突帯間でも3孔が残る。底辺位置は突帯上1.8cm、1.5cm、1.5cmと差はなくサイズは推測可能な2孔で底辺幅4.0cm、3.5cm、高さ4.0cmと上段同様に他個体のそれより一回りは小さい。下方の突帯直上にほとんど接して透し孔を穿つが、孔頂部と上方突帯の間は大きく空いている。透し孔外周の沈線文は透し孔側辺にほとんど接するように1条ないし2条の並行線を描き、底辺外周にも同様に1ないし2条の横線を表現する。こうした縁取り文様の外方にはさらにこれらを囲うような大形の三角文を粗く描く。透し孔底辺もしくは底辺外周線を左右に延長し底辺とし、上方突帯近くを頂点とする。この三角文によって透し孔の小ささを補うように見える。なお三角文は左右のそれと連結せず、透し孔毎に完結する。第1突帯上の肩残部にもこうした三角文の底辺と斜辺の一部をなす沈線が観察される。

器面調整等　外面は底部段の下方2／3程度までは原体幅20mm前後で5～6条／cmとやや目の粗い縦ハケ調整を施すが、その上端に重ねるように以高、肩部まで12～13条／cmの細密な縦ハケ調整を施している。底部下面をヘラ切り整形するが、外面側に及ばず、その結果、自重による潰れ、歪みと皺をとどめている。第3突帯部では裏面に潜る調整痕が観察でき、貼付前のハケ調整であることがわかる。第1・第2突帯部で前後関係を直接確認できる箇所はないが、貼付時の横ナデとハケ調整痕跡の関係から同様の関係を推測できる。また肩部は第1突帯上裾附近に限らず横ナデ仕上げが広く及び、ハケ調整痕跡は多く消えている。内面のヘラ削りはほぼ第2突帯附近以高に限定される。第2・第3突帯間はナデて平滑に仕上げるが、底部段の大部分では成形・粘土帯接合時の連続的な指押さえ痕をそのまま残す。最下段は7cm前後と幅広く、以高では4cm内外の幅で計5段ほどの粘土帯接合に起因する顕著な起伏を読み取ることができる。このためナデもしくは縦削りで仕上げる第3突帯周辺以高は器厚が6～7mm程度だが、最下段は13～17mmと上部に倍する厚さを残す。もっとも下端附近5cm内外では縦に粗く削り、多少は余分な粘土を刮ぎ落とし、下端は若干器高を減じている。外面肩部から第3突帯下5cmまで赤色顔料を塗布し、その下端を明瞭に観察できる。

資料059　4次9tr　第22～23図　胎土第50図

概要　底部下端から突帯2条分が遺存する。もっとも底部段下半と以高の部位の接合点は見いだせず、器厚、内外の調整痕跡等から総合的に同一個体と推測したものである。また上部突帯以高は内彎気味に緩くすぼまる形態形態等から肩部と判断できる。したがって本個体は二段突帯構成と復元できる。第1突帯径32cm、第2突帯径31cmに対して底部径は17.4cmにすぎない。上記した復原案に従えば底部段は高30cm前後と推定でき、非常に長大となる。第1・第2突帯間は17.2cm、肩



第20図　資料058-1（1／3）

第21図　資料058-2（1／3）

部の残存高と合わせ残存復元高は45cm前後に達する。

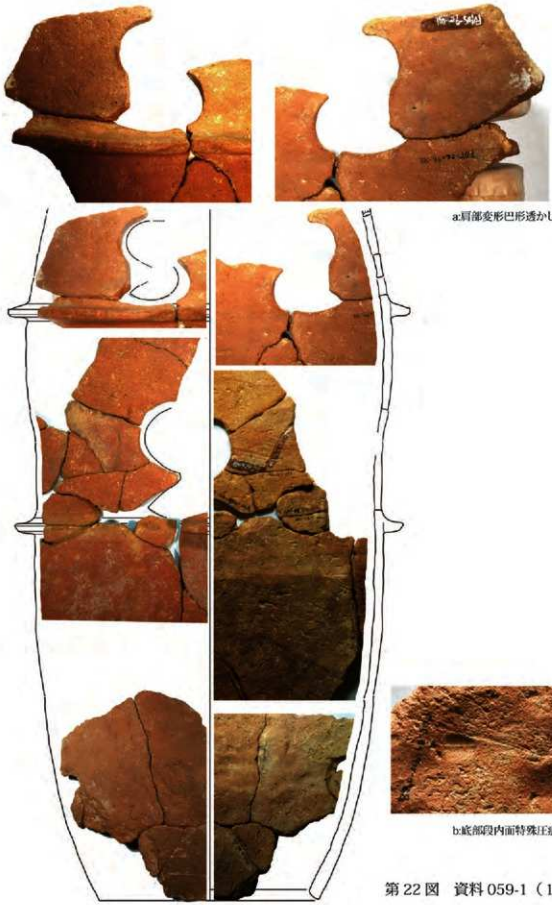
各部の形状　第1突帯は頂部に丁寧な面を設け突出度の高い矩形をなす。基部幅12mm、高14mmを測る。丁寧に器体に貼付し下裾側にもあまり接合時の空隙を残さない。第2突帯もほぼ同形で基部幅11mm、高15mmとなる。貼付はやや粗雑で下裾側に空隙が目立つ。

文様　肩部と第1・第2突帯間にそれぞれ3孔分の凹形透し孔の一部が残る。透し孔残部の間隔からともに4方配置で、縦位置はややずれるが縦列配置指向と推測する。透し孔外周に沈線文は取り付かない。肩部透し孔第1突帯上裾に切り込むように突帯と下端が接している。3孔分のうち2孔は突帯に接する孔下辺が断片的に残るだけだが、1孔からその特異な形態が判明する。透し孔残部では下側に左向きの尾部がある。円孔と尾部を分かつ鈎部の先端を欠損するが、左向きの尾部は円孔部に対し大きく発達する。強く彎曲する尾基部側の縁辺と円孔残部縁辺の形状と合わせ考えると、透し孔は発達した尾部を上下双方に設ける形態が復元できる。上下の尾部に対し中間の円孔部は小さくむしろ全体としてS字形を呈する。第1・第2突帯間では遺存3孔のうち、2孔である程度全形の推測が可能である。ともに肩部の透し孔と同じように孔下辺は突帯上裾に切り込みこれに接し、かつ尾部を下方におく。やはり円孔に対し尾部が大きく発達しており、上下二方に尾部を設けた可能性が高い。穿孔前に内外の器面調整を終えている。

器面調整等　外面は肩部から底部段まで突帯貼付前に7条／cmの縦ハケ調整を施す突帯剥落部にもハケ調整痕をとどめるが、器面調整後にあらかじめ貼付位置を簡単にナデ押さえるらしく、剥落部ではハケ調整痕がかすれまた疎らに指押さえ痕が見られる。底部段のほぼ下端まで一旦ハケ調整が及ぶが、その後下端から7～8cmまでは外面を押さえ，あるいはナデで調整痕がかすれる部分が多い。内面では第1突帯下から底部段上部までは横削りで仕上げ、第1突帯附近には左上方向に転じた削りが続くが、肩部の大部分にはそれが及ばずナデ・押さえで調整を終える。底部段上部から第2突帯附近までは上方の横削りに先立って螺旋状に左上に向けて削り、下端からおよそ10cm前後までは縦もしくはやや右傾して削り上げる。この間に数cm幅で削り調整が及ばない部分が帯状に残され、先行調整の指頭程度の小さな圧痕が密集する。こうした密集圧痕は叩き締め調整反映することが多いが、本個体では外面に叩き締めの痕跡を見出すことができない。またこれら圧痕は肩部の弱い指押さえ痕とは違い深く鮮明で、かつその底面に細い隆帯一条が読み取れる。明らかに爪痕ではない。何らかの当て具的な圧痕と見ておきたい。底部下端附近の細かな横削り・刮ぎ落としは観察できないが比較的薄く仕上がっており、底面はヘラ切りする。器厚は肩部で6～7mmだが、第1・第2突帯間では5～6mmとやや薄く、局所的に4mm程度の部位もある。底部段上部の器厚は上方とほとんど異ならないが、上記した削り残し部位は9mm前後と厚い。下端では6～9mmと揃わない。外面肩部から底部段の半ば附近まで赤色顔料が観察できる。

資料060　9次16tr　第24～25図　胎土第50図

概要　上下二段の突帯を残す体中位部片である。突帯貼付状態と透し孔配置とから上下を推測した。二条の突帯直上に各々穿たれた三角形透し孔の一部が残る。下段突帯下はわずかしか残らず透し孔の有無を判断できないが、上段突帯以高の立上りにほとんど内彎傾向が認められないでこの部分を肩部とは考えにくい。後述するように突帯間隔が極端に大きいわけではないので、さらに一段の突帯を想定し都合三段突帯構成と復元するのが妥当だろう。その場合下段突帯下はもちろん底部段となる。器厚は7～9mmで多少の変化はあるが、さほど目立つものではない。この他同巧の突帯間のやや大形の破片がある。やはり線刻と三角形透しを認め接合しないが同一個体の可能性が高い。



a:肩部変形巴形透かし孔

b:底部段内面特殊圧痕

第 22 図　資料 059-1（1／3）

第 23 図　資料 059-2（1／3）

上段突帯径 36.3㎝、下段突帯径 31.8㎝と復元でき、突帯間の高さ 18.3㎝となる。

各部の形状　上段突帯は基部幅、高ともに 15mm を測る。裾が多少開くが突出度は大きい。頂部の一部には面を作り出しているが全体に及ばずやや形態が整わない。頂部には 10 ～ 12mm 間隔で細い刻み目を巡らす。下段突帯は基部幅 15mm に対して高 10mm 前後で台形様をなす。貼付が粗雑で下面に大きく空隙を残している。頂部は概ね丸く収め、刻み目を巡らすが、間隔は 9 ～ 13mm と一定しない。

文様　破片両側の上下に計 4 孔の上向き三角形透し孔の一端が残り縦列配置を指向している。その間を繋ぐように配した単線山形文のほぼ一単位が見える。透し孔は破片左辺下段の一孔で高約 1 0 ㎝と推測できる。上下段ともに突帯上裾に接するように底辺を設定するので、透し孔頂点と上部突帯との間に 6 ㎝前後、間隔が空く。透し孔底辺幅が不明で難しいが、仮に 5 ～ 6 ㎝程度とし、かつ配置間隔が一様であれば透し孔は各段 6 方配置と推測できる。残部上下突帯間に残る山形文は透し孔の中間近くにある頂部が上部突帯直下に位置し、左右の下端は透し孔側辺に中途に接して終わる。また上部突帯上に一部残る山形文はこれと異なり、その下端は透し孔側辺に当たることなく突帯上裾附近まで延びる。したがって本例でも透し孔と山形文の厳密な対応を意図していないと思われる。

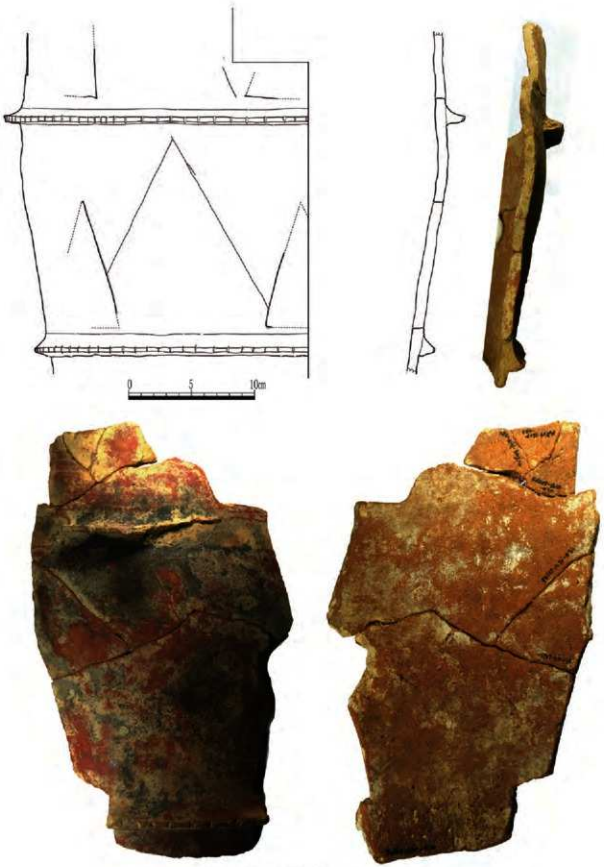
器面調整等　外面の全体にやや左傾する 12 ～ 13 条／㎝の細密な縦ハケが観察できる。上部突帯剥落面にこの痕跡が残り、下部突帯下面の接合時空隙にやはり貼付前のハケ調整がみえるので、突帯貼付前にハケ調整を施したことに疑いはない。ただし突帯の上下で微妙にハケ調整の向きが変化している。あらかじめ突帯貼付位置を念頭に突帯間を一単位としてハケ調整を加えた可能性がある。また上部突帯の上側で二箇所、ハケ調整に先行し、併行叩き目とみられるやや幅広で浅い線状の凹み 3 ～ 4 条がおおよそ 5 mm 前後の間隔で並び短く横走する。上記した別破片にも下半部を中心に同様の叩き目が確認できる。内面の大部分に指押さえとナデの痕跡が広がる。特に指押さえ圧痕が目立つ。外面の一部に残る叩き締め痕跡と関係するものかもしれない。なお下段突帯附近以下ではさらに縦削りが加えられる。内外の器面調整は穿孔・線刻に先立つ。外面全体に塗布した赤色顔料が良好に残り、透し孔切り込み面の一部にも及ぶ。

資料 061　8 次 16tr　第 26 ～ 27 図　胎土第 50 図

概要　上下二段の突帯を残す体中位部片で、残存高 45㎝を測る。上部突帯径 34.3㎝、下部突帯径 35.5㎝である。上部突帯上では 4 箇所に上向き三角形透し孔の一部が残る。下部突帯下については残りが悪く断定は難しいが、以高の配置パターンに準じた透し孔はないようだ。また上部突帯以高では器体にわずかな内轡傾向が見出され、かつ配置透し孔もすこし高さを減じているので、残存する上部突帯の上は肩部にあたる可能性が高い。一方、下部突帯下には上記のとおり透し孔を配置しない可能性が高く、かつ下部突帯下約 2 ㎝が赤色顔料塗布の下限となる。他例に照らしこの部分が底部段になるとみられる。そうすると本個体は二段突帯構成と復元できる。高 20.2㎝に達する上下突帯の広い間隔はこの復元と整合的といえる。以下では復元に即して、上下突帯をそれぞれ第 1 突帯、第 2 突帯、器体各部を肩部、体中位、底部段と表現する。

各部の形状　第 1 突帯は基部幅 10mm、高 12mm と細身で突出度が高い。器体に垂下気味に取り付き、頂部がすこし上向きに反るように整え端部を丸く収める。上裾は丁寧な横ナデで器体に密着するが取りつけ方と関係して下裾の仕上げは多少粗雑になっている。第 2 突帯は幅 15mm 前後と基部が開き、高 13mm 程度で頂部に小さく面を設ける。突出度の高い台形様を呈する。

文様　上下突帯間では下向き三角透し孔と上向き三角形透し孔の一部が各々 3 箇所と 2 箇所残る。



第24図　資料060-1（1／3）

第 25 図　資料 060-2（1／3）

これらから推測して上部突帯上にはやや小ぶりな上向き三角形透し孔を８方に、上下突帯間では上半に下向き三角形透し孔４方、下半には上向き三角形透し孔４方を交互に計８方を配置したと復元できる。上部突帯の上下では透し孔を縦列で配置する。肩部の透し孔は底辺幅 5.8㎝、高 5.5㎝程度と復元できるので、体中位段透し孔よりかなり低い。また第１突帯上裾から５㎝内外高い位置に底辺をおく点も異なる。肩部の高さと関係するのであろう。少なくとも残部ではこれに取り付く線刻はみられない。上記のとおり体中位段では下向き・上向き三角形透しを上下・交互に配置する。下向き三角形透し孔の残部では底辺幅は５㎝前後、高さは 6.8㎝、7.7㎝とやや差がみられる。底辺を第１突帯に寄せて、直下から２，2.5、1.4㎝の位置におく。外周線刻はない。上向き三角形透し孔はこれより一回り大きく、ほぼ完存する一孔では底辺を第２突帯上裾から 2.5㎝離す。底辺幅は 9.4㎝、高 9.5㎝となる。一部だけ残るもう１孔もこれに準じたサイズとなる。完存する１孔では縁取り風の沈線文を伴う。両辺に沿って引いた沈線は突帯裾まで延びる。底辺外縁にも左右側線まで沈線を入れる。また左辺側ではその外方に部分的にこれと併走する１条の沈線がのこる。ただしナデ消した箇所があり、残りは悪い。二重線ではなく縁取り線を修正したものであろう。もう１孔にはこうした縁取り線は見られない。一部の透し孔にのみ伴うらしい。

器面調整等　器体外面は二種の原体でハケ調整を行っている。底部段から中位段の半ばまでは４条／㎝とごく目の粗い縦ハケ調整を第２突帯貼付前に施す。この後、中位段上部と肩部に一転して 14 ～ 15 条／㎝程度の細密な縦ハケ調整を加える。突帯下に潜り込む調整痕は確認できず、また中位段と肩部とで調整方向が微妙に変化する傾向もあり、この細密ハケ調整と第１突帯貼付の前後関係は確定しづらい。また肩部上方は事後の横ナデでハケ調整痕跡の多くが消えている。内面はヘラ削りで終える。底部段から体中位までは縦削りで、第１突帯裏面附近より上はやや方向を転じて左上に向け斜めに削り上げる。内外の器面調整後に穿孔・線刻を加えている。なお線刻は穿孔によるつぶれが全くないので、それよりは後出する。器厚は概ね８～ 10mm で部位による目立った変化はない。肩部から第２突帯下約 2㎝まで赤色顔料を塗布している。

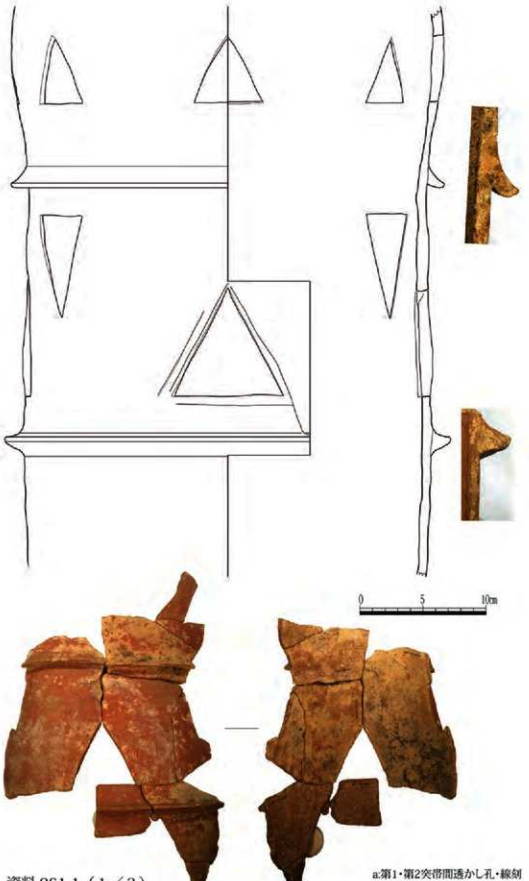
資料 062　3次 9tr　第 28 図　胎土第 50 図

巴形透し孔と突帯ととどめる体部片。突帯部復元径 34.4㎝となる。透し孔は弧状を呈し先端が鋭く尖る尾部と円孔部の一部を残す。円孔部外縁から全径６～７㎝に達する大形の透し孔と推測できるが、尾部は肥大化せずまたその形状は整っている。透し孔の外周にはやや複雑な構図の沈線文を配している。まず透し孔外縁を縁取るように円孔部に沿う弧状の２条の平行沈線、尾部に沿うやはり弧状の沈線１条がある。さらに尾部外縁沈線の右端から分かれて斜めに１条を引き下ろしその先端は別の弧線と接して閉じる。また尾部先端から 1.5㎝の垂線を引きその下端で別の弧線と接する。全体として直弧文風の構図となる。破片下部に残る突帯と透し孔（尾部）下縁との間隔は 2.2㎝で上記した沈線文はこの間に配されている。

突帯は裾幅約 20mm、高さ 15mm で強く突出する。頂部に狭い平坦面を作り出す。裾は丁寧な横ナデで器体に密着させるが、下側はやや甘くわずかに接合部の空隙が残る。外面には４～５条／㎝の目の粗い縦ハケ調整を加える。ハケ調整→突帯貼付→穿孔→線刻の手順が復元できる。内面は穿孔前に縦削りを行う。器厚は６～７mm を測る。

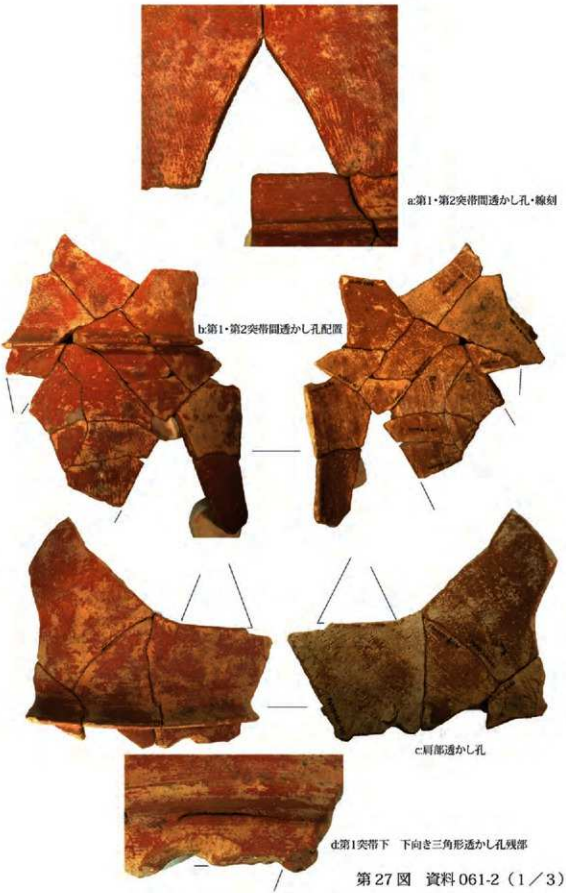
資料 063　9次 16tr　第 28 図　胎土第 50 図

巴形透し孔の尾・円孔部の一端をとどめる体中位部片。透し孔に外周に線刻はない。突帯部で径 35.5㎝と復元した。突帯より上方の残部約 22㎝で、破片上端に上位突帯の痕跡は認められないので、



第 26 図　資料 061-1（1／3）

a:第1・第2突帯間透かし孔・線刻



第 27 図　資料 061-2（1／3）

この部分の突帯間隔はかなり大きいものとなる。巴形透し孔は尾部を下に向ける。残部縁辺の下端は突帯から約 11㎝距たる。復元した円孔部上端位置も上位突帯から 5㎝内外は離れそうだ。突帯との関係が確認できる巴形透し孔の資料ではいずれも透し孔の一端をほとんど突帯裾に接するように配置しており、本資料は例外的である。また突帯間の中間より上方に寄せることから上下二段に透し孔を配した可能性がある。円孔に対し尾部は大形化し先端は尖らない。変容・形骸化が進んだ形態である。器厚は概ね 7 ～ 9 mm だが、透し附近で局所的に厚 10mm 前後の部分がある。

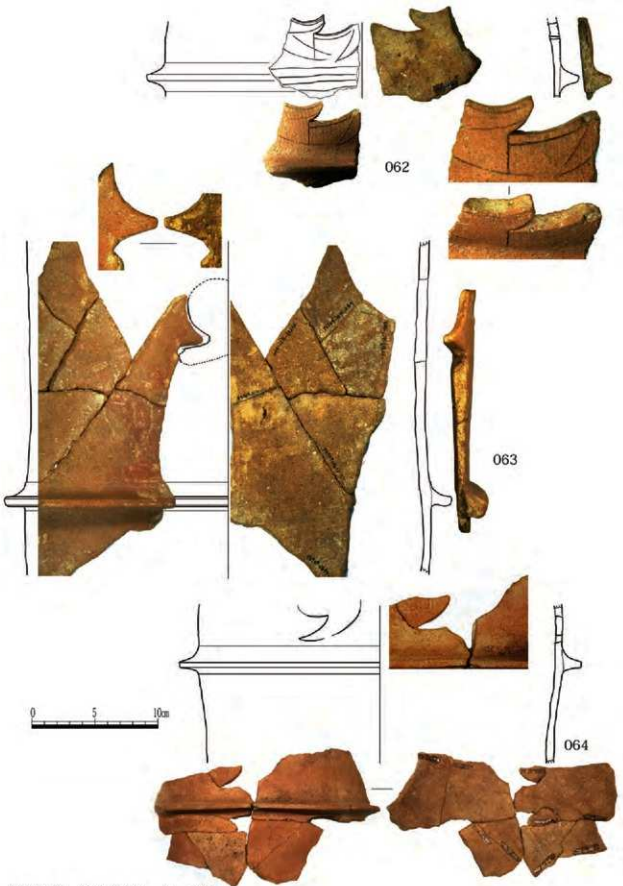
器体に対してやや垂れ下がり気味に貼付した突帯は基部幅 14mm、高 15mm と突出度の高い矩形を呈する。丁寧な横ナデで上裾は器体に密着するが、下側は多少接合が粗い。外面には 7 ～ 8 条／㎝の縦ハケ調整の痕跡が見いだせるが、その後に大部分をナデ消している。ハケ調整は穿孔前だが、透し孔縁辺の状態からみてナデ調整は穿孔後とみられる。内面は穿孔前に縦削りを行う。外面には部分的に塗布赤色顔料が認められる。

資料 064　5次 9tr　第 28 図　胎土第 50 図

突帯上裾にほとんど接するように巴形透し孔尾部及び円孔部の一端が残る。突帯部で径 31.6㎝と復元できる。透し孔下端は突帯上裾から 5 mm に位置する。透し孔の短径は推定 8㎝前後と大形だが、尾部は円孔に対して小ぶりで先端は鋭く尖るが左下を向き巻き込みはやや弱い。外周に線刻はない。破片残度と孔サイズから配置数は 4 方以下であろう。突帯の基部幅 15mm、高 14mm と強く突出し頂部に狭い面を設ける。突帯上裾側は丁寧な横ナデで器体に密着するが、下側はやや粗く一部に接合時の空隙を残す。外面には 4 条／㎝と目の粗い縦ハケ調整を施す。突帯下側ではハケ調整に重ねた貼付が観察されるが、上側では下方から延びる調整痕も残り、裾横ナデ部分に被ったハケ調整の端部が確認できる。突帯上方では貼付後にあらためてハケ調整加えている。穿孔はその後である。内面は左上がりに削り上げる。外面の一部に赤色顔料が残る。

資料 065　5次 9tr　第 29 図　胎土第 51 図

巴形透し孔と透し孔に取り付く沈線文をもつ体部片。破片中位に残る径 31㎝の突帯直上の 2 箇所に透し孔の下辺がある。それらの位置関係から 4 方配置と推測できる。一方は下方に左向きの尾部をおく巴形透し孔の一部で孔下辺はほとんど突帯上裾に接する。やや形が硬化した円孔部は径 6㎝前後と復元できる。尾部はあまり肥大化せずに先端を尖らせており、形は崩れていない。これに取り付く沈線文はない。円孔の下半 1 ／ 3 程度が残るもう一方の透し孔の位置はやや高く孔下端は突帯上裾から 2.6㎝距たる。残部は巴形とならないが、突帯と円孔下端の間にやや複雑な構図の沈線文を表現する。円孔を縁取る弧線とそれに取り付く線群、その下方に配した左端で閉じる弧線 2 条及び構図不詳の沈線群からなる。穿孔後の線刻と推測できる。円孔外縁の弧線群のうち最も内側の 1 本は整っているが、これに取り付く弧線群は二重線を意図したようにもみえるが、少なくとも 2 度引き直し、二重線は完成していない。あるいは下方線群の構図に合わせ左端で閉じる構図を意図したものかもしれない。いずれにせよ線刻は粗雑である。下方の左端で閉じる二重弧線は円孔外縁から逸れるように右方に延びる。破損部位があって定かではないが少なくとも下側の線は円孔外縁から 3.5㎝附近で緩やかに方向を転じて右下に向かう。それより右には左傾気味に立ち上がる別の沈線群の一部が残り、その一端と交差して終わる。線刻群の全体構図を窺えないが、左端で閉じる弧線群は位置と形状から巴形透し孔尾部の代替表現であるのかもしれない。この弧線群が、透し孔外縁から逸れて延び展開していることに注意しておきたい。かなり粗雑ではあるが、このように透し孔縁取り文様の域を脱した横方向展開を指向した沈線表現は他の船岡山 1 号墳資料にはない。



第28図　体中位部1（1／3）

垂れ下がり気味に取りつけた突帯は基部幅 10mm に対して高 14mm と細身で突出度は高い。外面には４条／cmのごく目の粗い縦ハケ調整を突帯貼付前に施す。内面は外面と同様の４条／cmの粗いハケ調整を施した後に縦削りを行うが、半ば近くはそれが及ばず先行するハケ調整が多く残る。器厚は最も薄い部分 6mm に対して最厚部は 12mm に達しており変化が大きい。しかもこの差異は垂直方向ばかりではなく水平方向においても顕著に認められる。上記した内面削り調整の不徹底がこれを助長しているように見える。残りは悪いが外面の全体に赤色顔料塗布の痕跡が観察できる。

資料 066　8次 17tr　第 29 図　胎土第 51 図

肩下部～第１突帯附近片で、突帯直上に沈線文の一部が残る。器体は突帯直上で内彎を強める。突帯下方の器厚７mm、上方は８mm 前後を測る。突帯は裾幅 20mm 前後だが高さは 19mm と鍔状を呈する。頂部に内傾気味の狭い端面を設ける。上裾は丁寧な横ナデで器体に密着させるが、下裾の整形は粗雑で接合部の空隙を残す。突帯上裾に一部被るように右上から左下に伸びる弧線を描く。３条確認できるが中線は左下で下線に接して終わる。ごく一部が残る上線は、下線に併走している。３本の間隔は最大５mm 前後である。また下線左端から５mm 離れて細い垂線の一部が残る。突帯下方では貼付前に７条／cmの縦ハケ調整を施し、上方では突帯裾に被さるようにハケ調整を斜めに加える。線刻はその後に施す。内面はナデ調整で内外面ともに赤色顔料は確認できない。

資料 067　9次 16tr　第 29 図　胎土第 51 図

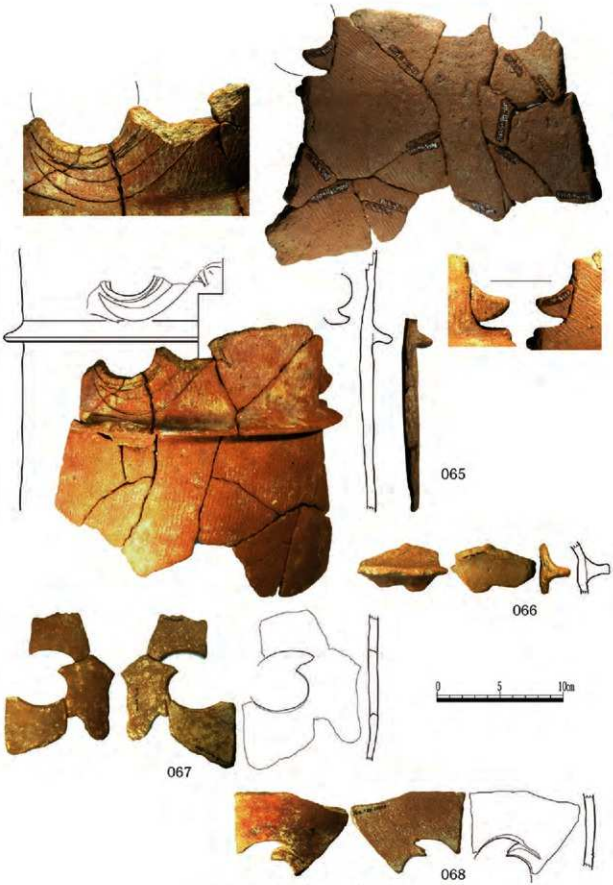
大形の巴形透し孔が残る体部片。透し孔の約３／４を残す。上下方向で約５cmに達する大形の透し孔で巴形の尾部は大きく発達し、全体がむしろ勾玉様を呈する。器面に対してやや斜めに工具を差込み、孔を穿つ。そのため部分的に生じた「バリ」状部分をあらためて刮いでいる。また途中で二三回以上操作を休止した形跡がある。外面は９～ 10 条／cm前後の細かな縦ハケを施した後に穿孔、さらに透し孔周辺中心に軽く横ナデを施す。内面は穿孔に先立って縦に削る。器厚は６～９mm と一様ではない。顔料塗布は穿孔後で、外面と透し孔切断面に断片的に痕跡をとどめる。

資料 068　9次 16tr　第 29 図　胎土第 51 図

巴形透し孔の尾部等をとどめる破片。破片下端の横ナデ調整の微細条線などからやや内彎気味に傾くように観察できるので、肩部片の可能性がある。そうであれば肩部長は 10cmを越えるものとなろう。尾部縁辺は弧状を呈する。また一部遺存する円孔部外縁に対し尾部の肥大化はない。全体に大形化しているものの形態面では比較的古相を保つ。尾部先端から引き出すような粗い沈線が２cmほど伸びる。外面には７条／cm程度のやや右下がり傾向の縦ハケ調整を施す。その後ナデ調整を加えハケ条線は全体として不明瞭になる。穿孔・線刻はこの後となる。また外面下端には上述のとおり明瞭な横ナデの痕跡がみられる。この部分はごくわずかな凹面をなしており突帯貼付時調整であろう。内面全体には穿孔前に縦削りを行う。器厚は７～８mm を測る。

資料 069　5次 9tr　第 30 図　胎土第 51 図

突帯直上に円弧をなす透し孔縁辺をとどめる破片。突帯部の復元径 26cmである。透し孔は円弧の約１／４程度が残存し、径７cm前後の円孔が復元できる。体径と合わせ４方以下の孔配置を推測すべきであろう。突帯は基部幅 16mm 高 15mm と少し裾が開いた突出度の高い台形様を呈する。貼付・密着は全般に丁寧だが、下側では若干の接合時の空隙を残す。頂部には狭い平坦面を作り出す。器体は厚７～９mm で外面の突帯下側には貼付前の６条／cmとやや目の粗い縦ハケ調整が認められる。一方上側には穿孔前の４～５条／cmの縦ハケ調整をみるが、少なくともその一部は突帯裾に乗り上げており、貼付後に施した可能性がある。内面は４条／cm程度と目の粗い縦ハケ調整を施



第29図　体中位部2（1／3）

した後に大部分に縦削りが及ぶ。器体と突帯の一部に赤色顔料塗布の痕跡をとどめる。

資料070　5次9tr　第30図　胎土第51図

破片上辺で突帯直上に直線的な透し孔縁辺をとどめる破片。突帯部径29.5㎝を測る。突帯は基部幅16mm、高12mmと裾が開いた台形様を呈する。頂部にはやや外傾気味に狭い平坦面を作り出す。突帯下側は貼付けがやや甘く接合時の空隙が多く見出される。透し孔縁辺突帯上側で裾からわずか5mm程度に位置し、約5㎝の幅で残る。三角形透し孔の底辺部であろう。縁辺残部左端から15mm離れて深い沈線1条が斜行して突帯上まで延びる。透し孔の縁取り的な線刻の可能性が高いが、線刻は深く幅広い。器厚は7～8mmで外面には貼付前に7条／㎝程度のやや目の粗い縦ハケ調整を施す。内面は縦削りと外面より目の粗い4条／㎝の縦ハケ調整がある。ただし前後関係は確定し難い。

資料071　8次16tr　第30図　胎土第51図

復元径29.8㎝の突帯部片。やや下がり気味に貼付した突帯は基部幅10mm高12mmと突出度の高い矩形を呈する。貼付・密着は丁寧で空隙を残さない。器体は厚8～10mm程度で外面には貼付前に施した10条／㎝の縦ハケが残る。内面は縦削りとみられるが著しく荒れ詳細は不明。突帯下面に局所的に赤色顔料の痕跡が観察できる。

資料072　9次16tr　第30図　胎土第51図

突帯を含む体中位部片。突帯部の復元径は34.6㎝である。やや下がり気味に貼付した突帯の基部幅15mm、高15mmで突出度の高い矩形を呈する。頂部は上下にやや張り出しむしろ基部より幅広い。貼付前に外面に9条／㎝の縦ハケ調整を施す。また破片下部にこれに先行する。幅4mm前後の太い叩き目の遺存を断続的に観察できる。内面は縦削りを施す。器厚は7～10mmを測り、外面側におおよそ4㎝前後の間隔で二段のたわみが読み取れる。成形時の粘土帯を反映する可能性がある。また器体外面と突帯下部に赤色顔料の遺存が認められる。

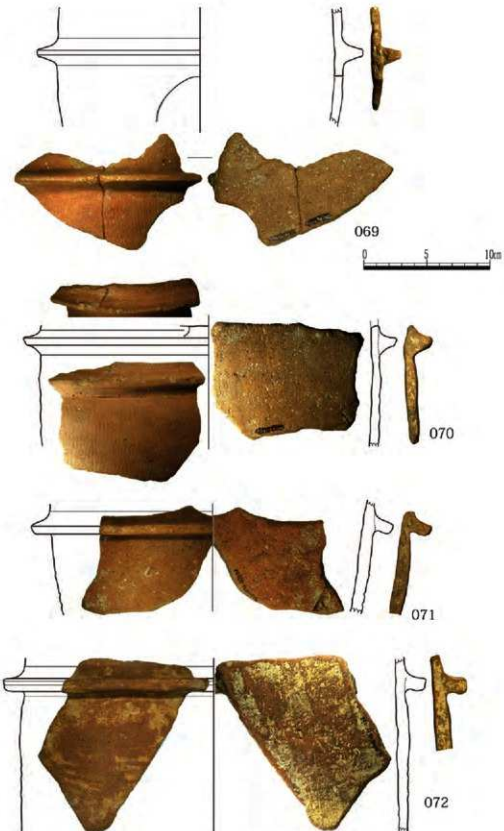
資料073　5次9tr　第31図　胎土第52図

突帯直上と破片下端に弧線をなす透し孔縁辺をとどめる破片。突帯部の復元径26.8㎝で突帯間隔は少なくとも15㎝以上となる。縁辺の形状から残部は巴形透し孔尾部下辺とみられる。透し孔は縦位置を揃える。突帯基部幅12mm高12mm程度で突出度の高い台形様を呈する。頂部には狭い平坦面を作り出す。貼付・密着はやや粗雑で下側に限らず接合時の空隙がまま観察される。器体は厚8～10mmとやや厚ぼったい。外面下端附近に10条／㎝は細かな縦ハケ調整がみられ、この後5～6条／㎝の目の粗い縦ハケ調整が以高に施される。

内面は指頭サイズの押さえ痕が密集して残る。興味深いことに圧痕の多くは凹面にわずかな細い隆帯を伴う。形状から爪痕ではない。当て具圧痕であろうか。少なくとも透し孔周辺はこの後にナデ調整が加わる。外面の一部に赤色顔料塗布の痕跡が観察できる。

資料074　5次9tr　第31図　胎土第52図

突帯を含む体部小片。器厚は突帯下方で8～11mmとやや厚手だが部分的な変異が大きく、突帯上方の器厚は6mmとなる。突帯は他個体のそれとはかなり形状を異にして低い三角形を呈する。裾幅12～17mmで高さ7mm前後を測る。およそ1㎝の間隔で刻み目を付す。突帯頂部から下面にかけて鋭利な工具を押し付け引くもので、また刻み目の延長位置で突帯下部の器面に短刻線が並ぶ。こうした点は他個体の刻み目突帯と異なり個性的である。外面は突帯貼付前に15～17条／㎝と細密な縦ハケ調整で仕上げる。内面は縦削りで局所的に事後の指押さえ痕が残る。外面の一



第30図　体中位部3（1／3）

部に顔料塗布の痕跡がみえる。

資料 075　3次 9tr　第 31 図　胎土第 52 図

突帯貼付部片。基部がやや広がるが突出度の高い突帯を付す。基部、突帯高ともに 15mm 前後を測る。突帯頂部は丸く収め、1㎝前後の間隔で浅く細い刻み目を加える。器体部外面は突帯から連続する横ナデ仕上げ。器厚は 6 ～ 7 mm を測る。内面は 4 条／㎝とごく目の粗い斜位のハケ調整がみえる。赤色顔料塗布の有無は確認できない。

資料 076　8次 17tr　第 31 図　胎土第 52 図

突帯部片。一見中世羽釜を想起させるほどに極度に突出した突帯をもつ。中世土器と混在するためその懸念もあるが、後述するように突帯頂部に刻み目があり、この点に留意して埴輪片と判断した。突帯は基部幅 7 mm に対して高 15mm と細身で微妙に撫曲気味に強く突出する。端部にはわずかに外傾する狭い面を作り出す。端面には 6 ～ 7 mm 間隔で施された浅い刻み目 4 箇所が観察される。外面には 6 条／㎝と目の粗い縦ハケがみえる。その末端は突帯下裾に接しており、貼付後に施された可能性がある。内面は大部分剥落するが、残部は横ナデ仕上げ。赤色顔料は確認できない。器体厚は 6 ～ 9 mm を測る。

資料 077　8次 17tr　第 31 図　胎土第 52 図

突帯部片。裾幅 16mm 高 10mm 前後の台形様の突帯を付す。頂部は丸く収め、およそ 10mm 前後の間隔で浅い刻み目を加えている。外面には貼付前に 12 ～ 13 条／㎝の細密な縦ハケ調整を施す。内面は縦削りで、器厚 8 ～ 9 mm を測る。赤色顔料塗布の有無は確認できない。

資料 078　3次 9tr　第 31 図　胎土第 52 図

破片の一端に直線的な透し孔縁辺をとどめる突帯部片。基部幅 17mm 裾が大きく開くが、高 11mm を測り端部は丁寧に平坦面を作り出す。貼付が丁重で破片上下方向の判断は難しい。図示方向では突帯上裾から 5 mm 離れて，おそらく三角形透し孔底辺とみられる直線的な縁辺が約 5㎝分残る。外面は突帯から連続する横ナデ調整が広がり、内面は縦削りだが及ばない部分が小さくない。器体厚 8 mm で外面と透し孔切り取り面に赤色顔料が良好に残る。

資料 079　8次 17tr　第 31 図　胎土第 52 図

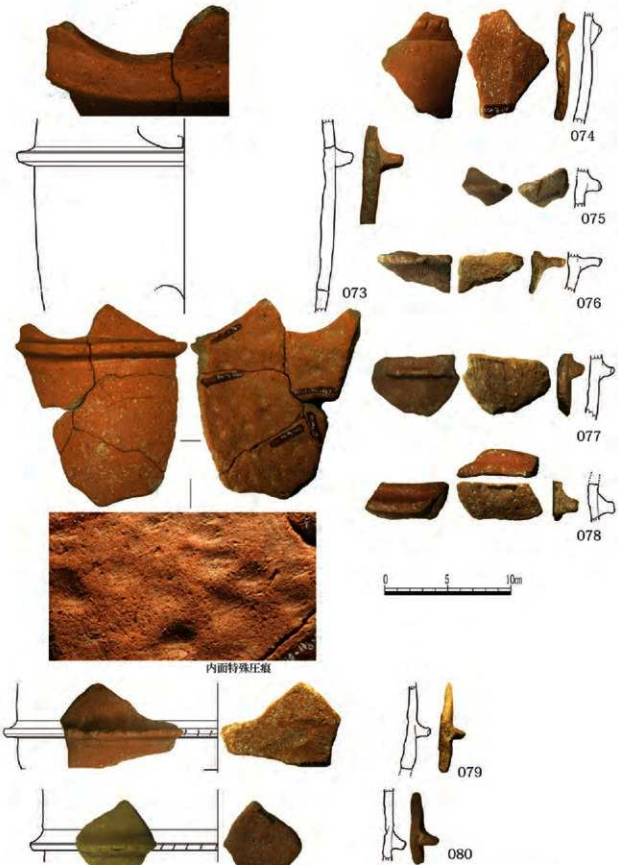
突帯部片。径 33.9㎝と復元できる。器厚は突帯下方で 9 mm 前後、上方は 6 ～ 7 mm と目立って変化する。やや裾部が開く突帯は高 15mm、裾幅 11mm を測る。やや下がり気味に貼付する。上側の横ナデは丁寧だが、下側は多少粗雑で接合部の空隙が残る。頂部はやや外傾する狭い面を作り出すが横ナデで上下の角を落とす。頂部には幅 3 mm 前後のやや幅広い断面Ｖ字形の刻み目がある。間隔は 10 ～ 13mm と揃っていない。突帯の下方 23mm を隔て直線的に横走する透し孔縁辺が残る。三角形透し孔であろう。器体外面はひどく荒れ調整不明、内面はやや左に傾いた縦削りを施す。その後一部にナデ調整が及んでいる。突帯下面の一部に赤色顔料を確認できる。

資料 080　3次 9tr　第 31 図　胎土第 52 図

突帯部片。突帯部の復元径は 30㎝となる。基部幅 10mm、高さ 12mm と細身で突出度の高い突帯を垂下気味に貼付する。器表の荒れで判然としないが、頂部は狭い平坦面を作り出すようだ。頂部にはほぼ 1 ㎝間隔で細い刻み目を加える。外面は縦ハケ調整とみられるが詳細は不明。内面の荒れがひどく確定し難いが縦削りの可能性が高い。

資料 081　5次 9tr　第 32 図　胎土第 53 図

二段の突帯部を含む体部中位片。上部突帯復元径 31.2㎝、下部突帯は 27.6㎝で、突帯間隔は



第31図　体中位部4（1／3）

14.3㎝である。遺存する上段突帯上部に透し孔のごく一部がみえるが本個体の段構成（二段構成／三段構成）は判別はできない。焼成の雰囲気や色調、使用ハケ工具は、底部片・資料093や有文巴形透し孔の残る体部片・資料065に酷似しており、同一個体の可能性を考慮したが接合関係はない。報告上は別個体と取り扱っておく。

透し孔外縁の一部が残るのは上部突帯直上の破片端部で、その形状は円弧をなす。その下端は上部突帯にごく接するだろう。透し孔の詳細や配置は復元しがたい。突帯間隔（上下突帯頂部間隔）は14㎝を測る。上部の突帯は細身の矩形を呈し頂部には整った面を設ける。高さ13mmと突出度は大きい。わずかに下がり気味に取りつけ丁寧な横ナデで上下の突帯裾を器体に密着させるが、下側は局所的に接合部の空隙をとどめる。下部の突帯は高さ11～12mmでやや低く裾部はやや幅広で全体として突出度は大きいが台形様をなす。突帯頂部はわずかに丸みを帯び沈線状の狭い溝1条が残る。上側裾は上段突帯と同程度に丁寧な横ナデ仕上げで接合部をほとんど残さないが、下側は粗雑で半ば以上で器体と突帯の間にかなり目立つ空隙をとどめる。

体部外面は4条／㎝の目の粗い工具で概ね縦方向のハケ調整で仕上げる。工具幅は20mm程度と推定される。下部突帯の不十分な貼付箇所の観察から破片下部のハケ調整は下段突帯貼付前に施されたことが明瞭に読み取れる。下段突帯貼付に先立ち下方から連続するやや左方に傾くハケ調整は下部突帯上5～6㎝附近まで達する。それより上方のハケ調整は下段突帯貼付後に施される。上方のそれはわずかに右方に傾くように上下突帯間に充填される。ハケ目下端の一部は下部突帯上裾の横ナデ調整に切り込んでいる。上部突帯下裾の横ナデ調整でこのハケ目は確実に潰れるので、上部突帯貼付はその後となる。やはり上段突帯貼付後にそれより上方の縦ハケ調整が行われている。本個体は下方から器面調整（縦ハケ）と突帯貼付を交互に進めた可能性が高い。内面はまず成形後に4～5条／㎝程の目の粗い工具でハケ調整を施す。ハケ目の形状から使用工具は一様ではなく、かつハケ調整の上下間に未調整部分が帯状に残るので段階的に施された可能性がある。大部分をおおむね縦方向で削り上げる。外面には赤色顔料塗布の痕跡が部分的に残る。

資料082　5次9tr　第32図　胎土第53図

突帯を挟んだ底部段及び体中位部片。突帯下方では内彎しつつ目立って径を減じる形状から底部段と推測した。透し孔部は遺存していない。底部段は高18㎝分が残る。破片下端は内彎し、またこの部分で次第に厚くなるので底部端までさほど距離はないだろう。底部段は本来高20㎝強と見積もることができる。わずかに反るように立ち上がる突帯上方の中位段は高18㎝が遺存し破片上端にわずかな横ナデ仕上げの痕跡が残るのでこの部分の突帯間隔は18～19㎝程度となろう。突帯部の復元径は33.7㎝となる。全体の段構成は不明である。中位段の器厚は概ね6～7mmとやや薄い。底部段上端は器厚8mm、下端附近では9～10mmを測る。突帯の基部幅18mm、高12mm、先端を丸く収め突出度の高い三角形様を呈する。上裾は丁寧な横ナデで器体に密着させるが、下方はやや粗く空隙が残る。

外面は4条／㎝程度のごく目の粗い縦ハケ調整を突帯貼付前に底部段～中位段まで連続的に施す。高33㎝の残存部で5段分の調整単位を読み取ることができる。内面はヘラ削りで、底部段の半ば付近までは右上がりに削り上げ、その後以高の部分をほぼ垂直に削り上げる。外面中位段～突帯では断片的だが塗布した赤色顔料を観察できる。底部段では顔料は突帯下方約2㎝までは観察できるが、以下では確認できない。境界は不明瞭だがこの附近が顔料塗布域の下限とみられる。

資料083　8次17tr　第32図　胎土第53図

突帯部片。基部幅 10mm、高 13mm と細身で突出度の高い突帯を付す。頂部にやや外傾する狭い凹面を作り出すが上下端はナデで角を落とす。突帯上部のわずかな器体残部に二種の縦ハケ調整がある。ともに 12 条／㎝と目は細かい。器体は厚 6 ～ 7 mm を測る。赤色顔料塗布の痕跡はみえない。一つは突帯貼付前のハケ調整で裾部の強い横ナデでかなりかすれている。もう一方は明らかにこの横ナデ調整を切り込み施す。前者は下方から突帯貼付部を越えて施し、後者は突帯貼付部直上から新たに加えている。器面調整と突帯貼付の手順が判る資料である。内面は縦削りする。

資料 084　9 次 8tr　第 32 図　胎土第 53 図

透し孔縁辺の一部をとどめる突帯部片。やや下がり気味に貼付した突帯は基部幅 11mm 高 14mm とごく細身で強く突出する。頂部は丸く収める。器体に 7 条前後／㎝と目の粗い縦ハケ調整を施した後に丁寧に突帯を貼る。突帯上裾から約 5 mm 隔てて水平方向に伸びる直線的な透し孔縁辺が約 2㎝分残る。三角形透し孔底辺の可能性がある。内面は同程度に目の粗い縦ハケ調整突帯貼付部～透し孔をナデて平滑化する。器厚は 8 ～ 9 mm を測る。外面と透し孔切り取り面に赤色顔料が残る。

資料 085　8 次 17tr　第 32 図　胎土第 53 図

突帯部片。裾幅 11mm、高 11mm の突出度が高い台形突帯を付す。下側の接合がややあまく接合にわずかな空隙を残す。器厚は 7 ～ 8 mm、器面がひどく荒れ外面調整は不明、内面縦削りである。赤色顔料の塗布は確認できない。

資料 086　3 次 9tr　第 33 図　胎土第 53 図

底部小片。わずかな内彎傾向を帯びつつ鈍く開いて立ち上がる。最大器厚 11mm で、底部下端 5 mm、破片上端で 8 mm を測る。内面下端 2 ㎝前後の幅を強く横削りして形状を整え、器厚を減じている。以高は右上がり斜方向に削る。外面は判然としないが破片上部まで縦に削りその後にナデ押さえている可能性が高い。

資料 087　7 次 16tr　第 33 図　胎土第 53 図

底部片。下端から約 8.5㎝遺存する。内彎気味に緩く開きつつ立ち上がる。中位以上の器厚 10mm 前後に対して下端は 6 ～ 8 mm と少し薄く、概ね丸く収める。外面はひどく荒れ仕上げ調整は不明。局所的にハケ目らしい斜方向の条線が断片的に観察されるが、全面に及んでいるわけではなさそうだ。内面は破片上端まで横位の削りが及ぶ。内外面ともに赤色顔料塗布の痕跡はみない。

資料 088　8 次 16tr　第 33 図　胎土第 53 図

底部片。現状で高さ 18㎝を越え、上端に下段突帯貼付の痕跡が見えないので、本来の底部高はさらに高い。明らかに内彎傾向を以て鈍く開き立ち上がる。外面は二種のハケ調整で仕上げる。上端から半ば附近までは 6 条／㎝で目の粗い縦ハケがみえる。これは下端まで及ばない。その後下端より 7 ㎝附近まで明らかに原体を違える 9 ～ 10 条／㎝の細密な縦ハケを加えている。内面は下端から 6.5㎝ほどに丁寧に横削りを施す。特に下端部は底部附近の薄化と整形につとめる。以高の全体は縦削りとなる。この結果大部分の器厚は 7 ～ 9 mm 程度に仕上げ、下端附近は 5 mm 前後の薄さとなる。内外面ともに赤色顔料塗布の痕跡は見えない。

資料 089　8 次 16tr　33 第図　胎土第 54 図

下端から約 11㎝が残る底部片。ごくわずかな内彎傾向を帯びつつ鈍く開き立ち上がる。器厚は下端で 7 mm、その直上の最厚部 10mm、破片上端で 8 mm となる。また外面側で下端より 2.5 ～ 3㎝間隔で 4 段のごく緩いたわみが観察される。成形時粘土帯を反映する可能性がある。外面には

4条／㎝のごく目の粗い縦ハケを施す。残部だけでハケ調整は4段を数える。一回毎の動作範囲はごく短い。内面は螺旋状に斜めに削り上げるが、下端と底面は別に細かく横削りして形を整える。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料090　9次16tr　第33図　胎土第54図

下端から高約20㎝が残る底部片。わずかに内彎気味に鈍く開き立ち上がる。下端附近の最大厚12mm、破片上端附近では7mmを測る。外面は下端から18～20条／㎝の細密な縦ハケ調整を施す。内面は下端から6㎝前後までを横に削り、以高は縦削りとなる。端面はヘラ切りで整える。赤色顔料塗布の痕跡はみられない。

資料091　9次16tr　第33図　胎土第54図

下端から高約19㎝分残る破片。破片下部の最大厚14mmに対し上端附近は8mm、下端附近では7mmとなる。外面では概ね4～5㎝間隔で計5段の鈍いたわみが観察される。断面の観察では判然としないが成形時の粘土帯を反映する可能性がある。外面は下端から高さ11㎝前後まで10条／㎝の細かな縦ハケを施すが、5～6条／㎝程度の原体に換えて以高のハケ調整を行う。内面は下端から最大4㎝前後までを3段の横削りで整える。これによって下端部を目立って薄く仕上げる。以高は続いて縦削りを施すが下面のヘラ切りはない。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料092　5次9tr　第34図　胎土第54図

底部片。歪みで精確ではないが底部径は24㎝前後と復元できる。下端は内方に大きく押し出され、断面形はほとんど如意状を呈する。おそらく拙速な粘土帯積み上げ成形で軟弱な下部が自重で潰れたのであろう。しかしこの部分を除去せずに削り調整で形状を整えている。下端の器厚は最大22mmに残していて、体下部成形時の粘土帯の厚さを復元する一つの手がかりとなる。内面を螺旋状に削り、体部の器厚を整えた後に潰れて変形した下端の整形に取りかかる。底部内縁の修復に主眼がおかれ潰れてはみ出した粘土の端を細かく刮ぎ取って形を整え余剰部を切り抜く。しかしこうした底部調整は下面と外面には及ばず設置面（下面）は未調整で、刻み藁状の圧痕が残る。外面はほとんど下端から4条／㎝ほどのごく粗い工具で縦ハケ調整を加える。赤色顔料の塗布痕跡はない。また興味深いことに下端外面の一部には焼成時破裂の円盤状剥落痕を明瞭に認める。

資料093　5次9tr　第34図　胎土第54図

下端～下部突帯の底部片。本個体の突帯段数（二段構成／三段構成）は不明である。資料081・082に全体として酷似するが接合関係にはなく、ここでは別個体として報告しておく。底部高24.4㎝で、下端外径約14㎝、突帯部径27.8㎝に復元できる。底部は内彎気味に弱く開いて長く立ち上がる。剥落面に明瞭にハケ調整を残すので突帯貼付は底部ハケ調整より後となる。突帯の高さは10mm程度で裾がやや広がり台形様を呈する。突帯頂部はわずかに丸みを帯び沈線状の狭い溝1条が残る。上側裾は丁寧な横ナデで器体に密着するが、対して下側は接合が甘く断続的に接合部の空隙が見える。底部の器厚は一様ではない。半ばよりやや下寄りの部位は厚さ14mmに達するが、下端は6～9mm、大半は9mm前後を測る。器厚の目立った差異は内面ヘラ削りによるとみられる。少なくとも底基部は成形時には14mmを越える厚さの粘土帯からなり、乾燥の進捗に応じて整形時に整えられたものであろう。基部から約7㎝前後の高さまで螺旋状にほぼ四周分を削り、器厚を減じている。十分に余剰粘土を刮ぎきれなかった部分が厚く残っている。次いで以高は縦に削り上げる。破片上端隅に削り後に加えた目の粗いハケ調整の末端が残る。底部の削り調整は底面にも及ぶ。しかし外面側では下端附近の狭い範囲で潰れてはみ出した部位を取り除けるだけである。

外面下端附近で不連続に横方向に深いしわが残る。自重による変形であろう。外面全体は４条／㎝ほどのごく目の粗い工具でハケ調整を施している。比較的残りが良くハケ調整は下端から三段階で突帯までの間を充当している。突帯より上方は貼付後にあらためてハケ調整を加えた可能性が高い。

資料 094　５次 9tr　第 35 図　胎土第 54 図

最下段突帯及び底部段片。突帯部径は 30.8㎝に復元できる。底部段は突帯下約 15㎝まで残る。内彎気味にすぼまり、突帯直下の器厚 10mm と全体的に肉厚だが、破片下端ではそれが 15mm に達する。突帯基部は幅 14mm とやや広いが高 15mm を測り頂部に明瞭な面を作り出す。貼付後丁寧に横ナデして接合するが、下面側はやや粗く空隙を残す。外面には貼付前に３条／㎝とごく目の粗い縦ハケ調整を施す。内面も突帯裏面附近まで同じ目の粗い縦ハケをやや左傾して施す。この後粗く左上がりに削るが、それが及ばずハケ調整を残す部分も多い。また破片下端の５㎝ほどは底部整形の横削りが残る。突帯直下で一箇所上方から垂れたように赤色顔料一筋が観察される。底部段には顔料を塗布しなかった可能性がある。

資料 095　５次 9tr　第 35 図　胎土第 54 図

底部片。底部径 16.2㎝で下端から 24㎝が残る。突帯下の横ナデ調整が破片上端でも見いだせないので、底部段は少なくとも 25㎝以上の高さとなるだろう。底部は内彎気味に開き立ち上がる。下端から 2㎝ほど上がった最厚部で 11mm、破片上端の器厚は５mm に減じている。下端は内外面と底面を細かく削り落として薄く仕上げる。外面はほとんど下端から４条／㎝と目の粗い縦ハケ調整で整える。残存する高２４㎝を概ね三段で調整する。使用原体の幅は 2.3㎝程度と推測できる。ハケ調整の後に外面下端のヘラ削り（底部調整）を加える。内面は下端から５㎝前後を横削りし、それ以上は高 15㎝附近まで右上がり方向で斜めに削るが、後に削り上端部を含め以高はナデで仕上げる。内面ヘラ削り後にあらためて下端の細かい底部整形の横削りを加える。外面の破片上端附近に限ってわずかだが塗布赤色顔料の痕跡が認められる。

資料 096　９次 17tr　第 36 図　胎土第 54 図

底部片。わずかに内彎気味に開きながら立ち上がる。破片上端の器厚８mm に対して下部の最も厚い部分では 15 ～ 16mm に達するが、下端附近では６mm 前後まで減じる部分もある。自重で潰れた部分をこまめに刮ぎ落とし、特に下端部の形を整えている。外面は荒れており詳細を読み取りにくいが、下端から少なくとも破片上端（高さ９㎝前後）まではハケ調整を省いているようだ。削り痕跡も定かではなくやや粗雑なナデ・押さえで器面調整を終えている。内面は下端から２～３㎝の範囲を上記した底部整形し、以高は大きく螺旋状に削り上げる。

資料 097　９次 16tr　第 36 図　胎土第 55 図

底部片。下端から内彎気味に鈍く開き立ち上がる。器厚は９～ 11mm を測る。外面は下端から４条／㎝とごく目の粗いハケ調整を縦あるいは斜めに施す。内面横削り後縦削りで、端面はヘラ切りして整える。赤色顔料塗布の痕跡は見えない。

資料 098　４次 9tr　第 36 図　胎土第 55 図

底部片。自重によるつぶれを完全に解消できずに下端はわずかに肥厚する。外面はほとんど下端近くから４条／㎝とごく目の粗い縦ハケ調整を加える。内面は下端附近をせいぜい幅２㎝ほど横削りして整形した後に以高に縦削りを加える。下端の器厚 12mm 前後、破片上端附近 10mm を測る。

資料 099　９次 16tr　第 36 図　胎土第 55 図

底部片。やや内彎気味に鈍く開き立ち上がる。器厚は下端附近９mm、破片上端では７mm となる。

外面は二種の原体によるハケ調整を見る。4条／㎝とごく目の粗いハケ調整を縦あるいは斜めに施す。この後10条／㎝の幅狭いハケ原体で横に払った痕跡が残る。下端からのハケ調整は長5㎝内外で短い。内面は下端から縦削りで端面は斜めにヘラ切りする。赤色顔料塗布は確認できない。

資料100　5次9tr　第36図　胎土第55図

底部片でやや内彎気味に立ち上がる。外面下端から5条／㎝と目の粗い縦ハケを施す。その後下端の狭い範囲を斜めに切り落として底面周辺を整形する。内面は横削りで、底面をヘラ切りした後に内面下端3㎝ほどを殊更に深く削る。この結果　破片上端附近の器高6mm、中程の最厚部13mmに対して下端附近は8mm前後となる。外面に赤色顔料はみえない。

資料101　5次9tr　第36図　胎土第55図

底部片。下端から高約8㎝（長9㎝）の破片で内彎傾向は少なく緩く開きながら立ち上がる。器厚は部分的に14mmに達するが、下端～破片上端で多くは9mm前後である。外面は13条／㎝程度の細密な縦ハケ調整を下端附近から施す。その後、部分的にナデを加えた形跡があるが、あくまで局所的である。内面は下端から縦削りで、下面と周囲の狭い範囲に細かく横削りを重ねて下端の器厚と形状を整えている。赤色顔料塗布の痕跡は観察できない。

資料102　8次16tr　第36図　胎土第55図

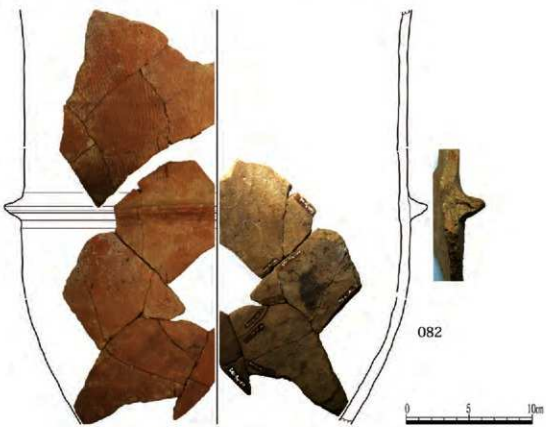
底部片。下端から高約15㎝（長16㎝）の破片で下端から内彎気味に立ち上がる。破片中位～上位の器厚は7～8mm、下端でも9mm前後と薄く仕上げている。外面は下端から4条／㎝と目の粗い縦ハケ調整を施す。ハケ調整の長さは5～6㎝／と、一度にあまり長く引かない。内面は下端左右に向きを変えつつ全面に斜位の削りを施す。また底部下面をヘラ切りする。粘土帯の接合痕は残さないが、外面に3～4㎝おきのわずかな起伏が帯状に観察される。成形時の粘土帯を反映するものかもしれない。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料103　8次16tr　第36図　胎土第55図

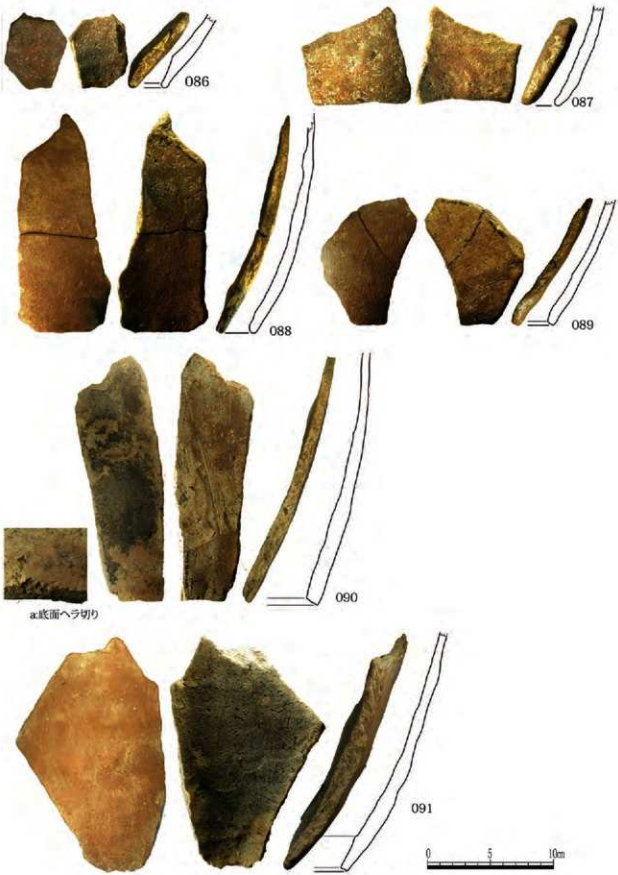
下端から約9㎝残る底部片。底部復元径は18.8㎝である。破片中位から上端の器厚は15mmを測るが、下端は10mm前後と相対的に薄い。下端は、自重で潰れた末端がやや内側にせり出すように多少の変形が見受けられる。外面は12条前後／㎝の細密な縦ハケ調整の後、下端附近約1㎝幅に強い横ナデを加えている。底面は局所的にヘラ切りした痕跡があるが、全体には及んでいない。内面全体に横削りの痕跡を残すが、下端の潰れ・変形は削り後に発生したようだ。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料104　9次9tr　第36図　胎土第55図

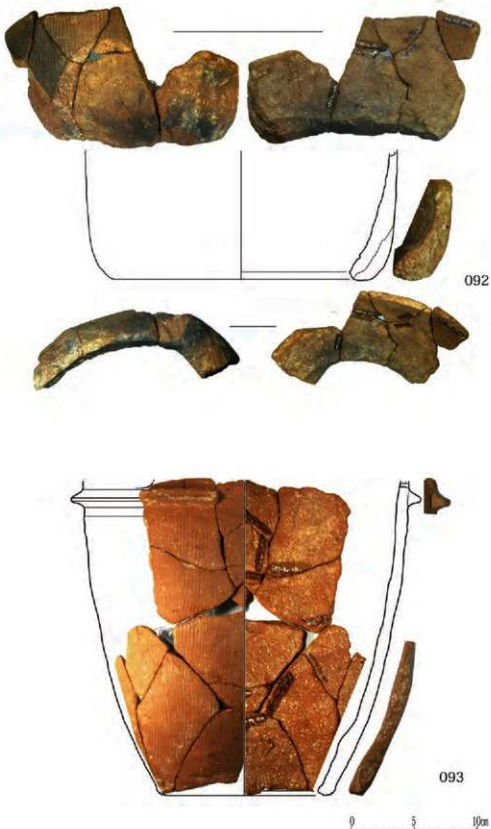
底部片。歪みがあり精確ではないが底部径は約13㎝と復元できる。下端から2㎝弱は不安定に直立し、その後内彎気味に鈍く開く。下端附近は厚手だが厚9～13mmと揃わない。破片上端で器厚は約8mmとなる。全体として器面が荒れ詳細は定かではないが、外面基部付近の直立部には横位の強い指ナデか削りを施した可能性がある。それより上には4条／㎝の目の粗いハケ調整を加えるが、縦方向ないし斜方向で重複も多く整ったものではない。内面下端の直立部分は粗く指押さえで形状を整え、およそ3～4㎝程度の幅を横方向に削り、さらにその上方では方向を左右に違えながら斜方向に削る。赤色顔料塗布の痕跡はみえない。



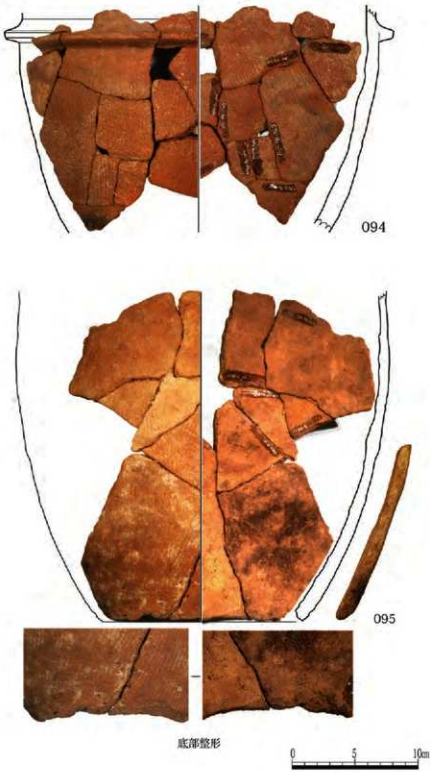
第32図　体中位部5（1／3）



第33図　底部1（1／3）



第34図　底部2（1／3）



第35図　底部3（1／3）

第２節　小形器種類

資料 105　８次 17tr　第 37 図　胎土第 56 図

小形短頸壺　強く張った体部にわずかに外傾する短い口頸部が付く。高松茶臼山古墳の第Ⅰ主体石槨内棺外で検出された、内面に水銀朱が濃密に付着する無頸壺の形状に近い。もっとも口頸部の作出と仕上げ調整は本品の方がより丁重である。口頸部・肩部とも器厚は４mm 前後を測る。口頸部は内外面ともに丁寧な横ナデを重ねて整える。さらに端部は外方と頂部を挟み付けるように横ナデし、狭い端面が鈍く外方に張り出す。同時に内方も小さく突き出す。肩部外面は細密な縦ハケの後に全体にナデを加える。内面はおそらく横位のヘラ削りを施し、その後に外面と同様に丁寧にナデ仕上げる。本品も内面の数ヶ所で点的に鮮やかな色調の赤色顔料が残る。水銀朱の可能性が高い。

資料 106　８次 17tr　第 37 図　胎土第 56 図

小形器種の口縁部片。強く外反して開く口縁端部附近の小片で破片基部側で器厚４mm 前後、端部直下で３mm となる。口縁端部は丸く収め、ごくわずか内方に小さく肥厚させる傾向が見てとれる。内外面横ナデ仕上げ。短頸壺・小形甕・鉢・高坏等の可能性があるが小片のため特定は不可能である。赤色顔料の塗布は確認できない。

資料 107　８次 17tr　第 37 図　胎土第 56 図

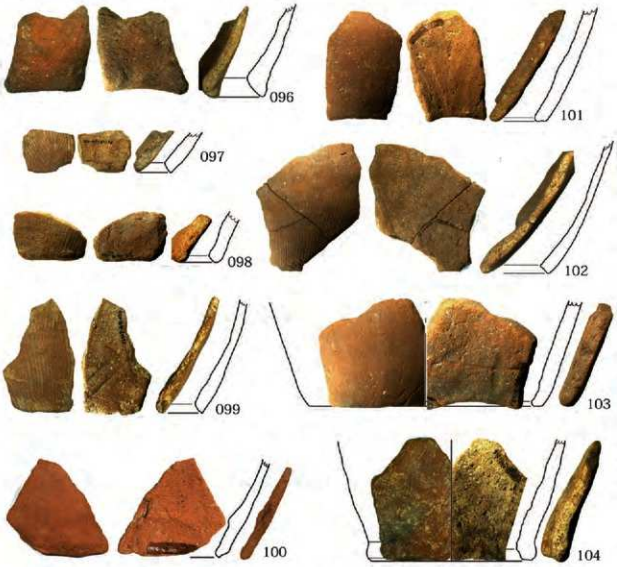
小形器種底部片。底面を大きく穿ち、縁辺部から強く開く。破片上部で器厚４mm、下端で6mm を測る。刳抜縁辺はナデ押さえ丸く収めるが仕上げはやや粗い。外面は７～８条／cm程度の縦ハケ調整が断片的に観察できる。内面は削り後にナデ押さえている。器種は小形の壺と推測する。

資料 108　８次 17tr　第 37 図　胎土第 56 図

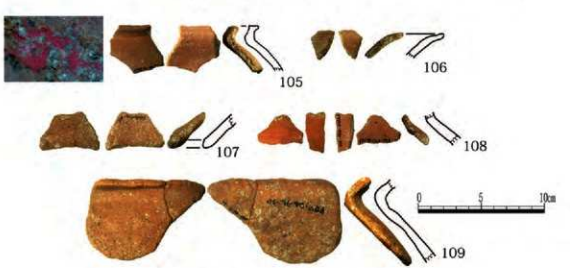
小形器種の肩部片。器厚５mm 前後で、破片上端に屈曲部の一部が残る。緩やかに折り返し口頸部に至る形態であろう。内外面ともに横ナデ仕上げである。内面はかすかに横方向の粗い条線の痕跡が観察されるので先立ってハケ調整を施した可能性が高い。外面の一部に赤色顔料がみられるが、内面には及んでいない。

資料 109　４次 9tr　第 37 図　胎土第 56 図

肩部～口頸基部片。内面は器表がひどく剥落するが、本来的に器壁が薄いとみられる。現状で肩部の平均的な器厚は５mm 前後、頸部側で 4.5mm にすぎない。中小形壺ないし甕の可能性がある。比較的強く張った肩部から口頸部は緩やかに折り返す。折り返し部附近は横ナデ仕上げ。肩部は器面の荒れで不詳。同様に内面も判断しがたい。赤色顔料塗布の痕跡は認められない。



第36図　底部4（1／3）



第37図　小形器種（1／3）

第３節　透し孔・線刻他資料（埴輪類・写真）

資料 110　３次 9tr　第 38 図　胎土第 56 図

体部片　破片の左縁は三角形透し孔の側辺となる。破片全体で 17 条の鋭利な篦描沈線が透し孔側辺に概ね平行と斜交する二方向で刻まれる。下端に横方向の沈線一条の痕跡が残る。一見複合鋸歯文風だが、二方向の沈線群の接触部は揃わず整った文様構成とは言い難い。また沈線間隔も３～６mm と乱れている。外面全体には 12 条以上／㎝の細密な縦ハケ調整を施し、その後に線刻を加え赤色顔料を塗布する。内面は丁寧なナデ調整で平滑化した上で、疎らに縦削りを加える。この結果、器厚に５～８mm の差が生じる。

資料 111　５次 9tr　第 38 図　胎土第 56 図

直線的な透し孔縁辺とそれに取り付く沈線文を残す小片。図示した破片右辺に、ハケ調整方向から推測して三角形透し孔側辺をとどめる。縁辺から２mm 空けて概ね並行する５条の沈線文を刻む。ただしうち２条は途中で他線に接し終わっている。その左方に配された、これらと斜交する５条の併行沈線とで複合鋸歯文風の構図となる。10 ～ 12 条／㎝程度の細密なハケ調整の後に穿孔・線刻する。内面は縦削りを施す。器厚は８mm 前後で外面と透し孔切り取り面に赤色顔料がよく残る。

資料 112　５次 9tr　第 38 図　胎土第 56 図

一端に三角形透し孔の一辺と沈線１条が残る破片。図示した破片左下に直線的な透し孔縁辺が残り、この外側に８～ 12mm の間隔をおいてごく繊細な沈線１条が走る。厳密に透し孔縁辺に併走する構図ではない。外面に 15 ～ 16 条／㎝のごく細密な縦ハケ調整を加えた後に穿孔・線刻する。内面は一部に穿孔前の縦削りが認められ、その後にナデ仕上げを加える。外面から透し孔切り取り面に赤色顔料の塗布が及ぶ。器厚は７mm 前後を測る。

資料 113　８次 16tr　第 38 図　胎土第 57 図

図示した破片上辺に直線的な透し孔縁辺をとどめ直下に２条の沈線を配す。また破片下部に、透し孔縁辺から約２㎝隔てて突帯剥落痕が残る。透し孔縁辺附近の器厚 11mm に対して突帯剥落部では９mm を測る。透し孔は三角形を呈する可能性が高いが、縁辺と沈線ともに若干の彎曲が読み取れるので、残部が巴形透し孔尾部下辺に相当することも否定しがたい。透し孔縁辺と２条の沈線は各々５mm 前後の間隔を以て平行する。突帯剥落部に縦ハケ調整の一端がかろうじて読み取れるが、その外方はナデ調整で消える。内面は縦削りを施す。赤色顔料塗布の痕跡は観察できない。

資料 114　５次 9tr　第 38 図　胎土第 57 図

三角形透し孔の底辺左端部を残す。透し孔の 3.5㎝下方に突帯剥落部の一端をとどめる。透し孔の周囲に縁取り文様はない。外面は穿孔前にハケ調整を施す。ハケ調整には二種の原体を併用する。透し孔下辺附近以下では３～４条／㎝の原体でやや右下り方向に施す。若干空けてこれ以高では５条／㎝の原体をほとんど垂直に操作する。内面には穿孔前の右上がり・左上がり方向の削り調整をみる。内外面ともに赤色顔料塗布の痕跡はない。器厚は８～９mm を測る。

資料 115　４次 9tr　第 38 図　胎土第 57 図

一端に三角形透し孔の一辺と隅部をとどめる破片。器厚は７～８mm で外面に４条／㎝程度の目の粗いハケ調整を施した後に穿孔する。内面は図示した下半には横削り、上半には左上がりの斜位の削りを施す。穿孔はこの後とみられる。赤色顔料の痕跡は見えない。

資料 116　３次 9tr　第 38 図　胎土第 57 図

上部に突帯剥落部を、左辺下方に三角形透し孔の縁辺をとどめる破片。器厚は5～6mmと薄い。透し孔に取り付く線刻はない。外面に穿孔前にややや左傾する9条／cmの縦ハケ調整を施す。突帯剥落部直下の幅1cmほどは貼付時の横ナデでハケ調整は消えている。しかし突帯剥落部が良好な状態で遺存するにもかかわらずハケ調整の痕跡は全く認められない。連続的な指押さえによる凹面が重なり並ぶだけである。したがって器面ハケ調整は突帯貼付後に施された可能性が高い。内面には縦削りを加え、その後、器面を連続的に押さえている。

資料117　4次9tr　第38図　胎土第57図

一端に横方向の直線的な透し孔縁辺をとどめる破片。縁辺から約5mmの間隔で沈線1条が併走する。図示した破片下端に強い横ナデが認められる。突帯貼付位置を反映するとすれば透し孔は突帯から3～4cm程度離れる可能性が高い。外面に14～15条／cmの細密な縦ハケ調整を施した後に穿孔・線刻する。内面は穿孔に先立って縦方向に削る。器厚7mm前後で外面と透し孔切り取り面には線刻後に塗布した赤色顔料が良好に残る。

資料118　5次9tr　第38図　胎土第57図

一端に三角形透し孔底辺の一部をとどめる。ちょうど隅部で折損し詳しい形状は不明である。多少彎曲するが透し孔縁辺より4～6mmの間隔で沈線1条がある。その左端は透し孔隅部で終わるが、約1cm離れた延長部分から右上に向けて斜行する同程度の沈線末端がわずかに残る。透し孔を縁取る構図であろう。さらに横走する沈線と14～20mm程の間隔で多少歪みつつもう1条の沈線が破片下端に残る。透し孔隅部対応位置を越えて伸びるが、粗雑で一部は途切れている。穿孔と線刻に先立って外面は15～16条／cmほどのごく細密な縦ハケ調整で整える。内面は縦削り調整で整える。器厚6～7mmで赤色顔料の有無は確認できない。

資料119　3次9tr　第38図　胎土第57図

破片の一端に直線的な透し孔の縁辺が残る。外面仕上げを縦ハケ調整とすれば縁辺の斜交から透し孔は三角形を呈する可能性が高い。ハケ調整は5～6条／cmとやや粗く穿孔に先立つ。内面縦削りで穿孔に先立つ。器厚5～7mmで外面に赤色顔料を良くとどめる。

資料120　3次9tr　第38図　胎土第57図

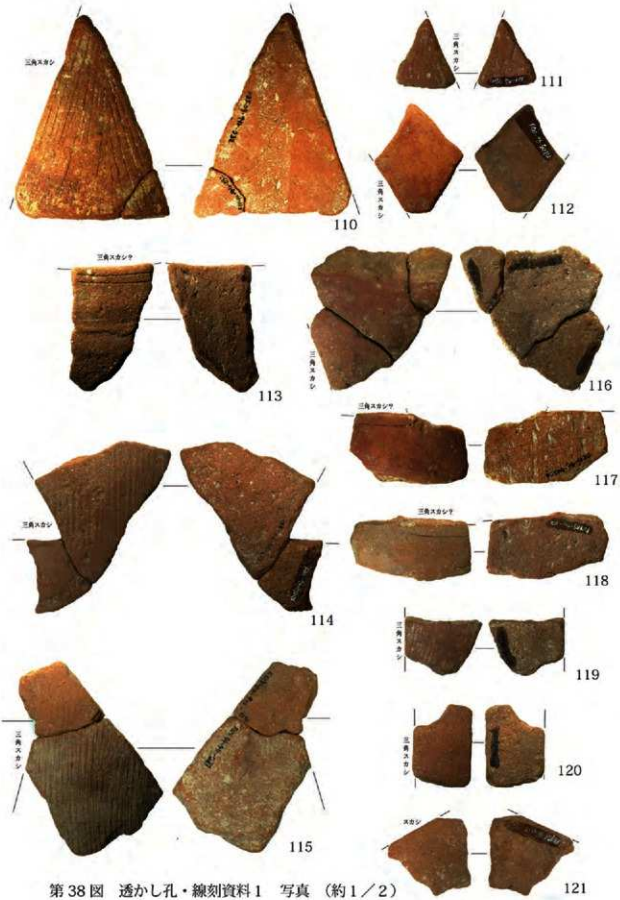
図示した破片左端に直線的な透し孔縁辺をとどめる。器厚は7～9mmを測る。外面には穿孔前に6～7条／cmのハケ調整を施すが以後のナデ調整でかすれる。これを横ナデとすればハケ調整は左上がりの斜位と復元され、それと縁辺が併行する透し孔は三角形と解される。内面は縦削りだが一部及ばない。外面に赤色顔料を良く残す。

資料121　5次9tr　第38図　胎土第58図

図示した破片の上辺と左辺に透し孔縁辺が残る。どちらも直線的ではあるが、位置関係から巴形透し孔の一部と復元するしかない。上辺のそれが尾部、左辺は円孤部の一部であろうか。いずれしても硬化と変容は著しいことになる。器厚は5mm程度でかなり薄い。外面は器表が荒れ詳細は不明だが縦方向のハケ目様の条線が断続的にみえる。内面は横削りである。

資料122　4次9tr　第39図　胎土第58図

体部片。破片左下に併走する右下がりの鋭利な箆描沈線9条が残る。間隔は揃わない。一方右端には左上がりの沈線1条をみる。こちらは単独の沈線文である可能性が高い。外面全体を15条／cmのごく細密な縦ハケ調整で整えた後に線刻を加える。その後に赤色顔料を塗布する。内面全体には縦方向のヘラ削りが残る。器厚は6～8mmとなる。



第38図　透かし孔・線刻資料1　写真（約1／2）

資料 123　4次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

器表が著しく荒れ詳細を把握しにくいが沈線群を複合した構図が見える。図示した破片下端近くに横走する沈線 1 条があり、これと交差する 10 条以上の並行沈線群が施され、破片左端にはこれらと斜交する並行沈線群 4 条が残り、複合鋸歯文風の構図が推測できる。外面には細密な縦ハケ調整を線刻前に加えるが詳細は不明。内面はナデ調整の後に幅の狭い縦削りが疎らに及ぶ。器厚は 7 mm 前後で外面の一部に赤色顔料塗布の痕跡をとどめる。

資料 124　5次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

並行沈線群をとどめる小片。ハケ調整とやや斜交する 4 条の並行沈線群が残る。沈線の間隔は不揃いである。12 条／㎝程度の細密なハケ調整の後に線刻する。内面は縦削りを施す。器厚は 7 mm で外面の一部に赤色顔料が痕跡的に残る。

資料 125　5次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

沈線文の一部を残す小片。器厚は 5 mm 前後と薄い。1.8㎝の間隔で配された 2 条の平行沈線の間を斜めに別の 1 条が貫く。遺存部の構図は「N」字状となる。沈線文は鋭利な工具で浅く刻まれ、11 ～ 12 条／㎝の細密なハケ調整の後に施している。内面はヘラ削りの後に丁寧になでている。赤色顔料塗布は明らかではない。

資料 126　4次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

ほぼ並行する横位の沈線 2 条と斜行する沈線 1 条が残る小片。いずれも細く浅い線刻だが、後者の斜行沈線は一層繊細である。器厚は 5 ～ 6 mm でやや薄い。外面は 10 条／㎝前後の細密なハケ調整を施すがナデ仕上げでかすれている。内面に縦削りを施すが、及ばない部分も多い。外面には塗布した赤色顔料を良く残す。

資料 127　4次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

斜行する鋭利な沈線 1 条をとどめる破片。線幅は 0.5mm 前後だが深く刻まれている。外面に施すハケ調整は 15 ～ 16 条／㎝とごく細密で原体幅も 15mm を超えないとみられる。微妙に向きを変えながら細かく器面を整える。その後に沈線を施し、さらに赤色顔料を塗布する。内面は縦に削るが粗く、これが及ばない部分が残り、また工具の差込深度も一様ではない。このため器厚は 5 ～ 9 mm と一様ではない。

資料 128　4次 9tr　第 39 図　胎土第 58 図

横走する 1 条の細い沈線が見られる。線幅は 1 mm 未満である。15 ～ 16 条／㎝のごく細密な縦ハケ調整より後に沈線を刻む。内面は縦削りだが、疎らで及ばない部分も少なくない。器厚は 4 ～ 5 mm で薄い。外面に赤色顔料の痕跡をみる。

資料 129　3次 9tr　第 39 図　胎土第 59 図

ハケ調整に直交して横走する沈線 1 条をとどめる小片。器厚は 4 mm 前後と薄い。外面に 14 ～ 15 条／㎝の細密な縦ハケ調整を施した後に幅 1 mm 前後の沈線を加える。内面は縦削りで外面に赤色顔料を良く残す。一応埴輪編としたが、器厚の面に留意すれば小形器種の可能性も残る。

資料 130　9次 16tr　第 39 図　胎土第 59 図

透し孔縁辺の一部と付帯する沈線文を残す破片。透し孔縁辺はそのごく一部が破片左辺と上辺左端付近に残るだけなので、形状の復元はやや難しい。左辺の残部はくさび形に刳り込んだ先端部とみられ、上辺のそれはわずかに弧状を呈する。両者の位置関係から一応巴形透し孔の一部と推測しておく。その場合左辺の残部を尾部端とみる。沈線はやや複雑な様相を示す。一つは尾部先端から

派生し円孔部縁辺に向うほぼ１／４周分の弧線とその中部の左寄りに粗く加えられた径５mm 内外の圏線からなる。もう一方は尾部先端から弧状に垂下する２条の平行線とそれに接する直線的な２ないし３条の横向き平行線からなる。全体として線刻は粗雑で線幅にも統一性がない。船岡山１号墳埴輪の線刻で類似した構図は見いだせない。器厚は 10 ～ 11mm とやや厚手で内外面ともに４条／㎝とごく目の粗い縦ハケ調整を施している。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料 131　５次 9tr　第 39 図　胎土第 59 図

図示した破片上辺に鍵手形を呈する透し孔縁辺、左辺には円弧を呈する透し孔縁辺が残る。巴形透し孔の一部である。尾部の直線化に見る様に構図の硬化と変容が著しい。縁取り的線刻は見えない。外面は穿孔前に８条／㎝の細かい縦ハケ調整を施す。内面はナデ仕上げである。器厚は５～９mm と変化が大きい。外面のごく一部にかすかな赤色顔料の塗布痕跡が残る。

資料 132　８次 16tr　第 39 図　胎土第 59 図

破片の一端に巴形透し孔の尾部先端と円孔部縁辺をとどめる。透し孔の縦径は少なくとも７㎝大となるだろう。器厚７～８mm を測る。外面は５～６条／㎝程度の縦ハケ調整の後に全体をナデ、ハケ目をほとんど消している。ハケ調整は穿孔前だが、ナデ仕上げのタイミングは定かではない。内面はおそらく穿孔前に縦削りを施す。外面のごく一部に赤色顔料塗布の痕跡を認める。

資料 133　５次 9tr　第 39 図　胎土第 59 図

巴形透し孔の円孔～尾部の一端をとどめる破片。尾部は直線的に伸び、円孔部に対して大きい。構図の硬化と変容がみてとれる。外面に６～７条／㎝のハケ調整を施した後に先行し、さらにナデを加える。内面もナデ仕上げ。外面と透し孔切り取り面の一部に明瞭に赤色顔料をとどめる。器厚は６～８mm を測る。

資料 134　５次 9tr　第 39 図　胎土第 59 図

巴形透し孔の一端をとどめる体部片。円孔部の一部と尾部上辺を残す。両者を分かつ鈎部の先端は丸く形態的な崩れが看取される。円孔部径は 3.5㎝内外で長径 5㎝前後と推定できる。外面は４条／㎝の粗い縦ハケ調整で内面には縦削りを施す。器厚は５～６mm とやや薄い。

資料 135　４次 9tr　第 39 図　胎土第 59 図

一端に透し孔縁辺が残る破片。透し孔の形状は三角形ないし円形と見なしがたく、先端が尖らずその点で形が大きく崩れているが、巴形透し孔尾部と推測する。縁取り的な線刻はない。器厚は７～８mm を測る。外面は４条／㎝のごく目の粗いハケ調整を穿孔前に施す。内面は斜方向に削る。

資料 136　３次 9tr　第 40 図　胎土第 59 図

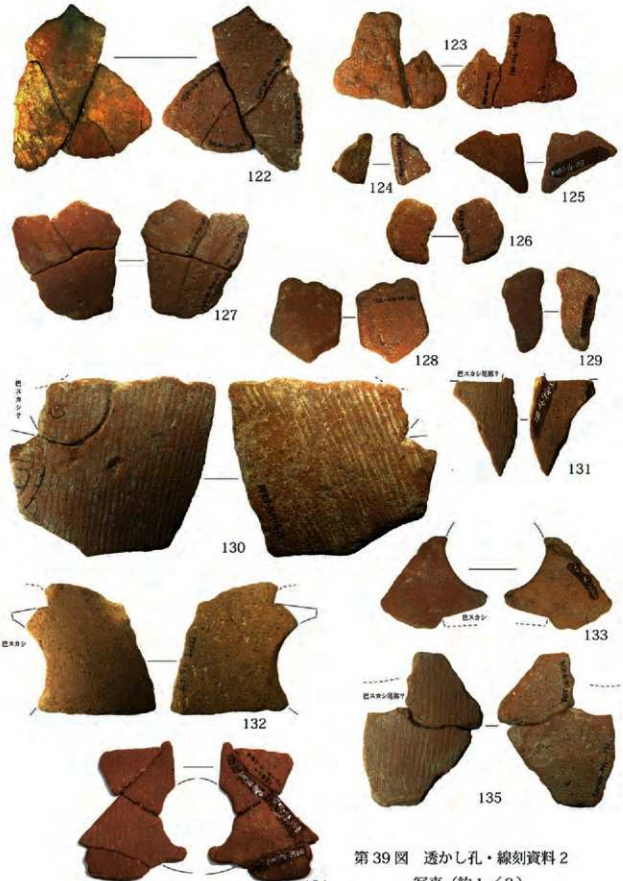
図示した破片の右上端に緩い弧状の透し孔縁辺をとどめる。弧線の緩さから円孔部縁辺とは考えにくい。むしろ巴形透し孔尾部の可能性がある。縁辺から５mm 隔てて併走する沈線１条がある。線幅２mm 弱とやや太い。外面には穿孔／線刻前に４条／㎝程度のごく粗いハケ調整を施す。内面は縦削り。器厚は６～７mm を測る。赤色顔料の塗布は確認できない。

資料 137　５次 9tr　第 40 図　胎土第 60 図

一端に円弧をなす透し孔縁辺をとどめる破片。縁辺円弧はかなり小さく、形骸化と変容が進んだ巴形透し孔尾部先端の可能性が高い。外面には穿孔前に６～７条／㎝の縦ハケ調整を施す。内面はナデ仕上げだが、部分的に指押さえによる小さな凹面をみる。器厚は７～９mm を測る。

資料 138　４次 9tr　第 40 図　胎土第 60 図

一端に円弧をなす透し孔縁辺を残す。破片の彎曲形状から推測して肩部片の可能性が高い。器厚



第39図　透かし孔・線刻資料2
写真（約1／2）

は7～9mmで上側がやや厚い。この部分は内面でやや盛り上がり、粘土帯接合部とみられる。外面は9条／㎝の縦ハケ調整の後横ナデで仕上げる。穿孔は横ナデ仕上げ前らしい。内面も穿孔後に横ナデで仕上げる。外面の全体と透し孔切り取り面の一部に良好に赤色顔料をみる。

資料139　3次9tr　第40図　胎土第60図

図示した破片の左端に円弧をなす透し孔の縁辺をとどめる。小片ながら器厚は5～7mmと一様ではない。外面はごく目の細かい縦ハケ調整のようだが器面が荒れ詳細は不明。内面は破片下端に横削りの一部が見えるが、以上は左上がり斜位の削りを加える。透し孔切り取り面の検察によれば穿孔が削り調整に先立つ可能性がある。赤色顔料塗布の痕跡は見えない。

資料140　5次9tr　第40図　胎土第60図

破片の一端に円弧をなす透し孔縁辺をとどめる。器厚7mmでわずかに内彎傾向が見える。外面は穿孔前に3～4条／㎝とごく粗い縦ハケ調整を施す。またわずか1条だが破片中央にハケ調整に先行する幅5mmの浅い溝状の凹みが残る。叩き目の可能性がある。内面は穿孔前に横削りを加えている。赤色顔料塗布の痕跡は観察できない。

資料141　5次9tr　第40図　胎土第60図

一端に円弧をなす透し孔縁辺を残す。器厚は7～10mmで透し孔周囲がやや厚い。外面は5条／㎝のやや目の粗いハケ調整が部分的に残る。事後にナデを加えているかもしれない。ハケ調整に先行して叩き調整を施した可能性がある。叩き目様の短い平行線2条が残る。縁辺の盛り上がりから穿孔はこれら以後になる。内面ナデ仕上げ。外面と透し孔切り取り面の一部に明瞭な赤色顔料の付着をみる。

資料142　9次19tr　第40図　胎土第60図

破片の一端に円弧をなす透し孔縁辺をとどめる。器厚7～8mmを測る。外面は穿孔前に6条／㎝程度の縦ハケ調整を施す。内面は穿孔前に横削りを加え、後に部分的に指押さえが加わる。赤色顔料塗布の痕跡は観察できない。

資料143　5次9tr　第40図　胎土第60図

円弧をなす透し孔の一端をとどめる破片。図示した破片上端に残る透し孔円孔部の径は約6㎝前後とみられる。器体はやや反り気味に立上り器厚は概ね7mm前後となる。外面には穿孔前に施した4条／㎝と目の粗い縦ハケが全体に残る。内面は縦削りとなる。外面の一部に赤色顔料が残る。

資料144　5次9tr　第40図　胎土第60図

一端に緩く円弧をなす透し孔の一部が残る小片。器厚5mmと薄い。外面に8～9条／㎝の細かいハケ調整を施した後に穿孔する。内面は穿孔前に斜位でヘラ削りする。赤色顔料の有無は不明。

資料145　5次9tr　第40図　胎土第61図

破片の一端に緩く円弧をなす透し孔の一部が残る。器厚は4～5mmとごく薄い。外面の一部に6条／㎝の縦ハケ調整をとどめるが、横ナデにより不鮮明になっている。内面は横削り。穿孔は外面ハケ調整後で横ナデ以前、内面ヘラ削り後とみられる。横ナデの充実から突帯近接部位の小片と推測される。外面と透し孔縁辺に赤色顔料が残る

資料146　5次9tr　第40図　胎土第61図

一端に円弧をなす透し孔縁辺を残す小片で、器厚は4mm前後とごく薄い。透し孔は斜めに穿たれている。外面は7～8条／㎝の細かなハケ調整を穿孔前に施す。内面はこれと直交方向の削りである。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料 147　3次 9tr　第 40 図　胎土第 61 図

一端に円弧をなす透し孔縁辺をとどめる小片。器厚 6mm で、外面には穿孔前に 6 条／㎝程度の縦ハケ調整を施す。内面はナデ仕上げ。赤色顔料塗布の有無は観察できない。

資料 148　5次 9tr　第 40 図　胎土第 61 図

破片の一端に円弧をなす透し孔の一部が残る。器厚 5 ～ 6 mm を測る。外面には 6 条／㎝ほどの細かい縦ハケをみる。穿孔はこの後である。内面は器表が荒れ断定しがたいが削り調整らしい。外面と透し孔縁辺に赤色顔料が残る。

資料 149　5次 9tr　第 40 図　胎土第 61 図

破片の図示した上端に円弧をなす透し孔の一部が残る。器厚は 8 mm 前後を測る。外面は 4 条／㎝と目の粗い縦ハケ調整を施し、穿孔はその後となる。また下端附近に横ナデの痕跡が認められる。これを突帯貼付痕跡とすれば透し孔位置は突帯から 5㎝以上離れていることになる。内面は斜位のヘラ削り。赤色顔料塗布の痕跡は確認できない。

資料 150　8次 16tr　第 41 図　胎土第 61 図

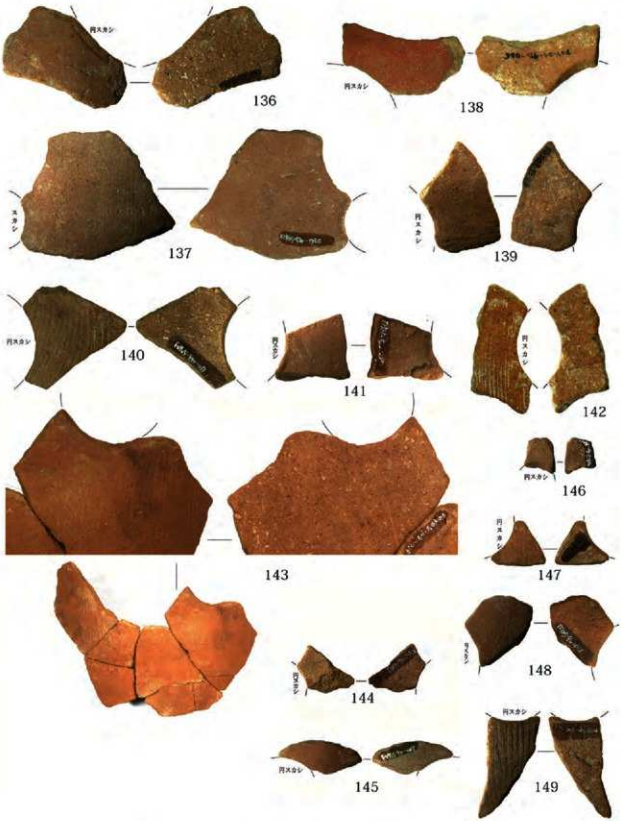
体部片。破片上辺から約 3.5㎝までは赤色顔料の塗布が観察される。この部分から顔料が垂れた痕跡を 5 条確認できるので塗布域の下端であろう。顔料の塗り分けが明瞭に確認できる資料である。破片下部で最厚 14mm、上辺附近では器厚 7 ～ 8 mm を測る。内面に約 3㎝間隔で 4 段のたわみが見てとれる。成形時の粘土帯を反映する可能性がある。破片下半は 5 条／㎝程度と目の粗いハケ調整を施し、上半では 15 条／㎝前後の細密なハケ調整を重ねている。内面は荒れが著しいが、削り調整は施さないようだ。代わって上記のたわみに対応する連続的な指押さえが観察できる。

資料 151　5次 9tr　第 41 図　胎土第 61 図

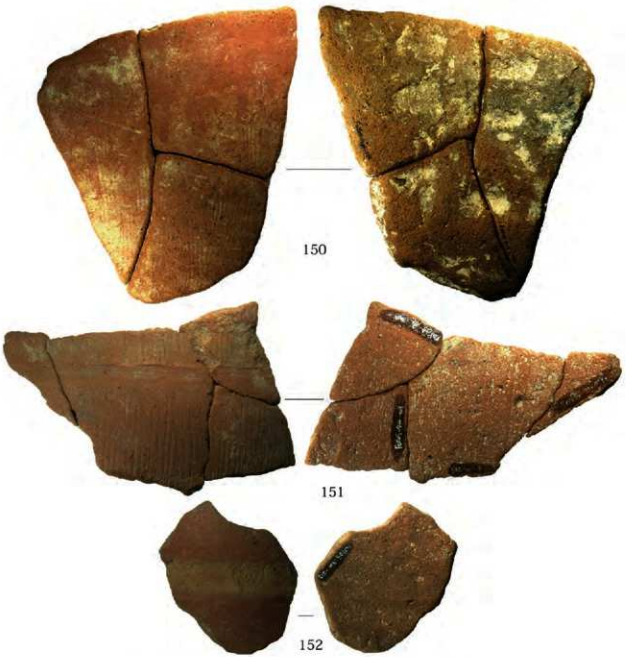
突帯剥落部を良好に残す体部片。幅 2㎝内外で突帯剥落部が帯状に残る。剥落面には貼付前に加えた縦ハケ調整を明瞭にとどめる。ただし貼付前に指で押さえ浅い凹みが間を空けて並ぶ。5 条／㎝の粗いハケ目である。器体のハケ目と同じだがちょうど突帯位置附近でハケ方向がやや変化している。剥落部上下に貼付時の横ナデが残る。下側ではその幅は 1.6㎝を測る。内面は縦削り。器厚 6 ～ 7 mm で内外面ともに赤色顔料の有無は確認できない。

資料 152　5次 9tr　第 41 図　胎土第 61 図

一端に円弧をなす透し孔を残す破片。器厚は 7 mm 前後を測る。透し孔縁辺下端から約 2㎝を隔て明瞭な突帯剥落部がある。外面はやや右下がりで 7 ～ 8 条／㎝のハケ調整が明瞭に残るが、剥落部はナデ、指押さえ痕と局所的に横走するハケ目状の条線が見出され剥落部上下のハケ調整が及んだ痕跡が見いだせない。剥落部の上下に狭く突帯貼付時の横ナデが及び、この部分でハケ調整を潰しているので、突帯貼付が器体のハケ調整後であること疑いない。また剥落部の上下でハケ目の方向が微妙に変わっていることを合わせれば、あらかじめ突帯貼付位置のハケ調整を帯状に省いた可能性がある。穿孔はハケ調整後である。内面は横位の削りを重ねる。外面に明瞭に赤色顔料が残る。



第40図　透かし孔・線刻資料2　写真（約1／2）



第41図　透かし孔・線刻資料4　写真（約1／2）

第42図　船岡山2号墳出土埴輪（153，154，1／3　155，約1／2）

第1節　埴輪類

資料153　3次6tr　第42図　胎土第62図

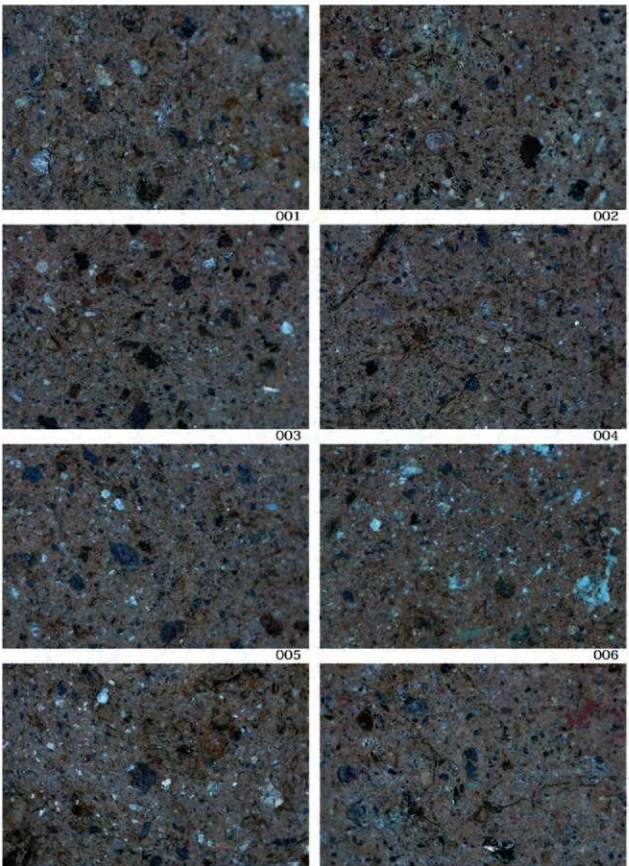
口縁立ち上がり基部片。破片下面は顎部との接合面で先端を小さく摘み上げた顎部の形状と立上り基部を上面に載せる接合方法をよく示している。立上り基部の器厚15mmと厚く、外反して伸びる。内外面ともに横ナデ仕上げで、赤色顔料塗布の痕跡は残らない。

資料154　3次6tr　第42図　胎土第62図

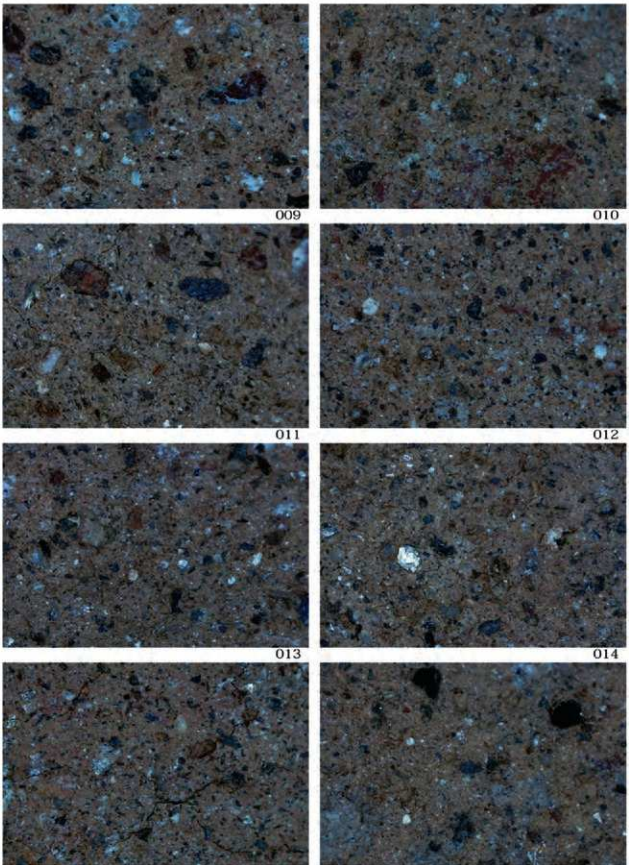
突帯部片。復元径28.7㎝で、器体部は厚6～7mmを測る。突帯は高15mmと強く突出するが裾部はなだらかに開く。突帯頂部は丸く収める。下側は幅広く横ナデする割には器体との接合部に空隙が目立つ。器体の突帯下方はあらかじめ7mm／㎝程度の縦ハケ調整を施し突帯を貼付する。一方、器面の状態が悪く断定はできないが、上方では同様のハケ調整を貼付後に施した可能性がある。内面は縦削り。赤色顔料塗布は確認できない。

資料155　3次6tr　第42図　胎土第62図

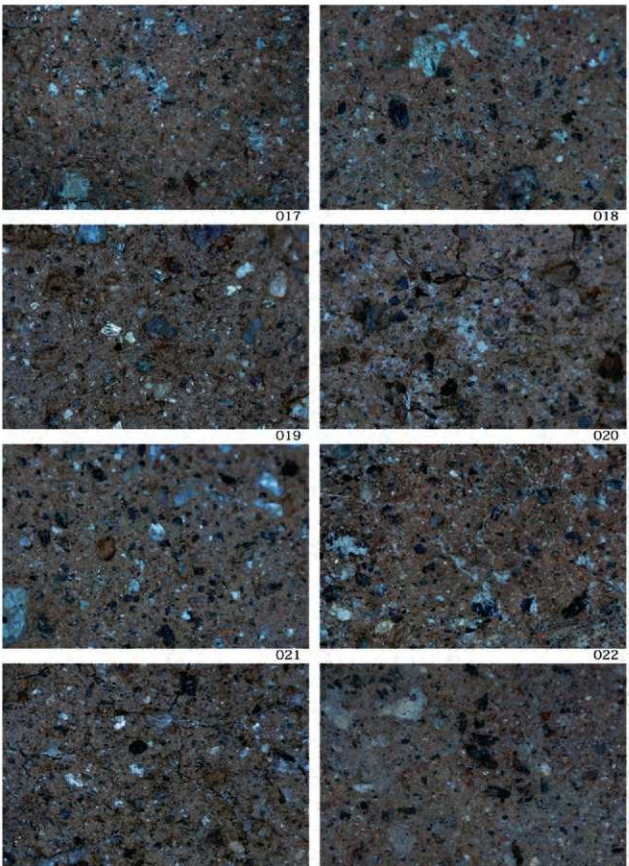
突帯剥落部片。剥落部幅は少なくとも25mmと広い。剥離面に10～11条／㎝の縦ハケ調整が残り、外方に連続する。内面は左傾した縦削りで下端に削り後に加えた横ハケ調整の一端が残る。器厚は7～9mmで赤色顔料の痕跡は確認できない。



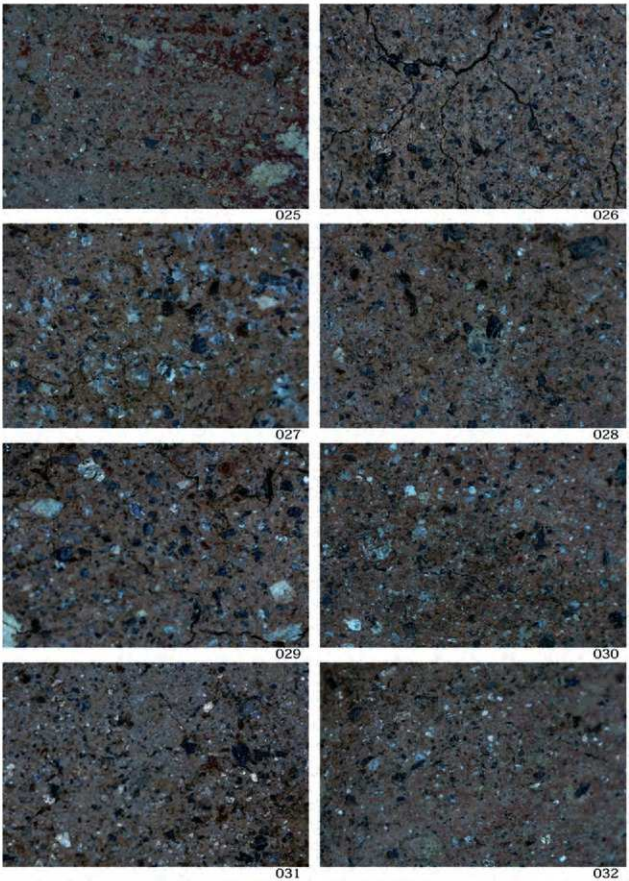
第 43 図　胎土写真 01（資料 001～008）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



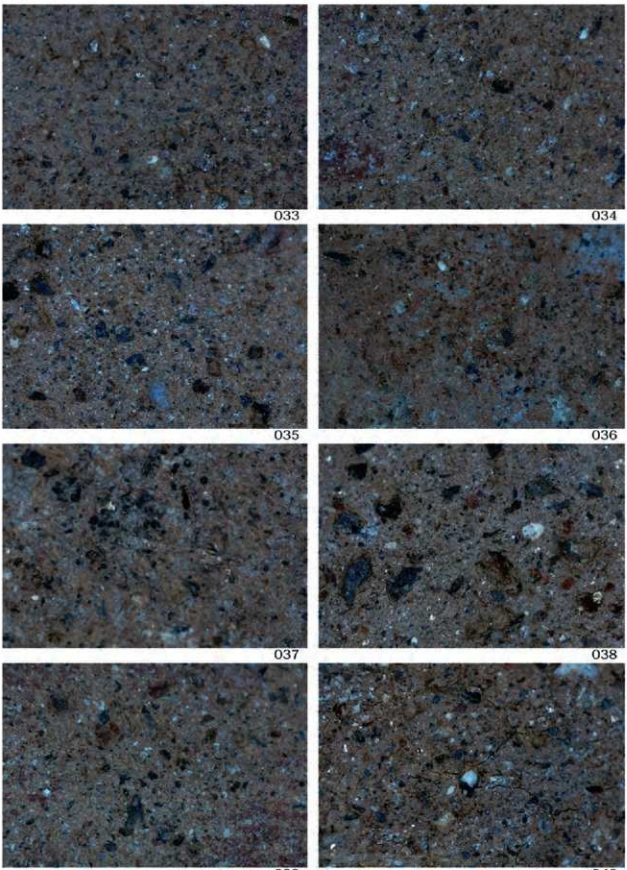
第 44 図　胎土写真 02（資料 009～016）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



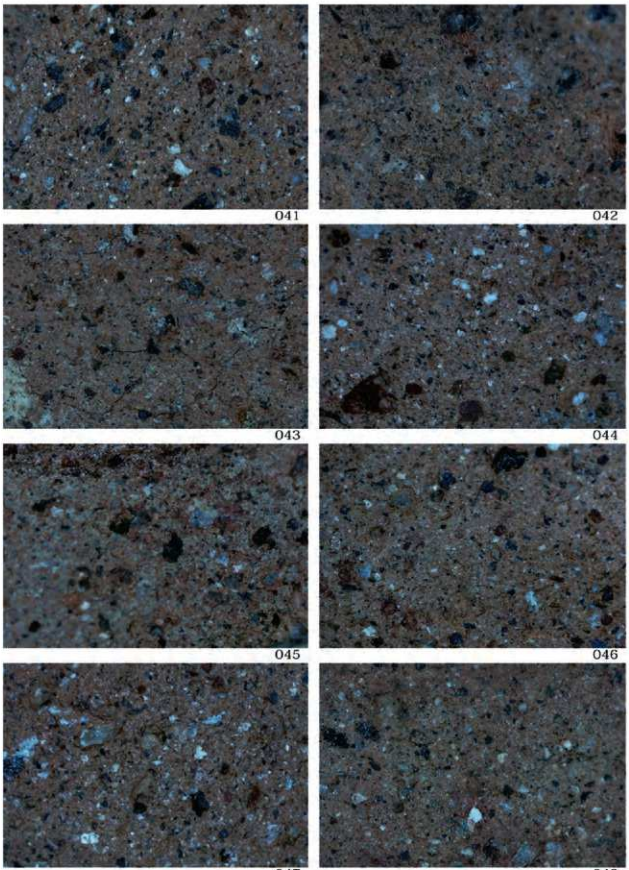
第 45 図　胎土写真 03（資料 017～024）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



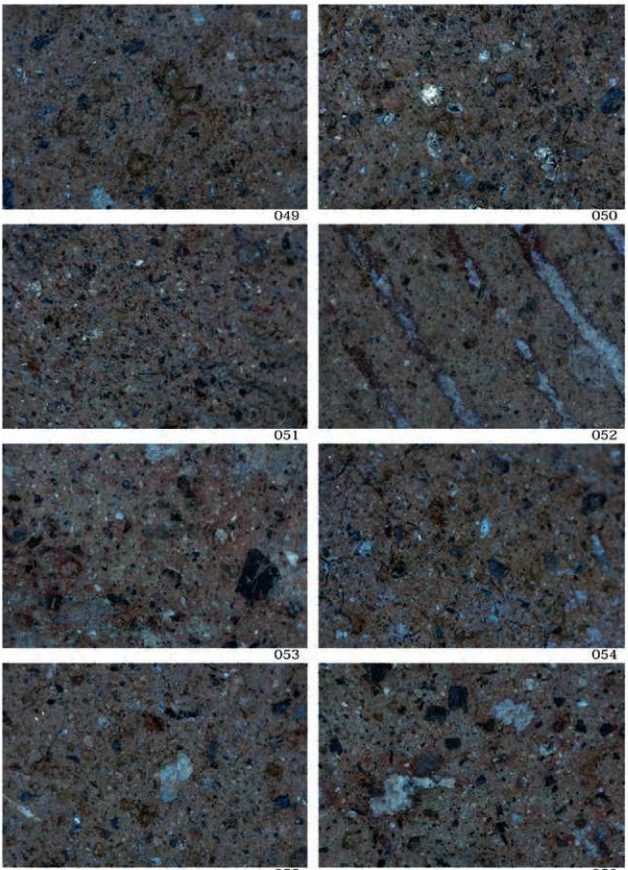
第 46 図　胎土写真 04（資料 025～032）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



第 47 図　胎土写真 05（資料 033～040）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

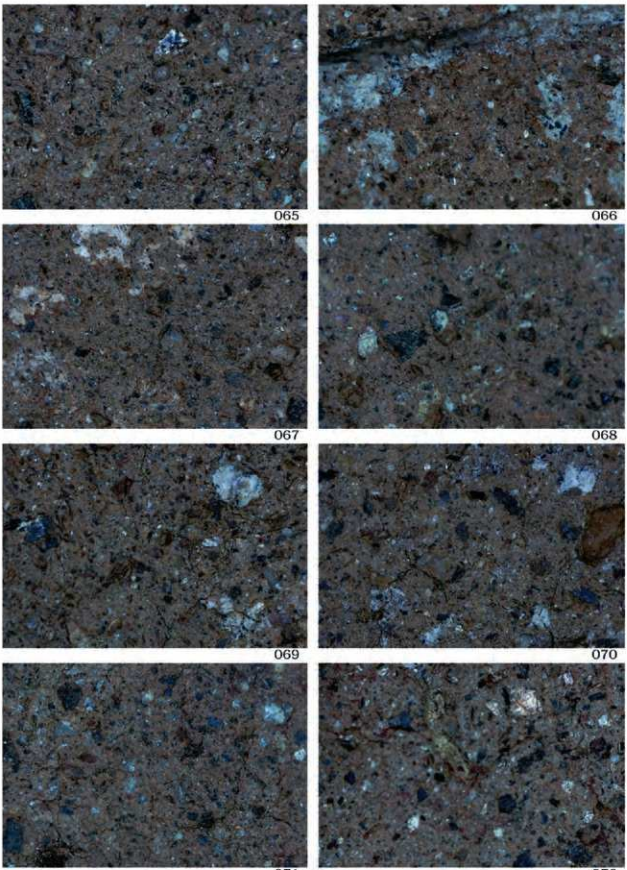


第 48 図　胎土写真 06（資料 041～048）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

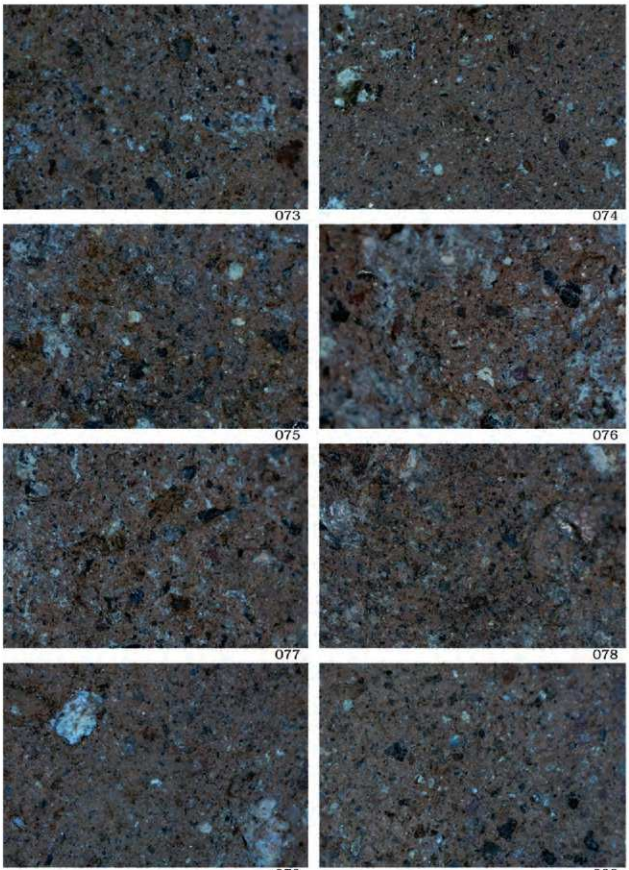


第 49 図　胎土写真 07（資料 049～056）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

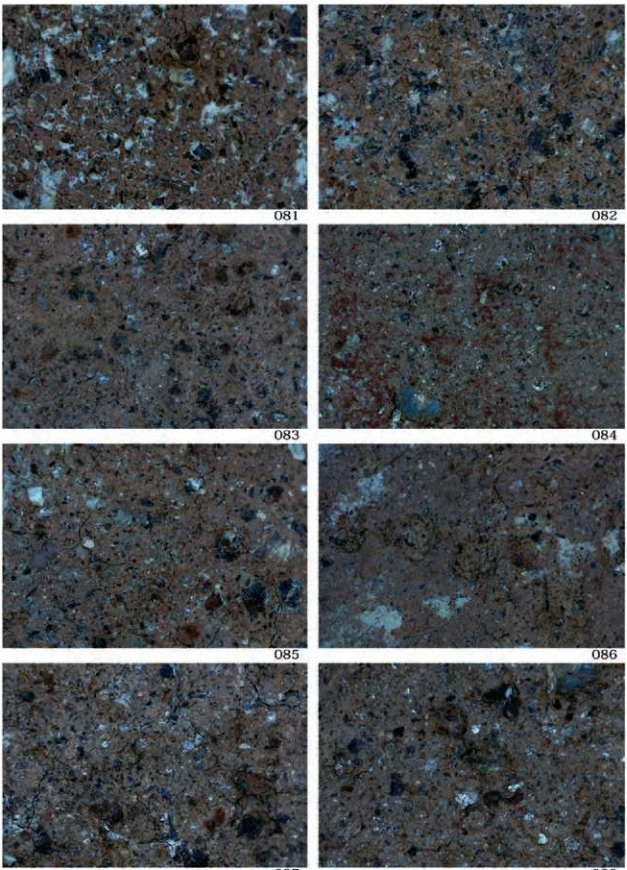
第 50 図　胎土写真 08（資料 057～064）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



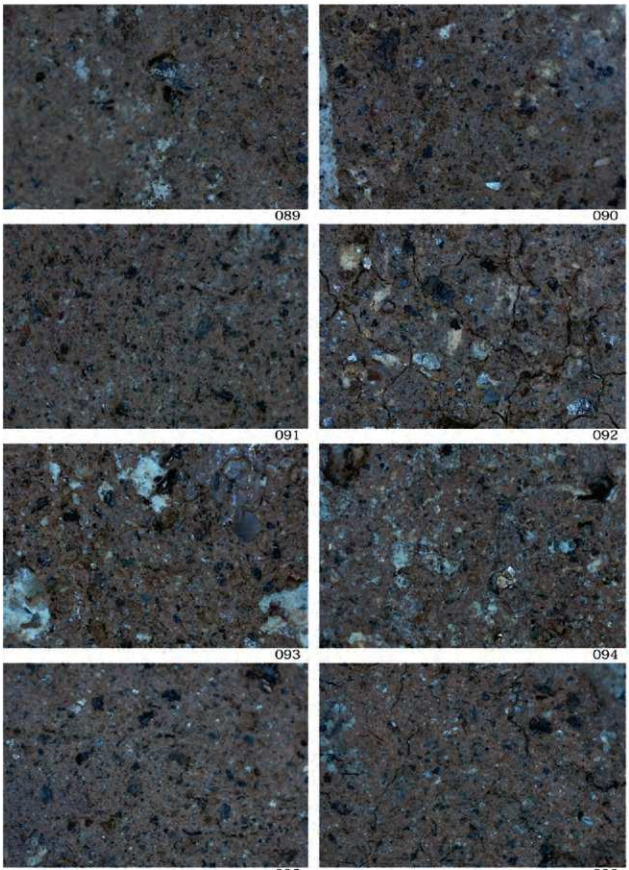
第 51 図　胎土写真 09（資料 065～072）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



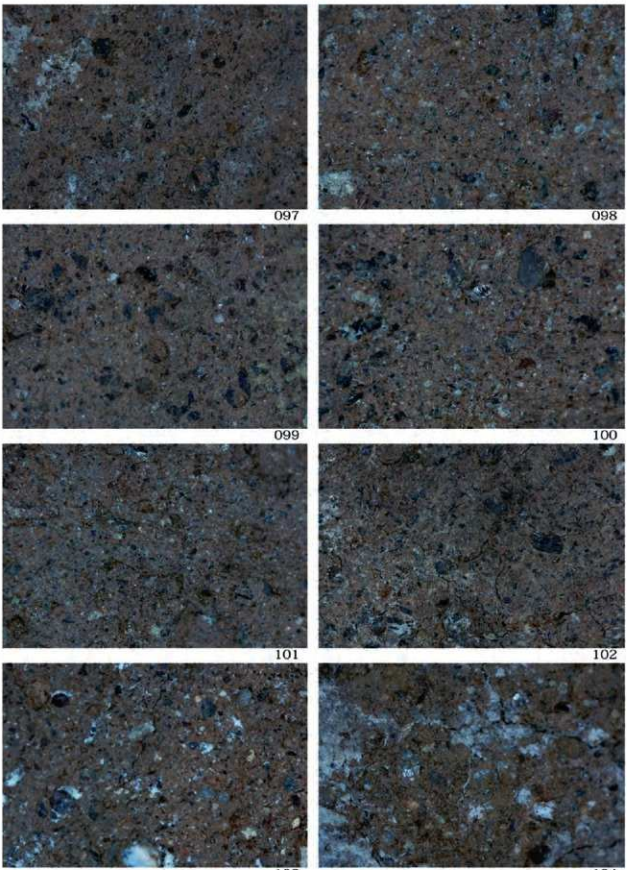
第 52 図　胎土写真 10（資料 073～080）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



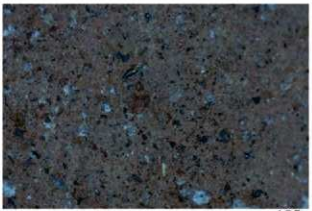
第 53 図　胎土写真 11（資料 081～088）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

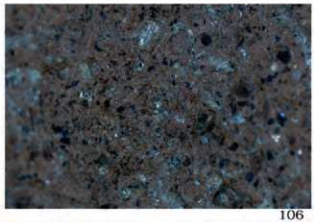


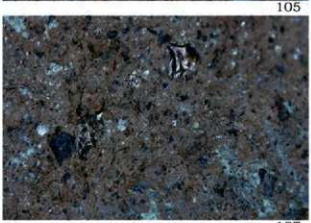
第 54 図　胎土写真 12（資料 089～096）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

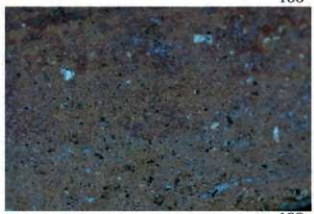


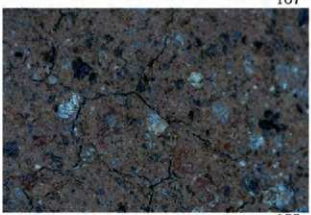
第 55 図　胎土写真 13（資料 097～104）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

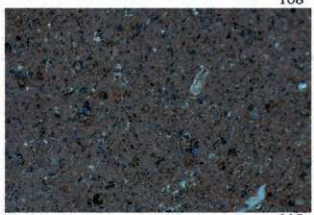

105


106

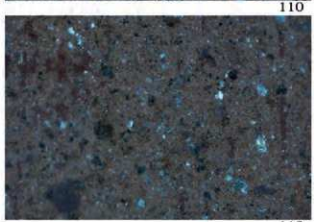

107


108

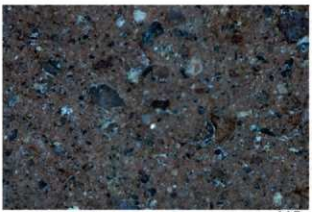

109

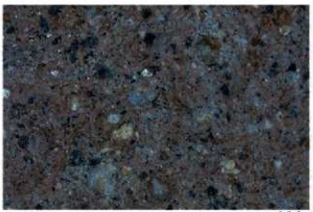

110

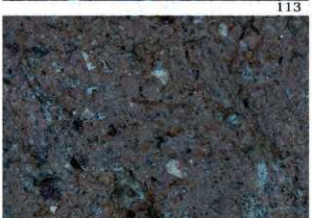
111

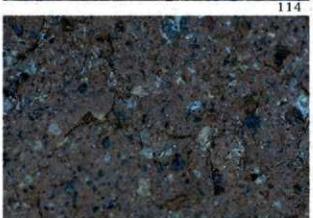

112

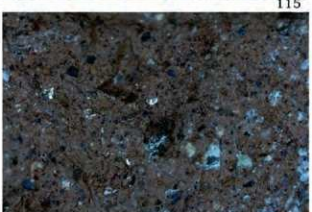
第 56 図　胎土写真 14（資料 105～112）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

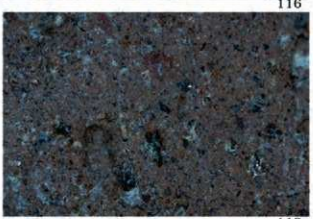

113


114


115


116

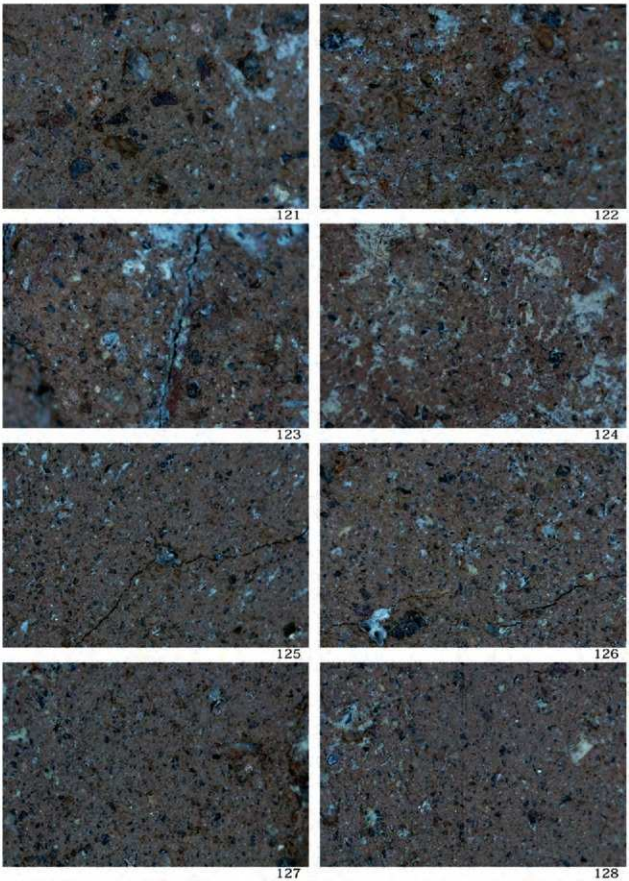

117


118

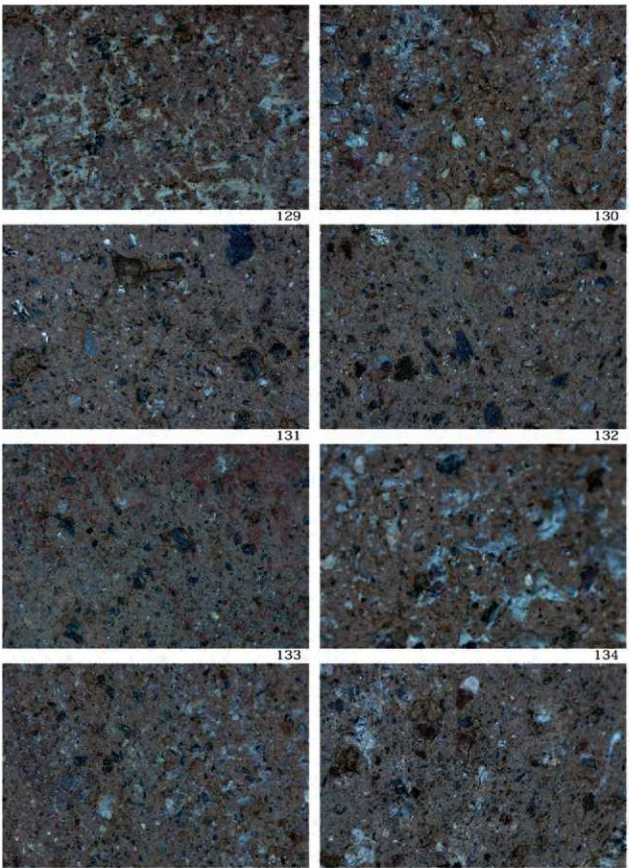
119

120

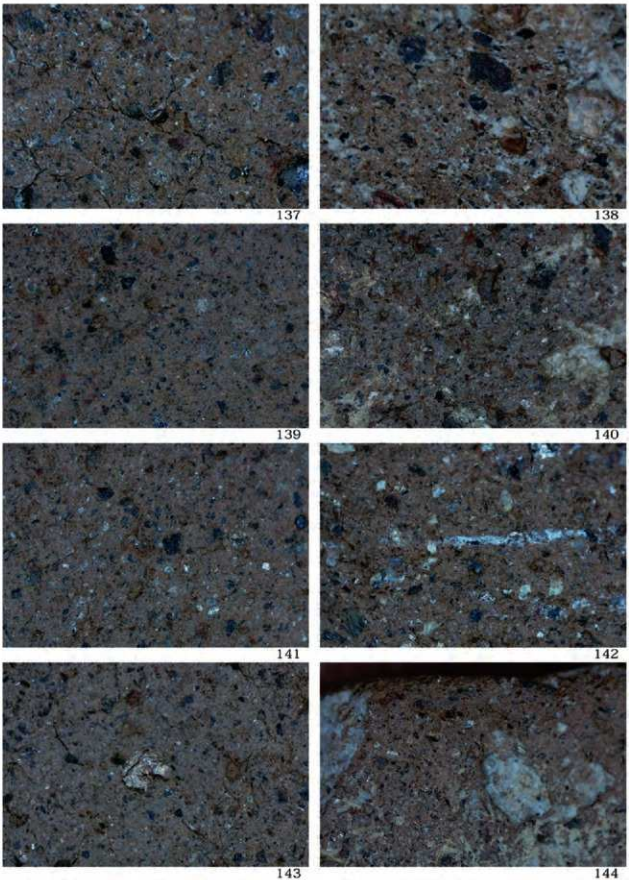
第 57 図　胎土写真 15（資料 113～120）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



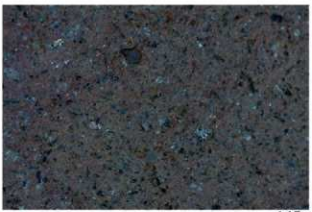
第 58 図　胎土写真 16（資料 121～128）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

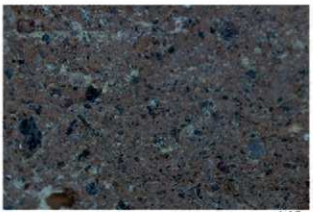


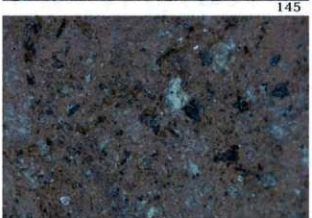
第 59 図　胎土写真 17（資料 129～136）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

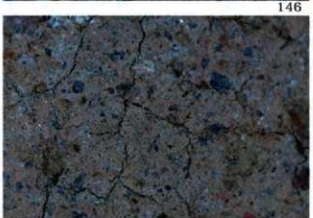


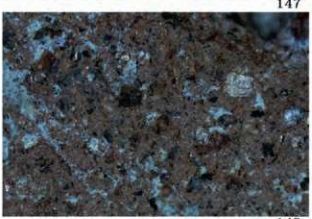
第 60 図　胎土写真 18（資料 137～144）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

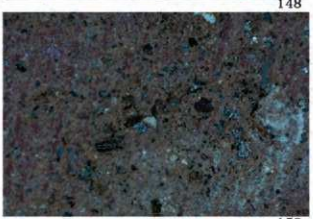

145


146

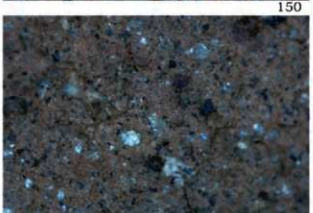

147


148

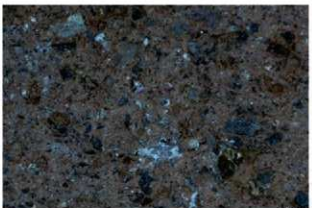

149


150

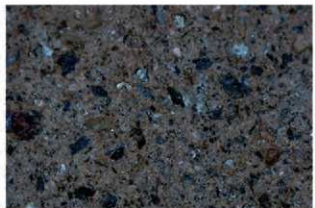
151


152

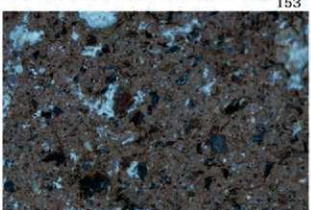
第 61 図　胎土写真 19（資料 145～152）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍



153



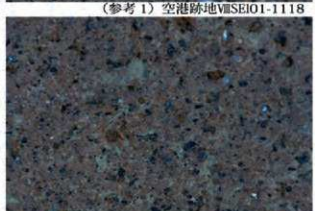
154



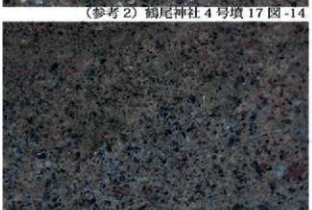
155

（参考 1）空港跡地Ⅷ SE101-1118

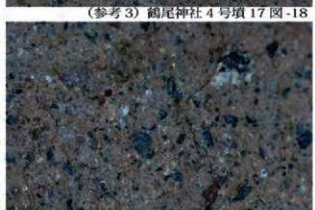
（参考 2）鶴尾神社 4 号墳 17 図 -14



（参考 3）鶴尾神社 4 号墳 17 図 -18



（参考 4）稲荷山姫塚古墳 5-26 図 -58



（参考 5）稲荷山姫塚古墳 5-27 図 -69

第 62 図　胎土写真 20（資料 153～156 及び参考資料）　＊約 65 倍撮影・掲載倍率約 10 倍

補図	報告番号	掘上写真	調査次	出土位置	遺構・層位	遺存	種別	用材樹種	口径	口縁高	各部径	肩部・突帯間距離（高）	特記事項
4-6	001	42図	09	16ｒ くびれ北	口縁部～第2・3突帯間	三角			35.0	7.0	肩22.8,①28.4,②43.2	肩12.3,中①15.6,中②16.0＋	突帯2段,パケ調整突帯貼付後,残存部30cm,孔:肩①②孔4カ
7-8	002	42図	09	9ｒ くびれ南	口縁部～第2・3突帯間	三角	○	○	32.3	6.9	肩22.4,①28.2,②28	肩7.0,中①16.0	突帯2段,調整:孔縁辺9＋肩横走後,残存部31.5cm,孔:肩3カ①0カ②0カ
9	003	42図	09	15ｒ くびれ北	口縁部～第1突帯下	三角			27.8	7.3	肩17.7,①25.6	肩8.2	孔:肩4カ①
10	004	42図	08	9ｒ くびれ南	口縁部				28				
10	005	42図	04	9ｒ くびれ南	口縁部				26.2				
10	006	42図	04	9ｒ くびれ南	口縁部～肩上端				36.0	6.3	肩23.2		
10	007	42図	09	16ｒ くびれ北	口縁部～第1・2突帯間	三角			35.0	8.1	肩27.4,①36.2	肩7.2	孔:肩0①?
11	008	42図	05	9ｒ くびれ南	口縁部				30.9				
11	009	44図	05	9ｒ くびれ南	口縁部				29.0	8.9	肩19.8		
11	010	44図	08	16ｒ くびれ北	口縁部				26.8	9.0	肩19.6		
11	011	44図	04	9ｒ くびれ南	口縁部～肩上端				28.2	5.9	肩19.6,①28.0	肩4.5	
11	012	44図	09	16ｒ くびれ北	口縁部～肩上端				44.0	10.9	肩30.0		
12	013	44図	09	16ｒ くびれ北	口縁立ち上り部				35.4				
12	014	44図	08	16ｒ くびれ北	口縁立ち上り部				33.8				
12	015	44図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部				27.0				
12	016	44図	05	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
12	017	42図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
12	018	42図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
12	019	45図	08	15ｒ くびれ北	口縁整形								
13	020	44図	05	9ｒ くびれ南	口縁部								
13	021	44図	03	12ｒ 前方南	口縁部～肩上端					6.0			
13	022	44図	09	17ｒ 後円北	口縁部								
13	023	45図	05	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	024	45図	08	16ｒ くびれ北	口縁立ち上り部								
13	025	46図	08	15ｒ くびれ北	口縁立ち上り部								
13	026	46図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	027	46図	05	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	028	46図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	029	46図	03	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	030	46図	04	9ｒ くびれ南	口縁立ち上り部								
13	031	46図	08	16ｒ くびれ北	口縁整形								
13	032	46図	03	9ｒ くびれ南	口縁整形								

第1表　掲載資料観察表1（資料001～032）

掲図	報告番号	船士写真	観察表	出土位置	部位・機能	透孔	穂果	回目突帯	口径	口縁点	各部径	肩部・突帯間距離（高）	特記事項
15	033	47図	08	16tr くびれ北	口縁整形								
15	034	47図	08	16tr くびれ北	口縁整形								
15	035	47図	08	16tr くびれ北	口縁立ち上り下部								
15	036	47図	08	17tr 後円北	口縁立ち上り下部								
15	037	47図	04	9tr くびれ南	口縁立ち上り下部								
15	038	47図	05	9tr くびれ南	口縁立ち上り下部								
15	039	47図	09	16tr くびれ北	口縁部								
15	040	47図	?	? ?	口縁部								
16	041	48図	05	12tr 前方後	口縁端部								
16	042	48図	05	11tr 後円後	口縁端部								
16	043	48図	05	12tr 前方後	口縁端部								
16	044	48図	06	11tr 前方後	口縁端部								
16	045	48図	05	12tr 前方後	口縁端部								
16	046	48図	05	12tr 前方後	口縁端面部								
16	047	48図	06	4tr 前方後	前部								
16	048	48図	07	16tr くびれ北	前部～胴突帯						前25.0, ①26.2	前4.3	前部頂孔あり 補修か円孔外側盛縁
16+19	055	49図	09	16tr くびれ北	折り返し部～第2突帯下	三角	○	○			前10.0, ①32.2, ②37.4	前6.4, 中①18.6	突帯三段, 補修か孔間由明文, 孔1群か(1)6方②6方十
17	056	49図	08+09	16tr くびれ北	前部	巴部					前23.9	前19+	特徴な大型品, 器形保なる平田方線の整形, 孔1群4方
18+19	057	50図	09	16tr くびれ北	前部～底部下端	三角					前19.0, ①36.2, ②38.8, 底14.4	前11.0, 中①28.0, 底32.9	突帯三段, 同生箱の整形, 推存高69.4cm, 孔1群4方(1)8方
20+21	058	50図	09	16tr くびれ北	胴部下端～底部下端	三角	▽	▽			①38.9, ②38.0, ③36.6, 底15.2	中①18.2, 中②26.0, 底26.6	突帯三段, 器形・孔群ほぼ1+2の形式, 推存高66cm, 孔1群5方中①6方②6方
22-23	059	50図	04	9tr くびれ南	前部～底部下端	巴部					①32.0, ②31.0, 底17.4	中①17.2底換算	突帯二段, 突帯巴形, 同生箱の整形, 推存高66cm, 孔1群4方①4方
24-25	060	50図	09	16tr くびれ北	第2突帯～第3突帯?	三角	○	○			上36.3, 下31.8	中18.5	補修孔間由明文, 同生箱の整形, 孔1群4方①6方②6方
26-27	061	50図	08	16tr くびれ北	前部～胴突帯下	三角	○				①34.3, ②35.5	中20.2	突帯二段か, 器形一部底縁取り, 孔1群3方①8方
28	062	50図	09	16tr くびれ北	体中位透孔・頸部・突帯	巴部	○				34.4		極端に直線文的
28	063	50図	09	16tr くびれ北	体中位透孔・突帯	巴部					38.5		透孔周辺肥大
28	064	50図	02	3tr くびれ南	体中位透孔・突帯	巴部					31.8		孔1-4方以下か

第２表　掲載資料観察表２（資料 033～064）

掲載	掲載番号	前土写真	調査次	出土位置	遺位・構築	遺孔	個別	個口発掘	口径	口縁面	各部径	前部・突帯間距離（高）	特記事項
29	065	51図	05	9tr くびれ南	体中位遺孔・銅鏡・突帯	巴形	○				31.0		銅鏡・孔外縁鋳状銅鏡＋α、孔×4方
29	066	51図	06	17tr 後円北	体中位突帯	円孔	○						
29	067	51図	09	16tr くびれ北	体中位遺孔	巴形							
29	068	51図	03	9tr くびれ南	体中位遺孔	巴形							遺孔周縁から線刻
30	069	51図	03	9tr くびれ南	体中位遺孔・突帯	円孔					30.0		孔×4方以下か
30	070	51図	03	9tr くびれ南	体中位遺孔・銅鏡・突帯	円孔?	○				29.5		
30	071	51図	08	16tr くびれ北	体中位突帯						29.8		
30	072	51図	09	16tr くびれ北	体中位突帯						31.6		巴を線状態
31	073	52図	05	9tr くびれ南	体中位遺孔・突帯	巴形					28.8		遺孔周縁突起・鋳掛痕
31	074	52図	03	9tr くびれ南	体中位突帯			○					
31	075	52図	03	9tr くびれ南	体中位突帯			○					
31	076	52図	08	17tr 後円北	体中位突帯			○					
31	077	52図	08	17tr 後円北	体中位突帯			○					
31	078	52図	03	9tr くびれ南	体中位突帯	三角?							
31	079	52図	09	17tr 後円北	体中位突帯	三角		○			33.9		
31	080	52図	03	9tr くびれ南	体中位突帯	三角		○			30.9		
32	081	53図	05	9tr くびれ南	体中位・突帯2条						上31.2、下27.6	中14.3	
32	082	53図	05	9tr くびれ南	体中位～底部段						32.7	中18～20	
32	083	53図	09	17tr 後円北	体中位突帯								
32	084	53図	09	8tr 後円南	体中位突帯								
32	085	53図	08	17tr 後円北	体中位突帯								
33	086	53図	03	9tr くびれ南	底部段								
33	087	53図	07	16tr くびれ北	底部段								
33	088	53図	09	16tr くびれ北	底部段								
33	089	54図	09	16tr くびれ北	底部段								
33	090	54図	09	16tr くびれ北	底部段								
33	091	54図	09	16tr くびれ北	底部段								
34	092	54図	05	9tr くびれ南	底部段						底24.0		段状時期調整あり
34	093	54図	05	9tr くびれ南	下段突帯～底部下端						27.8、底14.0	底24.4	
35	094	54図	05	9tr くびれ南	下段突帯～底部段						30.8		
35	095	54図	03	9tr くびれ南	底部段						底16.2	底25ヶ	
35	096	54図	09	17tr 後円北	底部段								

第３表　掲載資料観察表３（資料 065～096）

検図	検査番号	駅土写真	調査次	出土位置	部位・機要	通孔	裁制	測日突帯	口径	口縁高	各部径	肩部・突帯間距離（高）	新記事項
36	097	55図	09	16tr くびれ北	底部段								
36	098	55図	04	9tr くびれ南	底部段								
36	099	55図	09	16tr くびれ北	底部段								
36	100	55図	05	9tr くびれ南	底部段								
36	101	55図	05	9tr くびれ南	底部段								
36	102	55図	09	16tr くびれ北	底部段								
36	103	55図	09	16tr くびれ北	底部段						底18.8		
36	104	55図	09	9tr くびれ南	底部段						底13.9		
37	105	56図	09	17tr 後円北	相照鏡口縁部～肩部								内面尖付着
37	106	56図	09	17tr 後円北	小形器種口縁部								
37	107	56図	09	17tr 後円北	小形壺ヲ底部								小形壺焼成前底部刺傷後
37	108	56図	09	17tr 後円北	小形器種肩部								
37	109	56図	04	9tr くびれ南	小形器種肩部								
38	110	56図	03	9tr くびれ南	体中位透孔・線刻	三角	○						線刻:孔壁 複合線前文的
38	111	56図	05	9tr くびれ南	体中位透孔・線刻	三角	○						線刻:孔壁 複合線前文的
38	112	56図	05	9tr くびれ南	体中位透孔	三角	○						
38	113	57図	05	16tr くびれ北	体中位透孔・線刻	三角ヲ	○						線刻:孔縁取り
38	114	57図	05	9tr くびれ南	体中位透孔	三角							
38	115	57図	04	9tr くびれ南	体中位透孔	三角							
38	116	57図	03	9tr くびれ南	体中位透孔・突帯前面部	三角							
38	117	57図	04	9tr くびれ南	体中位透孔・線刻	三角	○						線刻:透孔縁取り
38	118	57図	05	9tr くびれ南	体中位透孔・線刻	三角ヲ	○						線刻:透孔縁取り
38	119	57図	03	9tr くびれ南	体中位透孔	三角							
38	120	57図	03	9tr くびれ南	体中位透孔	三角							
38	121	58図	05	9tr くびれ南	体中位透孔	三角							
39	122	58図	04	9tr くびれ南	体中位線刻		○						線刻:複合線前文的
39	123	58図	04	9tr くびれ南	体中位線刻		○						線刻:複合線前文的
39	124	58図	03	9tr くびれ南	体中位線刻		○						線刻:複合線前文的
39	125	58図	03	9tr くびれ南	体中位線刻		○						
39	126	58図	04	9tr くびれ南	体中位線刻		○						
39	127	58図	04	9tr くびれ南	体中位線刻		○						
39	128	58図	04	9tr くびれ南	体中位線刻		○						

第４表　掲載資料観察表４（資料 097～128）

棟図	報告番号	粘土写真	調査次	出土位置	部位・概要	透孔	横刻	回口突帯	口径	口縁高	各部径	肩部・突帯間距離（高）	特記事項
39	129	59図	03	9tr ＜ひれ前	体中位膨刻		○						横刻に粉黄な文様構成
39	130	59図	09	16tr ＜ひれ北	体中位透孔・横刻	巴形ヲ	○						透孔尾部変形
39	131	59図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	巴形							透孔尾部変形
39	132	59図	06	16tr ＜ひれ北	体中位透孔	巴形							
39	133	59図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	巴形							
39	134	59図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	巴形							透孔胎部変形
39	135	59図	04	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	巴形ヲ							透孔尾部変形
40	136	59図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔・横刻	円孔	○						
40	137	60図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	138	60図	04	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	139	60図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	140	60図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							中身前の壁部ヲ
40	141	60図	50	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							中身前の壁部
40	142	60図	50	19tr 前方北	体中位透孔	円孔							
40	143	60図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	144	60図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	145	61図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	146	61図	05	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	147	61図	03	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	148	61図	50	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
40	149	61図	50	9tr ＜ひれ前	体中位透孔	円孔							
41	150	61図	08	16tr ＜ひれ北	底部段ヲ面積張れ下端								
41	151	61図	05	9tr ＜ひれ前	体中位突帯前面部								ハケ調整後突帯貼付
41	152	61図	05	9tr ＜ひれ前	体中位突帯前面部								ハケ調整後突帯貼付
42	153	62図	03	6tr 2号北	口縁高上半高部								
42	154	62図	03	6tr 2号北	体中位突帯部						28.7		
42	155	62図	03	6tr 2号北	体中位突帯前面部								ハケ調整後突帯貼付

＊表示した計測値の単位はcmである。
＊「各部径」欄の「肩」は肩上端径、「①～③」は各々第１～第３突帯部径である。また突帯位置が特定できない場合は「上」「下」、もしくは部位表記を省略した。
＊「肩部・突帯間距離（高さ）」欄の「①」「②」は各々第１・第２突帯間距離、第２・第３突帯間距離である。
２条突帯および部位比定不可の場合は部位表記を省略した。
＊透し孔の完存例は少ない。「透孔」欄の円孔は残りが悪く、巴形透し孔特有の尾部が遺存しないものである。円形透し孔が確定できたわけではない。

第５表　掲載資料観察表５（資料 129～155）

報告書抄録

ふりがな	ふなおかやまこふんぐんⅡ(こふんじだいいぶつへん)
書　名	船岡山古墳群Ⅱ(古墳時代遺物編)
副書名	徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書
巻　次	第2冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第203集
編著者名	大久保　徹也(徳島文理大学文学部)
編集機関	徳島文理大学文学部文化財学科
所在地	〒769-2193　香川県さぬき市志度1314-1　TEL087－899－7100
発行年月日	西暦2019年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かがわちょう 香川町	37201		34° 16′ 11″	134° 1′ 59″	2008．7．22～2012．11．14	161㎡	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふなおかやまこふんぐん 船岡山古墳群	古墳	古墳時代前期前半 中世	1号墳 (前方後円墳) 2号墳 (墳形未確定)	埴輪・小形器種(内面朱付着土器他) 土師器・越州窯系青磁・釘	盛土と積石を併用した墳丘構築。外表は積石塚古墳と類似。 特異な円筒形埴輪

要　約

高松平野南部に所在する前期古墳の墳形確認調査。高松市教委と徳島文理大学文学部が連携協定を結び、重要遺跡の確認調査として実施した。2017年度に刊行した船岡山古墳群(遺構編)では以下の点を明らかにした。

既往の調査において双方中円墳の可能性が想定されていたが、前方後円墳1基と墳形不明墳1基の、2基からなることが判明した。さらに、墳丘構築に際しては、墳丘芯に近い工程では盛土・積石を多用し、墳丘外表は積石塚古墳と酷似した石積みで構築しており、完成形態として視覚的には積石塚古墳を強く指向している。地形的な制約や現地調達できる墳丘構築材の制約を克服して、意図的な積石塚古墳指向の墳丘を構築していたことが特筆される。

本報告では古墳時代遺物を報告する。その大多数は埴輪類である。二重口縁を付すが、朝顔形円筒埴輪の一種ではなく、円筒埴輪化した特殊壺形埴輪と評価すべき特異な形態を具える。鶴尾神社4号墳、稲荷山姫塚古墳、高松茶臼山古墳資料と共に、定式化埴輪採用以前の特異な土製儀器使用古墳の一例である。墳形・墳丘構造等の顕著な地域的個性と相俟って古墳時代初期の造墓・埋葬儀礼の様相を示す重要な資料といえる。

高松市埋蔵文化財調査報告第203集
徳島文理大学文学部・高松市教育委員会連携協定調査報告書
第2冊

船岡山古墳群Ⅱ
（古墳時代遺物編）

2019年3月29日

編　集　徳島文理大学文学部文化財学科
　　さぬき市志度1314-1
発　行　徳島文理大学文学部文化財学科
印　刷　有限会社 中央ファイリング